

靈界物語 第九卷 靈主體從 申の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第九卷』愛善世界社

1994(平成06)年08月18日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

目次

序歌 じよか

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇 ちやうと
長途の旅 たび

第一章 みやこおち
都落（三九四）

第二章 エデンの渡わたし〔三九五〕

第三章 三笠丸みかさまる〔三九六〕

第四章 大足彦おほたるひこ〔三九七〕

第五章 海上の神姿かいしゃう しんし〔三九八〕

第六章 刹那信心せつな しんじん〔三九九〕

第七章 地獄の沙汰ぢごく さた〔四〇〇〕

第二篇 一陽來復いちやうらいふく

第八章 再生の思さいせい おもひ〔四〇一〕

第九章 鴛鴦の衾をし ふすま〔四〇二〕

第一〇章 言葉の車ことば くるま〔四〇三〕

第十一章 蓬萊山ほうらいざん〔四〇四〕

第三篇 天涯萬里てんがいばんり

第一二章 鹿島立かしまだち〔四〇五〕

第一三章 訣別の歌けつべつうた〔四〇六〕

第一四章 闇の谷底やみたにそこ〔四〇七〕

第一五章 團子理屈だんごりくつ〔四〇八〕

第一六章 蛸釣られたこつた〔四〇九〕

第一七章 甞生かうせい〔四一〇〕

第四篇 千山萬水せんざんばんすゐ

第一八章 初陣うひぢん〔四一一〕

第一九章 悔悟の涙くわいごなみだ〔四一二〕

第二〇章 心の鏡こころかがみ〔四一三〕

第二一章 志藝山祇 (四一四)

第二二章 晩夏の風 (四一五)

第二三章 高照山 (四一六)

第二四章 玉川の瀧 (四一七)

第二五章 窟の宿替 (四一八)

第二六章 巴の舞 (四一九)

第五篇 百花爛漫

第二七章 月光照梅 (四二〇)

第二八章 窟の邂逅 (四二一)

第二九章 九人娘 (四二二)

第三〇章 救の神 (四二三)

第三一章 七人の女 (四二四)

第三二章	一絃琴 <small>いちげんきん</small> 〔四二五〕
第三三章	栗毛 <small>くりげ</small> の駒 <small>こま</small> 〔四二六〕
第三四章	森林 <small>しんりん</small> の囁 <small>ささやき</small> 〔四二七〕
第三五章	秋 <small>あき</small> の月 <small>つき</small> 〔四二八〕
第三六章	偽 <small>にせ</small> 神懸 <small>かむがかり</small> 〔四二九〕
第三七章	凱歌 <small>がいが</small> 〔四三〇〕

附録 第三回高熊山參拜紀行歌（二）

（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）
（ ）

序歌 じよか

やはられて水の都へ下りけり
瑞の御靈の神にならひて

千早振る神の教を傳へむと 善しも悪しきも難波江の

都の空をあとに見て 心も清き月照彦の

神の命と諸共に 花の都の鶏頭城

蒲團着て寝たる姿の東山 三十六峰風も冷き山嵐

春とはいへど北山に 雪は眞白に残りゐて

心の奥は鞍馬山 一つ火輝く愛宕の嶺

折から吹き來る嵐山 神の恵も高尾山

紅葉の色いろのわが心こころ 夜半よの嵐あらしに大足彦おほだるひこの

神かみのみたまと諸共もろともに 塞とりでも高たかき底そこの國くに

根ねもなき荊棘いばらに圍かこまれて 利鎌とがまの月つきは西にしの空そら

心こころもかたく七五三しちごさんの中うち 【いつか】は晴はれむ綾錦あやにしき

丹波たにはの空そらを眺ながめつつ 心こころをくばりし今日けふの宵よひ

早はや一年ひととせもめぐりきて 月つきぬ思おもひも幽世かくりよの

神かみの御業みわざの物語ものがたり 【東尾ひがしを】見みれば聖護院しやうごあん

神かみのま【森もり】も【良仁よしちか】や 教をしへの花はなも【櫻井さくらゐ】の

春はるも近ちかづく紀元節きげんせつ 教をしへの道みちの【加藤かとう】時代じだい

ひかれてここに【北村きたむら】の 水みづさへ清きよく月つき澄すめる

【池澤原いけざはら】の隈くまもなく 思おもはぬ恥はぢを【かき】の内うち

審判さばきの廷にはに出いでにけり あゝ思おもひきや思おもひきや

御國みくにのために盡つくす身みの 審判さばきの廷にはに立たたむとは

神かみの教をしへも白波しらなみの 醜しこのつかさの醜言しこことに

身はままならぬ籠の鳥みはままならぬかごのとり
 空鳴きわたる吐血鳥そらなきわたるほととぎす
 四匹の龜に迎へられしひきかめにむかへられ
 心も「淺野」の文學士こころもあさのぶんがくし
 籠を「出口」の「瑞月」がかごをでぐちのずめづつが
 高天原に歸りたるたかあまはらにかへ
 今日けふの生日いくひを思おもひ出いでで
 教をしへの御子みこの手てをかりて
 名なさへ目め出で度たき瑞祥ずあしやうの
 閣やかたに記き念ねんと書かきしるす
 ア、惟かむながらかむながら神々々かむながら
 御靈みたま幸さちはへましませよ。

大正十一年二月十二日

瑞祥閣に於て 王仁

一、本巻は南米（高砂島）より、北米（常世國）に亘る三五教宣傳隊の宣傳狀況を口述されましたもので、卷中テルの國とは智利、ヒルの國とは祕露、ハルの國とは伯刺西爾、カルの國とは哥倫比亞、ウヅの國とは亞爾然丁、目の國とは北米の墨西哥國、閒の國とは同じく巴奈馬國を指したものであります。

一、口述者瑞月大先生は、かつて該地方の靈魂旅行を遂げられ、數百萬年前の太古より數十萬年後の盡未來に亘る南北亞米利加の地形地勢を始め、山河草木を悉く熟知して居られるので、太古に於けるアマゾン河の名稱は天孫河と命ぜられ、その流域の兩岸には大沙漠があつたと言はれてゐます。

一、實に本巻は内容充實し、かつ最も教訓に富めるもので、筆録中あまりに耳が痛く、頭に響き、胸腹また煮え返る如き心地がしましたので、覺えず大苦巻と云ふ別名を本書に奉り、大いに苦くして苦しかつた記念としたのであります。

一、尚本巻より宣傳神を宣傳使として載せることにしました。第八巻までの宣傳

神しんも（せんでんし）と讀よむべきものでありますが、活くわつじ字（ルビ附）の都つが合ふじ上やう（せんでんしん）となつて居をるのですから、一應いちおう讀どく者しゃ諸しよ賢けんに御ご注ちう意いを促うながして置おきます。

大正十一年瑞月祥日

編者識

總說歌

宇宙うちうの外そとに身みを置おいて

五十六億七千萬歳ごじふろくおくしちせんまんさい

年とし遡かのほり靈界れいかいの奇くしき神代かみよの物語ものがたり

赤道せきだう直下ちよくかに雪ゆきが降ふり 太平洋たいへいやうの眞中まんなかに

縦たてが二千にせんと七百しちひやくり湮よこが三千さんぜん一百いつひやくり湮

黄泉よもつの島しまや龍宮城りうぐうじやう 譯わけのわからぬことばかり

羽根の生えたる人間や
角の生えたる人が出る
夢か現か誠か嘘か
嘘ぢやあるまい誠ぢやなかる
ホニにわからぬ物語。

天に輝く月日の玉を
取つてみよう
野心を起し

天教、地教の二つの山を
足の臺にして背伸をしたら

雲が邪魔して一寸にや見えぬ
見えぬ筈だよ盲の企み

そこでちよつくり息して見たら
雲が分れて銀河となつた

左手に太陽鷲掴み
右手に月をば「ひん」握り

顔に當てたら眼が出来た
顔に當てたら眼が出来た。

大正十一月二月十八日

於龜岡瑞祥閣

第一篇 長途の旅

第一章 都落（三九四）

春霞 靉 靆 韃 韃 韃 韃 韃 韃
はるがすみ たなび

花は 匂 へ ど 百 鳥 の
はな にほ ももどり

聲 は 長 閑 に 歌 へ ども
こゑ のどか うた

父 と 母 と に 別 れ た る
ちち はは わか

その 悲 し さ に 搔 雲 する
かな かきくも

心 の 空 も 烏 羽 玉 の
こころ そら うばたま

闇 夜 を 辿 る 思 ひ な り
やみよ たど おも

世 は 紫 陽 花 の 七 變 り
よ あぢさゐ ななかは

昨 日 や 今 日 と 飛 鳥 川
きのふ けふ あすかがは

淵 瀨 と か は る 人 の 身 の
ふちせ みづとこしへ ひと み

誰 に か よ ら む ヨ ル ダ ン の
たれ にかよらむヨルダンの

水 永 久 に 流 る れ ども
みづとこしへ なが

長 き 憂 ひ に 沈 み つ つ
なが うれ しつ

此 世 の 憂 を み は し ら の
このよ うき

姫 の 心 ぞ い ぢ ら し き
ひめ こころ

父 と 母 と の 懐 を
ちち はは ふところ

浮世の風に煽られて
【いたいけ】盛りの女子が

淋しき冬の心地して
父に會ふ日を松代姫

松の縁のすくすくと
榮えて春も呉竹の

直ぐなる心の竹野姫
露に綻ぶ梅ヶ香の

姫の命の唇を
開いて語る言の葉は

降る春雨の濕り聲
恵も深き垂乳根の

母は此世を後にして
黄泉路の旅に出でましぬ

娘心の淋しさに
色も香もある桃上彦の

父の命の只一人
國の八十國八十島の

何處の果てにいますとも
戀しき父に廻り會ひ

探ねむものと三柱の
皇大神を祀りたる

名残も惜しきエルサレム
都を後に旅衣

草鞋に足をくはれつつ
山野を越えて遙々と

目あてもなつの空かけて
進み行くこそ哀れなり

主人あるじの君きみによく仕つかへ 忠實まめやかなりし下男しもをとこ

心こころも清きよき照彦てるひこは 姫ひめの姿すがたの何いつ時つとなく

珍うつつの館やかたに消きえしより 心こころも騒さわぎ吹ふく風かぜに

櫻さくらの花はなの散ちる如ごとく 右みぎや左ひだりや北南きたみなみ

探たづね廻まはれど音沙汰おとさたも なくなく通かよふ松風まつかぜの

雨戸あまどを叩たたくばかりなり 月つきにも紛まがふ顔かんばんせの

常磐ときはの松まつに宿やどりたる 心こころも清きよき松代まつよひめ姫ひめ

雪ゆきに撓たわみし「なよ」竹たけの 纖弱かよわき姿すがたの竹野たけのひめ姫ひめ

何處いづこをあてとゆきの肌はだ 出いでましぬるか照彦てるひこの

心こころの空そらも搔かきくも曇くもる 浮世うきよの暗やみに芳かんばしき

只ただ一輪いちりんの梅うめヶ香か姫ひめの 行方ゆくへを探さがし求もとめむと

ホーホケキヨつひひすの鶯うぐいすの 聲こゑに送おくられ山河やまかはを

徒歩とほ々々とほ渡わたる手弱たをやめ女の 杖つゑや柱はしらと頼たのみてし

頼たのみの綱つなも夢ゆめの間まの 夢ゆめか現うつつか五月空さつきそら

暗に紛れてわが父の

行方は何處か白浪の

大海原を乗り越えて

常世の國に出でますか

嗚呼いかにせむ雛鳥の

尋ぬる由もなくばかり

昔はときめく天使長

高天原の守護神

勢竝ぶものもなく

空行く雲もはばかりし

神の命の貴の子の

蝶よ花よと育くまれ

隙間の風にもあてられぬ

纖弱き娘の三人連れ

黄金山を後にして

踏みも慣はぬ旅の空

何處の果てか白雲の

靉靄き渡るウヅの國

父の命のましますと

夢に夢みし梅ヶ香姫

花をたづぬる鶯の

ほう法華經のくちびるを

初めて開く白梅の

二八の春の【やさ】姿

二九十八の竹野姫

よ【はたち】昇る月影の

梢に澄める松代姫

松のミロクの御代までも

戀しき父に淡路島

【つたひ】つたひて三柱の

姫の命の後を追ふ

心の空ぞ哀れなり

心の色ぞ麗しき。

松、竹、梅の三人の娘は、やうやうエデンの渡場に辿りつきぬ。此處に五人の里人は、月雪花にも勝る手弱女の、此方に向つて徐々と歩み來る姿を眺めて囁き合へり。

甲「オイ、來たぞ來たぞ、お出でたぞ」

乙「何がお出でたのだ」

甲「此エデンの河は本當に妙な河だよ。昔は南天王様が、此河上から大きな龜に乗つてお出でになつたのだ。此河をどんどん上つて行くと天の川に連絡して居るのだ。南天王様は其後は日の出神さまとかになつて、吾々共を捨てて鬼武彦さまを後に置いて天に歸られたと云ふ事は貴様も聞いて居るだらう。その時にも八島姫、春日姫と云ふ、それはそれは綺麗な天女が降つて來たよ。世界の洪水があつ

てから、この顯恩郷のものは方舟に乗つて、誰も彼も地教の山に救はれた。其時だつて地教の山には高照姫、言靈姫、龍世姫、眞澄姫、其他澤山の、それはそれは美しい雨後の海棠のやうな艶つぽい女神たちに會つた事がある。あれを見い、今其處へお出でになる三人の姫神様は、地教の山から、天の河原に棹さしてお降り遊ばした天女だらうよ。早く船の用意をして顯恩郷へ寄つて貰つたらどうだ」

丙「五人の男に三人の姫様とは、ちと勘定が合はぬじやないか。もう二人あると恰度都合がよいのだがなあ」

乙「また貴様「デレ」て居よるなあ。貴様の顔は何だ。「すつくり」紐が解けて仕舞つて居るよ。嫌らしい目遣ひをしよつて、貴様のやうな蟹面に、アンナ立派な女神がどうして見かへつて呉れるものか。あまり高望みをするな。「とぼけ」ない、貴様、春の日に夢でも見て居よるのだな」

丙「夢ぢやなからうかい。開關以來アンナ美しい女神は見た事がないからなあ」

甲「決つた事だ。お前達には分らぬが、あの御方は柵機姫の神様だ。一年に一度夫に御面會をなさると云ふ事だが、其お婿さまの日の出神様が、あまりお氣が多

いので、此頃また、天の川を下つて世界中を宣傳歌とやらを歌つて廻られたと云ふ噂だから、大方この邊を探したら會へるかも知れないと思つてお出でになつたのだよ」

乙「日の出神さまも餘程の、目力一々の十（助平）だな。欲の深い、三人もあのやうな奥さまを持つてゐらつしやるのか。俺だつたら一人でも辛抱するがなあ」
かく雑談に耽る折しも、眉目清秀なる二十四五歳と覺しき男、淺黄の被布を纏ひ、襷を十字に綾取り、息急ききつて此方に向つて「オーイ、オーイ」と呼ばはりながら進み来る。

（大正一一・二・一二 舊一・一六 加藤明子録）

第二章 エデンの渡（三九五）

松、竹、梅の三人の美人はエデンの渡し場に漸く辿り着きぬ。松代姫は五人の

男をとこに向むかひ、豊ゆたかな頬ほほに紅くれなゐの潮うしほを漲みなぎらし、潤うるほひのある涼すずしき眼まなこに緑みどりの黒くろ髪かみの亂みだれを繕つくろひながら、

「もし、貴方あなた等がたはこのお里さとの方かたで御座ございますか。何卒なにとぞ妾わらはを向むかふ岸ぎしへ渡わたして下くださいませぬか」

甲かみ「ヤ、天あまの川がはを下くだつて御出おいでなさつた棚機たなばた姫ひめ様さまで御座ございますか。ハイハイ喜よろこんでお供ともいたしませう。天あまの川がはのやうに深ふかい事こともありませぬ、又また高たかいこともありませぬから、滅多めつたに天てんへ落おちる筈はずはありませぬ、サアサ、天てんの棚機たなばた姫ひめ様さま御一ごいち同どう、私わたくしの宅たくへおいで下くださいませ」

「イヤ、妾わらはは天てんから來きたのでは御座ございます。聖地せいぢエルサレムから一人ひとりの父ちちを探たづねて、ウヅの國くにへ參まゐるもので御座ございます」

乙おつ「ア、お前まへさまは矢張やっぱりさうすると人ひとの子こだなア。あまり美うつくしいので天女てんによの天あま降くだりか、棚機たなばたさまだらうかと、今いまも今いまとて五人ごにんの者ものが噂うはさを致いたして居をりました。ア、一寸ちよつと見みれば年としは二八にちか二九にくからぬ、十九つづか二十はたちの花盛はなざかり、眞實ほんとに惜をしいものだね。そして今いま貴女あなたは一人ひとりの父ちちを探たづねると仰有おつしやつたが、其そのお父とうさまと云いふのは何方どなた様の

事ことですかい」

「ハイ、妾わらはの父ちちは聖地エルサレムの元もとの天使長てんしちやうでありました桃上彦命ももがみひこのみことで御座ございます」

丙へい「ヤア何なんだい、極悪無道ごくあくぶだうの桃上彦命ももがみひこのみことの娘むすめかい、何なんとまあ烏からすが鶴つるを生うんだのか、
鳶とびが鷹たかを生うんだと云いふのか、世よの中なかは變へんなものだなア。吾々われわれの妹いもうとも桃上彦命ももがみひこのみことの家けら
來いの奴やつに誘拐かどわかされて今いまに行衛ゆくへも知しれず、如何どうなつた事ことかと、毎まい日にち日ひ妹いもうとの在處ありかを
心こころにかけて忘わすれた違いとまはないのだ。思おもへば敵かたきの端はしだ、ヤアもう今けふ日は妙めうな心持こころもちにな
つて來きた、何程なにほど綺麗きれいな女をんなでも敵てきの娘むすめと聞きけば、エー面黒おもくろくもない」
と黒くろい腕うでを又またツと出だし、握にぎり拳こぶしを三さん人にんの娘むすめの前まへにつき出だしながら、
「ヤイ、貴様きさまは神様かみさまだと思おもつて、チツトは俺等おいらも面喰めんくらつて居ゐた處ところだ。それに、そ
つちから吾われと吾手わがてに桃上彦ももがみひこの娘むすめと名乗なつた以上いじやうは、ヨモヤそれに相違さうゐはあるまい。
サアかうなる以上いじやうは五ご人にんの荒あらくれ男をとこに三さん人にんの孱弱かよわい女をんなだ。ジタバタしたつて、も
うあかぬ。潔いさぎよしく俺おいらの女房にようぼうとなるか。嫌いやぢやなどと貴様きさまの白しろい首くびを横よこにでも振ふつ
て見みよれ、この鐵拳てつけんが貴様きさまの頭上づじやうにポカンと御見舞おみまひだぞ。サア返答へんたふはどうだ」

乙「ヤイヤイ、見れば見るほど美しい、惜しいものだ。いづれ貴様らも一篇は夫
を持たねばなるまい、ドンナ男に添ふのも因縁だ。俺らの女房になる氣はないか。
ヤイ何、嫌と云ふのか、素直に首を縦に振つてアイと云はつしやい。お姫さま、
之程恐く見えても矢張り男と女だ。女にかけたら涙脆いものだよ。一黒、二赤、
三白といつて、黒い奴は味がよいものだ。どうだ、如何だい、返答聞かう」
「オホ、々、皆さま、こんな不束な女に對してお黴りなさるのですか。冗談も
良い加減にして下さいな。妾の父は貴方の仰有る通り悪い者で御座いましたか知
りませぬが、妾には何の罪咎もない。幸ひ女の身の姉妹三人、旅は道伴れ世は情、
世界に鬼はないと聞きました。何卒妾にそんな事仰有らずにこの河を渡して下さい
いませ」

丙「何卒妾にソナ事仰有らずに渡して下さいませ、ソリヤ、何吐しよるのだ。
此渡しを渡して下さいませ、なんて、此方が石のやうに硬く出れば綿のやうに柔
かく出よつて、イヤモウ優しい面をして酔でも菴菴でもゆく奴ではないワイ。オ
イ皆のもの、掛合ふも面倒臭い。此奴ら三人の奴をこの船に乗せて、河の眞中に

連れて退引きさせぬ談判をやるのだ。兔に角、船に乗せた上は此方のものだ。河の眞中に船をとめてゆつくりと談判をやるに限る。女の一心、岩をも徹すと云ふが、男の一心は一口、半句も「いは」いでも徹すのだ。河の中へ伴れて行けば、變り易きは女の心、乗りかけた船だ、ア、ア仕方がない、それなら貴方等の仰有る通りに致します。此エデンの河の様に、深くふかく「かは」いがつて下さいと仰有るのは目のあたりだ。淵瀬と變る人の行末、昨日や今日の飛鳥川、明日をも知れぬ生命だ、一寸さきは暗の世だ。たとへ一息の間でもコンナ綺麗な女と添ふ事が出来たら一生の光榮だ。イヤ三人のお方、船に乗つて下さい、乗せませう。その代りに、吾々ものせて貰はなならぬからな、宜しいかな。親切を盡して助け助けられ、世の中はまはり持ちだ。浮世の船に棹さして激しき河の瀬を渡るも何かの因縁だらう。此處は三途の川ぢやない、花は麗しく果物豊かな顯恩郷だ、イヤ貴女等も顯恩郷の花となつて睦じく暮すのだよ。さうなれば妹の仇も何も此エデンの河へサツパリ流れ勘定だ。流れ川で尻を洗つたやうにすつかり打ち解けて、清い清い水も洩らさぬ顯恩郷の恵みを楽しむのだな。賣言葉に買ひ言葉、魚心あ

れば水心あり、斯う見えても眞實に優しい男だよ。人には添うてみい、馬には跨つて見い、船には乗つて見いだ。さあ早く乗つたり乗つたり」

竹野姫はためらいながら、

「姉さま、妹、如何致しませう。妾恐ろしいワ」

「姉さま、やめませうか、もう歸りませう、生れてからコンナ恐い目に遇つた事

はありません。ア、誰ぞ助けに来て呉れるものはありますまいかね」

と梅ヶ香姫は憂ひを浮べて涙を袖に拭ふ。

甲「さあ早く乗らぬかい、何を愚圖々々してるのだ。乗せて呉れえと頼んだぢや

ないか。吾々は色々と評議をして、到頭お前たちを乗せてやることになつたのだ。

人の親切を無にして乗らぬと云ふのか。この場になつて乗るの乗らぬのと、そん

な馬鹿なことがあつたものかい、乗らぬなら乗らぬで宜い、男の一心【いは】い

でも徹す、フン縛つても乗せてやるのだ」

と云ひながら五人の男は、今や三人の美人に向つて亂暴に及ばむとする。此時淺

黄の被布に襷を絞取つた男、息せききつて此場に現はれ、

「ヤアヤア、待った待った、待てと申さば待つが宜からうぞ」

甲「ナ、ナ、ナ、何邪魔をするのだ、唐變木奴が。九分九厘と云ふ處へやつて来よつて、待つも待たぬもあつたものかい、邪魔をひろぐと生命がないぞ」

一人の男はカラカラと打笑ひ、

「吾こそは地教の山に鎮まる大天狗だ。愚圖々々吐すと、腕を【むし】り股を引裂き、エデンの河に投込んでやらうか」

一同は、

「何、その廣言は後にせよ」

と、各自に拳骨を固めて四方より打つてかかるを、一人の男は縦横無盡に五人の間を驅廻り、襟髪とつてドツとばかりエデンの流れに向つて投げつけ、また来る奴を首筋掴んで、以前の如くドツとばかりに投り込む早業。残る三人は捻鉢巻をしながら又もや武者振りつくを、

「エイ面倒」

と足をあげてポンと蹴る途端に、ヨロヨロヨロと【よろめ】き大地に大の字に倒

れ伏す。残る二人は雲を霞と韋駄天走り……。松、竹、梅の三人は地獄で佛に會うたる心地して、一人の男の前に現はれ兩手をつき、

松代姫「何處の方かは知りませぬが、危き處をお助け下さいまして……」
と云はむとすれば、男は大地に平伏して、

「イヤ勿體ない、お姫様、私は照彦で御座います。一足の事で大變で御座いました。九分九厘で神様がお助け下さったのでせう。私も「今日に限つて思はぬ力が出ました」。これ全く國治立大神の御神徳の然らしむるところ、此處で一同揃うて神様に御禮を致しませう」

「ア、汝は照彦、ようまあ、いい處へ來て呉れました。妾ら姉妹はお前に黙つて來て濟まなかつたが、お前に旅の苦勞をさすのが可愛さうだと思つて、姉妹三人人牒し合せ、此處まで來るは來たものの、虎、狼、獅子、大蛇の荒び猛ぶ山の尾踏み越え、心淋しき折柄に、此渡し場にヤツト一息する間もなく、又もや荒くれ男の無理難題、進退谷まつた其の刹那、お前に會うたのは全く神様のお引合せ、何卒、父上の國まで送つて下さらぬか」

照彦は、

「ハイ」

と答へて平伏する。二人の妹は嬉しさうに、

「ア、照彦、能う来て下さった。サアサ一同、お祝詞を奏上げませう」

茲に四人の主従は路傍の芝生に端坐し、拍手をうって天津祝詞を奏上し、神恩を感謝しぬ。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 北村隆光録)

第三章 三笠丸(三九六)

主人を思ふ真心の色にも優る照彦が

赤き心は紅葉の父に會ふ日を松代姫

心の竹野ある限り 山と積みてし苦しさを
谷の戸開けて鶯の 鳴く音淋しき梅ヶ香姫の
貴の命と諸共に エデンの河を打渡り
世は九分九厘足曳の 山を打越え野を涉り
心も勇む四人連 心つくしのアフリカの
ヨルの港に着きにけり。

今や船は帆に風を孕んで 智利の國へ向はむとしてゐる。 船人は聲を限りに出船
の時迫れるを叫んでゐる。 數十の乗客は先を争うて乗込んだ。 松代姫の一行も漸
くにして船に乗りたるか、 三笠丸は青葉滴る岸を離れて西へ西へと波の琴を弾じ
ながら、海面靜かに滑つて行く。

日は漸く斜に、さしもに廣き大海原は金波銀波の錦の蓆、なみなみならぬ眺め
なりけり。 船頭は聲を張り上げ、

□ 筑紫の國をあとに見て　ウヅの都へはせて行く
道は三千三百里　通ふも遠き波の上[□]

と暢氣さうに唄ふ。一行はあと振返り流れ行く雲を眺めて望郷の念に驅らるる折
しも、日は漸く水平線下に姿を没し、夜の帳はおろされて、黑白もわかぬ波の上、
滑り行く海面は僅に船の微な音の聞ゆるのみ。この時船の一隅より、

□ 朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも

筑紫の海は深くとも　天津御空は高くとも

神の恵みに如かざらめ　神の【いき】より生まれたる

わが垂乳根は今いづこ　母は黄泉に出でまして

何の便りもなみの上　あとに残りし桃上彦の

父の命の在處をば　探ねむための旅の空

神が表に現はれて　善と悪とを立て別ける

この世を造りし神直日

罪科深きわが父の

穢れをここに荒磯の

尊き夢を三笠丸

ウヅの都を立出でて

【うづ】まきわたる和田の原

親島子島のここかしこ

數多浮べる世の中に

一人の親に生別れ

雲霧わけて進む身の

みつの身魂ぞあはれなり

あゝ皇神よ皇神よ

心も廣く大直日

見直しまして片時も

いと速けく父上に

會はせ給へよわだつ神

風凧ぎ渡る海原は

波も靜かにをさまれど

親を慕へる雛鳥の

心の波は騒ぐなり

心の波は騒ぐなり

ただ何事も人の世は

直日に見直し聞き直し

身の苦しみは宣り直す

神の教と聞きつれど

山より高く海よりも

深き恵みの神の裔

桃上彦のわが父に

いつか相生淡路島

通ふ千鳥の聲高く

歌ふ心を平けく

いと安らげく聞しめせ

とやさしき女の聲聞え來る。更け渡る春の夜の大空は、何處ともなく【ドンヨリ】として、星は疎らに、あちらに一つ、こちらに三つ、五つ、十と、雲の帳をあけて覗くのみなり。

船客はそろそろ白河夜船を漕ぎ出し寢に就く。折柄の東風は【ぴたり】とやみて、肥えた帆は瘦せしほみ極めて靜寂なり。船客の四五人は眠りもやらず雑談を始めて居る。

甲「オイ、今のやさしい聲はあら何だ。月は照るとも曇るとも、ナンテ云つてるやうだが、此頃は眞の暗だ。照るも曇るもあつたものか、譯のわからぬ事を云ふ奴だね」

乙「貴様、わからぬ奴だな。ありや宣傳歌だよ。今晚の事を云つてゐるのではないよ。ありや三五教の宣傳使が歌ふ神歌だ。よく聞いて見よ、なかなか味があるよ」

甲「それでも貴様、海の上だと云つたよ。現在の事を云つてゐよるのだ。貴様は女宣傳使だと思つて辨護をするのか。本當に抜目のない奴だ。船に乗りながら又重ねて船に乗らうなんて、ソナ野心を起したつて九分九厘行つたところ、

「クレン」と覆されるのだ。この間の朝日丸に乗つた時に、三五教の宣傳使が、改心せぬと何時船が覆るやら知れぬと云つてゐたよ」

丙「船の中で「かへ」るのかへらぬのと縁起の悪い事を云ふない」

甲「ナンボ船だつて、行き切りにはなりはしない。いづれ一篇は歸つて來るのだ。

「かへ」らいで堪らうかい。今朝も出掛に俺の所の乙姫が、用がすみたら一時も早く歸つて頂戴、三笠丸に乗つて智利の國へ行つて、妙な船に乗つて「みかさ」

でもかかぬやうにして、早く歸つて下さいねえ、ナンテ吐かしよつて、こなさまの肩をトントンと叩きよつた。そしてな、早く歸つて妾の船に、とよ」

丙「莫迦にするな。何だい乙姫ナンテ、【どてかぼちや】の【ひちおたふく】みたやうな嬢を大事さうに、乙姫が聞いて呆れるワ。貴様が智利の國で【かさ】で

も被つて戻つて來てな、妙な事をやつて貴様の嬢の鼻を【おと】姫にするのだろ、

其處らが落ちだよ」

乙「オイオイ、三人も別嬪が乗つてゐるぢやないか。そんな仕様もない話をする
と愛想を盡かされるよ」

丙「愛想を盡かされたつて構ふものか。俺等の自由になるのではなし、貴様、矢
張り色氣があるね」

乙「あらいでかい、この世の中に色氣と自惚と欲のない奴があるものか。貴様は
欲はない、【よくない】奴は所謂悪人だよ」

「何を吐かしよる」
と聲を目當に頭をポカンとやつつける。

「アイタタ、こら喧嘩をするのか。地中海の汐風に曝したこの腕だぞ。サア来い
と暗闇紛れに拳骨を固めて、見當を定めてブン殴れば、

「キヤア」

と女の聲。

「やあ、これは失敬。狸の奴、替玉を使ひよつたな。聲を上げぬか、卑怯ぢやな

いか

くらがりから、

丙「俺もこんな【ひけふに】陥つては頭が上らぬワイ。【チウ】の聲も出ぬ事は
ない事はない」

丁「まるで鼠の様な奴だなア」

と囁きある。忽ち沖のあなたより荒浪狂ふ音迫り来り、咫尺を辨ぜぬ闇の中に、
波は鬣を振つて舷に噛みつき来りしが、此時又もや男の聲として、涼しき宣傳歌
は船の一隅より聞え来りぬ。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 池澤原次郎録)

第四章 大足彦 (三九七)

さしもに廣き海原を、天に憚らず地に怖ぢず、我物顔に吹きまくつた海風も、

瞬またたく間うちにピタリと止やみたれば、又またもや船客せんきやくは轉さへつり出だしたり。

甲かふ「ヤアヤア、滅多めつた矢鱈やたらに脅おどかしよつた。廣ひろい海うみの平ひらたい面つらを、春風はるかぜ奴めが吹ふき捲まく

つて乙姫おとひめさまの裾すそまで捲まくりあげて、玉たまのみ船ふねを三笠丸みかさまる、と云いふ體裁ていさいだつたワ」

乙おつ「また「はしや」ぎよる。貴様きさまは風かぜが吹ふくと、船ふねの底そこに噛かぢり付ついて震ふるうて居ゐ

るが、風かぜが止やむと、蟻ぶと子とか蚊かのやうに、直ぢきに立たち上あがりよる、靜しづかにせぬと、また

最前さいぜんのやうな波なみが立たつぞよ」

「立たたいでかい、船ふねを見みたら楫かぢが立たつのは當あたり前まへだい。立たつて立たつて立たちぬきよ

つてカンカんだ。カンカンカラツク、カーンカンぢや。カンカン篋棒へらぼう、ボンボラ

坊主ぼうずのオツトコドツコイ、坊主頭ぼうずあたまに捻鉢卷ねぢはちまきで、クイークイーだ」

「ソラ何なんだい」

「船ふねの音おとだい、船ふねを漕こぐ楫かぢの音おとだい。さうクイ込こんで尋たづねて呉くれな、九分九厘くぶくりんで

また「へかる」と困こまるからなあ」

「へかる」つて何なんだい」

「へかる」と言いへば大槪分たいがいわかつたものだい。縁起えんぎが惡わるいからな、返かへして言いうたの

だよ」

「覆すなんて、尚悪いぢやないか。蛙の行列、向ふ不見轉の土左衛門奴が」

「土左衛門さ……この方は……クイクイ言ふなと云ふが、世の中はクイとノミ

とだ」

丙「アイタ、タ誰だい、俺の鼻を掴みよつて、ハナハナ以て不都合千萬な」

丁「さなきだに、暗けき海の船の上、鼻【つま】まれて、【つま】らないとは」

丙「何だ、松の廊下ぢやあるまいし、馬鹿にしよるな。俺も貰ひ捨てにしてはハ

ナハナ以て詰らないから、オハナでも祝うて上げませうかい」

猿臂を伸ばし、暗がりくらに紛まぎれて見當けんたうを定さだめ、此處ここらに聲こゑがしたと言いひながら、

いやと言いふほど鼻柱はなばしらを【つま】みグイと搥ねぢる。

丁「イイ痛い、【はな】さぬか はなさぬか」

丙「放はなして堪たまらうか、【このハナ】はな、萬劫まんごふ末代まつだいミロクの代よまでも【はな】し

やせぬ。ナアナアお【はな】、お前まへと俺わしとの其仲そのなかは、昨日きのふや【けふかたびら】の

事ことかいな」

甲 ㊦ エエイ、縁起の悪い、【けふ】帷子も【あす】帷子もあつたものかい。船の上は縁起を祝ふものだ、京帷子とは何の事だい」

丙 ㊦ 昨日や今日の飛鳥川、【かはい】かはいと啼く鳥、黒い鳥が婿にとる、とる楫なみも面黒く、黒白も分かぬ眞の闇、此奴の顔は炭か炭團か、まつ黒けのけまつ黒けのけまつ黒けのけ……。人の鼻を掴みよつて、あまり馬鹿にするな。

俺の顔は蓮華臺上だ。ツウンと高く秀でてこの【はな】姫がお鎮まりだ。この【はな】さまを何と心得て居るか。俺はかう見えても、テ、天狗さまでないよ、天教山の生神さまだ。どんなお方が落ちてござるか判らぬぞよ、と三五教が言つて居らうがな」

丁 ㊦ 途中の鼻高、鼻ばかり高うて目の邪魔をして、上の方は見え、向ふは尚見え、足許はまつくるけ、深溜りに陥つて泥まぶれになつて、アフンと致さな目が醒めぬぞよ」

㊦ そんな事、誰に聞き囁りよつた。馬鹿な奴だなア。それは貴様の事だい。貴様は耳ばかり極樂へ行きよつて、百舌鳥のやうに囀るから、キット貴様が死んだら、

木耳きくらげと數かずの子こは高天原たかあまはらへ往いつて不具者かたわになり、根ねの國くにに落おち行ゆくのが落おちだよ」

「木耳きくらげや數かずの子こが天國てんごくへ行いつたつて、それが何なんだい」

「馬鹿ばかだなあ。貴様きさまの耳みみはいい事ことばかり聞きくらげの耳みみだ。それがカンピンタンになつて木耳きくらげになるのだ。さうして行おこなひもせず、舌したばかり使つかふから、舌したが乾物ひものになつて數かずの子こになるのだ。貴様きさまは根ねの國くにに往いつてなあ、ア、私わたくしは三五教あななひけうの結構けつこうな教をしへばかり【きくらげ】だつたが、聞きいただけで行おこなひをせなかつたので、こんな處ところへ來きたのか。ア、ア、取とり返かへしのならぬ事ことを、【したあ】したあと吐ぬかして、吠ほえ

面づかわく代物しろものだらうよ」

何人なんびととも知しれず、幽かすかなる歌うたの聲こゑ聞きえ來きたる。

怪けしき憂世うきよに大足彦おほだるひこの 神かみの命みことは天使長てんしちやう

千々ちぢに心こころを盡つくしたる 月照彦つきてるひこと諸共もろともに

この世よを造つくり固かためむと 東ひがしや西にしや北南きたみなみ

天あめが下したをば隈くまもなく いゆき巡めぐりし足眞彦だるまひこ

九山八海の山に現れませる 木の花姫の色も香も

めでたき教の言の葉を 残る隈なく足眞彦

根底の國に落ち給ひ 鬼や大蛇や醜探女

百の枉津を言向けて ここに現はれ三笠丸

松竹梅の名を負ひし 桃上彦の残したる

うづのみ子をば救はむと 月照彦の命もて

浪路かすかに守りゆく 日は紅の夜の海

からき潮路を掻分けて いよいよ父に巡り會ふ

ウヅの都にうづの父 神の水火より生れませる

貴三柱の姫御子よ 黄泉の坂の桃の實と

世に現れて現身の 此世を救ふ伊邪那岐の

神の命の杖柱 意富加牟豆美となりなりて

千代に八千代に永久に 神の柱となりわたれ

この帆柱の彌高く 目無堅間の樟船の

かたきが如く村肝の心を練れよ松代姫

心すくなる竹野姫 一度に開く梅ヶ香姫

匂ふ常磐の松の代を まつも目出度き高砂の

夜なき祕露の都路へ 渡りて月日も智利の國

はるばる越えて巴留の國 巴留の都を三柱の

救ひの神と現れませよ 心は清く照彦の

隨伴の司と諸共に 智利の都を祕露の如

輝きわたせエルサレム 貴の都をあとにして

ウヅの都に進み行く 此の世を救ふ四柱の

今日の首途ぞ雄々しけれ 今日の首途ぞ目出度けれ

甲「ヤア、あんな事を云ふ奴は誰だい。俺らが鼻を【つま】み合ひして喧嘩をし

て居るのに、陽氣な聲を出しよつて、【はな】の都も【てる】の都もあつたもの

か。何處の奴だい。そんな事を言ひよると、この拳固で貴様の頭をポカンとハル

の國だぞ。テルの曇るの、ヒルのヨルのと何を吐きよるのだ。今はヨルだぞ、

【よる】べ渚の拾ひ小舟だ

乙「コラコラ、拾ひ小舟と言ふことがあるか」

「ヤアヤア捨てとけ、ほつとけだ。これも俺の捨臺詞だ。スツテの事である荒波に生命までも捨てることだつた。本當にあの風が今までつづきよつたら、貴様等の生命はさつぱりステテコテンノテンだ。テントウさまも聞えませぬ。ブクブクブクと泡を吹きよつて、今頃にや根の國、底の國の御成敗だよ」

夜はほのぼのと明け渡る。さしもに廣き海原を、あちらこちらと鷗や信天翁が

飛びまはりゐる。

甲「オーイ、貴様らのお友達が澤山においでだぞ、【あはう】どりが」

この時前方より、白帆をあげた大船小船、幾十隻となく此方に向つて、艦の音勇ましく風を孕み進み來るあり。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 東尾吉雄録)

第五章 海上の神姿（三九八）

數十艘の大船小船は眞帆に風を孕んで、堂々と陣容を整へ進み来る。三笠丸は風に逆らひながら、櫂の音高く進み行く。向ふの大船には、氣高き女神舷頭に立ちあらはれ、涼しき瞳滴るが如く、楚楚たる容貌、窈窕たる姿、いづこともなく威嚴に満ち東天を拜して何事か祈るものの如くなり。傍に眉秀で鼻筋通り、色飽くまで白く、筋骨たくましく、眼光炯々として人を射る大神人立ちゐたり。船中の人々は期せずして此の一神に眼を注ぐ。

□ 限りも知れぬ波の上 救ひの船をひきつれて
黄泉の國におちいりし 百の身魂を救ひ上げ
仰ぐも高き天教の 山にまします木の花姫の
神の命の御教を あをみの原の底までも
宣べ傳へゆく宣傳使 神伊邪那美の大神の

御許に仕へ奉る 吾は日の出神司

醜のあつまる黄泉島 黄泉軍を言向けて

世は太平の波の上 皇大神に従ひて

救ひの神と顯現し 善と惡とを立別る

この世を造りし神直日 心もひろき大直日

直日のみたまを楯となし 嚴のみたまや瑞みたま

竝んで進む荒海の波をも怖ぢぬ荒魂

風も鎮まる和魂 世人を救ふ幸魂

暗世を照す奇魂 茲に揃うて伊都能賣の

神の命の神業は 山より高く八千尋の

海より深き仕組なり 海より深き仕組なり

と歌ふ聲も風にさへぎられて、終には波の音のみ聞えけり。照彦はこの歌に耳を

すませ、頭を傾け、

「モシ松代姫様、今往きちがひました船の舷頭に立てる二人の神様は、恐れ多くも伊邪那美の大神様と、天下に名高き日の出神様でありませう。幽かに聞ゆる歌の心によつて、慥に頷かれます。伊邪那美の命様は、根の國、底の國へお出で遊ばし、最早や此の世に御姿を拜することの出来ないものと、私共は覺悟致してをりました。然るに思ひもかけぬ此の海原で、伊邪那美の神様にお目にかかるといふは、何とした有難い事でございませうか。あゝ實に、貴女様はお父上を探ねてお出で遊ばす船の上で、あの世へ一旦行つた神様が、再び此の世へ船に乗つて現はれ、何處かは知らぬが東を指してお出ましになつた事を思へば、お父上に御面會遊ばすのは決して絶望ではありませぬ。否お父上のみならず、母上も御無事でゐらつしやるかも分りませぬ。何と今日は目出度い事でございませう」

「あゝ、あの氣高い御姿を妾は拜んだ時、何とも言へぬ崇高な感じがしました。又日の出神様とやらのお姿を拜した時は、何となくゆかしき感じがして、わが父上の所在を御存じの方のやうに思はれてなりませぬ。もしや父上は、あのお船にお乗り遊ばして御座るのではあるまいか。あゝ何となく戀しい船だ」

と少しく顔の色を曇らせながら物語る。竹野姫は、

「お姉さま、お父さまに會はれた上に、又お母さまに會へるやうなことが御座いませうかな」

梅ヶ香姫は靜に、

「妾の「いつも」の夢に、お父さまには何時も會へますが、お母さまに會つても、何だか妙な霞に包まれてハッキリ致しませぬ。神様のお蔭で父上にはめぐり會ふ事は出来ませうが、お母さまに會ふといふ事は覺束ないでせう」

主従四人は斯くの如き話を船の片隅で「ひそひそ」としてゐる。船中の無聊に堪へかねて、腰の瓢から酒をついで、互に杯を交す三人の若者あり。追々と酔がまはり、遂には巻舌となり、

甲「タ、タ、タ、誰だい。この荒い海の中で、死んだお母さまに會ひたいの、會はれるのと言ひよつて、縁起の悪い。ここは何處だと思つてるのかい、太平洋の眞中だぞ。三途の川でも血の池地獄でもないワ。死んだ者に、それ程會ひたきや、血の池へでも舟に乗つて渡らぬかい。クソ面白くもない。折角甘い酒がマツくな

つて了しまふワ」

乙おつ 貴様きさま、酒飲さけのむと、ようグツグツ管くだを巻まきよる奴やつだな。何なんでも彼かでも引ひつかか

りをつけ人様ひとさまの話を横取はみじりしよつて、何なにをグツグツ喧譁けんくわを買かひよるのだ。あのお

方かたはな、貴様きさまのやうな素性すじやうの卑いやしい雲助くもすけのやうな奴やつとは、テンからお顔かほの段だんが違ちが

ふのだ。なんだ、仕様しやうもない雲助くもすけ野郎やらつが、譯わけの分わからぬ事ことを言いつて、寡婦やもめの行水ぎやうすゐぢ

やないが、獨ひとり「ゆう」とるワイと心こころの中なかで笑わらつてゐらつしやるのかも知しれぬぞ。

それだから貴様きさまと一緒にいっしょに旅たびをするのは御免ごめんだといふのだ。酒癖さけくせの悪わるい奴やつだな。ア

フリカ峠たうげを瘦馬やせうまを追おふ様に、酒さけを飲のまぬ時ときにはハイハイハイと吐ぬかしよつて、

屁へばかりたれて、本當ほんたうに上あげも下おろしもならぬ腰拔こしぬけのツマらぬ人間にんげんだが、酒さけを食くら

ふと天下てんかでも取とつたやうな氣きになつて、何なにを「ほざ」くのだ、身みの程ほど知らず奴めが。

一體いったいあのお方かたは「どなた」と思おもつてるのか。恐おそれ多くもエルサレムの宮みやに天使長てんしちやう

をお勤つとめ遊あそばした結構けつこうな神様かみさまの箱入娘はこいりむすめさまだぞ」

「ナ、何なんだ、箱入娘はこいりむすめだ、箱入娘はこいりむすめがものを言いふかい。馬鹿ばかな事ことを吐ぬかすな。箱はこい

入娘りむすめなら俺おらの所ところには澤山たくさんあるワ。娘むすめばかりか箱入息子はこいりむすこも箱入爺はこいりぢいさまでも箱入婆はこいりばあさ

までも箱入牛まで、チャーンと「とつ」といてあるのだ」

「それは貴様、間違つてケツかる、人形箱の事だらう」

「さうだ、人形だつたよ。人形がものを言うて堪るか」

「やア、その人形で思ひだしたが、この海には頭が人間で體が魚で、人魚とかい

ふものが居るさうだぞ。そいつを漁つて料理して喰ふと、千年経つても萬年経つ

ても年が寄らぬといふことだ。一つ欲しいものなの」

丙「やかましよう言ふない。折角の酔が醒めて了ふぢやないか。人の眼の前に立ち

塞がりよつてな、エーせめて俺の眼の邪魔なとすない。俺は最前からな、あの三

人の三日月眉毛の花のやうな美しいお姿のお姫様のお顔を、チヨイチヨイと拜ん

で、それをソツと肴にして楽しんでをるのだ。そんな所に立つてガヤガヤ吐かす

と、眼の邪魔になるワイ」

かく話す折しも、船底に怪しき物音聞え来る。一同は、

「ヤア何だ」

と驚いて一度に立上る。船頭は力なき聲にて、

「お客さま達、皆覺悟をおしなさい。もう駄目だから」

甲「ダ、ダ、ダ、ダメだつて、ナ、ナ、ナ、何がダメだい。べ、べ、べ、別嬪がダ、ダ、ダ、ダメと言ふのかい」

船頭は大聲で、

「船が岩に打つかつたのだ。裸になつて飛び込め、沈没だ沈没だ」

船内一同は一時に阿鼻叫喚の聲と化し去りぬ。あゝ松竹梅の手弱女一行の運命は如何。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 櫻井重雄録)

第六章 刹那信心(三九九)

暴風は百千の虎狼の一度に嘯き呻るが如く、猛き聲を響かせ、遠慮會釋もなく吹き捲る。何の容赦もあら浪の、立ち來る態、實に凄じき光景なりけり。

三笠丸は怪しき物音、ガラガラバチバチ、今や海底に沈まむとす。

數多の船客は、色を失ひ、起ちつ坐りつ、限りある船中を狂ひ廻る。

松、竹、梅の「あだ」娘、照彦の四人は、磐石の如く少しも騒がず、天に向つ

て合掌し、何事か頻りに奏上せり。

窈窕花の如く、新月の眉濃やかに描かれ、容姿端麗なる自然の天色、桃の花の

如き竹野姫はスツクと起つて吹き来る風に打ち向ひ、聲も淑やかに歌ひ始むる。

黑白もわかぬ暗の世の

汚れを拂ふ天津風

今や吹き来る時津風

吹けよ吹けふけ科戸の風よ

常世の暗を吹き拂ひ

此の世の塵を清めかし

浪よ立て立て高砂の

尾の上の松の「かくる」まで

隠れてまします高砂の

父の御側へ連れて行け

常世の浪の「しき」浪の

寄せ来る音は松風か

山の嵐かわが戀ふる

戀しき父の御聲か

心の「たけの」ありたけを 一度に開く白梅の

花の顔月の眉 龍の都に鎮まりし

乙米姫の御姿 木の花姫の顔は

天津御空を昇ります 日の出神の如くなり

大空傳ふ月の影 はやく晴らして月照彦の

神の守りを與へかし 俄の暴風に大足彦の

神の命の足眞彦 倒けても起きよ沈みても

直様浮けよ惟神 神の救ひの此船は

深き恵みを三笠丸 空打ち仰ぎ眺むれば

春日の山や三笠山 峰より昇る月影の

はるる思ひも今しばし 暫し止めよ時津風

風の便りにわが父の ウヅの都に坐ますと

探ねて来る姫神の 心の露を汲み取れよ

假令御船はくつがへり 海の藻屑となるとても

神かみより享うけし此この身體からだ 如何いかでか死しなむや科戸しなど彦ひこ

科戸しなどの姫ひめよおだやかに 鎮しづまり給たまへ逸いち早く

この世よを渡わたす【のり】の船ふね 三五あななひけう教まもを守る身みの

わが乗のる船ふねに穴あなはない 汝あな有ありがた難なや三笠丸みかさまる

汝たふと尊たふとしの三笠丸みかさまる 神かみの惠めぐみを笠かさに着きて

清きよき教をしへを杖つゑとなし みるくの船ふねに乗のせられて

高砂島たかさごじまに進すすみ行ゆく 吾われらを守まもる大足彦おほだるひこの

神かみの命みことの御おん惠めぐみみ 木この花はな姫ひめや乙おとよ米ね姫ひめの

神かみの命みことや琴こと平ひら別わけの 貴うづの命みことよ朝あさ日ひ子この

日ひの出で神のかみよ村むら肝きもの 吾われらが心こころを照てらせよや

心こころの空そらは【てる】の國くに 祕ひ露るの都みやこも近ちかづきて

春はるは過すぐれど巴留はるの國くに 進すすむ妾むすめを救すくひませ

進すすむ妾むすめを救すくひませ 又また此この船ふねの諸もろ人びとも

千尋ちひろの海うみのいいや深ふかく 底そこひも知しれぬ御み惠めぐみみに

救すくひ助たすけよ天津あまつ神かみ
 今いま吹ふく風かぜは世よのひと人の
 降ふり來くる雨あめは世よのひと人の
 今いま立たつ浪なみは世よのひと人の
 風かぜよ吹ふけふけ雨あめも降ふれ
 心こころの「たけの」姫ひめが胸むね
 妹いもの命みことや神かみの世よの
 龜かめの齡よはひの永とこ遠しへに 浪なみをさまれよ四よつの海うみ
 天津あまつ御み空そらは日ひの神かみの
 清きよき心こころを憐あはれみて 船ふね諸もろ共ともに救すくひませ
 船ふね諸もろ共ともに救すくひませ
 國くに津つ御み神かみや綿わた津つ神かみ
 心こころの塵ちりを拂はらふ風かぜ
 汚けがれを洗あらふ清きよめ雨あめ
 怪あやしき行おこなひ斷たつの浪なみ
 浪なみよ立たて立たて勇いさみ立たて
 一いち度どに開ひらく「梅うめヶ香か姫ひめ」の
 來くるを「まつよ」の鶴つるの首くびの
 日ひの出で神かみと照てる彦ひこの
 船ふね諸もろ共ともに救すくひませ

と花はなの唇くちびるを開ひらいて歌うたふ。

この言こと靈たまに、雨あめも風かぜも浪なみもピタリと止やんで、再ふたび太たい平へいの大海おほ原なばらとなり、煌くわ々くわ々くわ

る夏の太陽は、海面を照らして輝き渡りぬ。

暗礁に乗り上げ、殆ど海中に没せむとせし三笠丸は、不思議なるかな、何の故障もなく、凧ぎ渡る海面を、静かに滑めて西へ西へと進行してゐる。

船中には又四五人の囁き聲一隅に聞ゆ。

甲「エライ事だつたなア。この船には三人の辨財天が乗つて御座つたお蔭で生命が救かつたのだよ。マアマア吾々もお蔭で地獄行きを助かつた。一寸下は水地獄だ、カウして一枚板の上は安樂な極樂だが、一寸違へば地獄でないか、これを思へば吾々はよく考へねばなるまい。日々に行つて居る事は恰度此船のやうなものだ。一寸間違つたら地獄だから、うかうかしては此世は渡れない、なんぼ陸ぢやと言つて、沈まぬとも言へぬ。陸に居ても悪い事をすれば、心も沈み身も沈み、一家親類中が皆沈んで、浮かぶ瀬がなくなつて了ふのだ。うかうかしては暮されぬわい」

乙「さうだね、何は免もあれ有難い事だつたネ。あの三人の女神さまは、アリア屹度吾々のやうな人間ぢやないぜ。あまり吾々は慢心が強いからナ、此世は人間

の力ちからで渡わたれるものなら渡わたつて見みよ。力ちからのない智ち慧ゑの暗くらい、一いつ寸すん先さきの分わからぬ愚おろかな人にん間げんが、豪えらさうに自し然ぜんを征せい服ふくするとか、神しん秘びの扉とびらを開ひらいたとか、造ざう化くわの妙めう用ようを奪うばふとか、くだらぬ屁へり理り屈くつを言いつて威い張ばつて居をつた所ところで、今日けふのやうな浪なみに遭あうたら、毎日まいにち日日ひにち船ふねを操あやつ縦つることを商しやう賣ばいにして居をる船せん頭とうさまだつて、どうする事ことも出で来きやしない。人にん間げんは神かみ様さまを離はなれて、何なに一ひとつ此この世よに出で来きるものはないのだ。かう言いつて吾われ々われが物ものを言いつてるのも、皆みな神かみ様さまの尊たふとい水い火きがこもつて居をるからだ。ウラル教けうの宣せん傳でん使しのやうに、吞のめよ騷さわげよ一いつ寸すん先さきは闇やみよ、暗やみのあとには月つきが出でるなぞと、勝かつ手てな熱ねつを吹ふいて、ドレだけ威ゐ張ばつて見みた所ところで、人にん間げんたる以いじ上やうはダメだ、ドウしても、神かみ様さまの廣ひろき厚あつき御み惠めぐみに頼たよらねばならないのだ。ア、惟かむ神ながら靈たま幸ちはへ倍ま坐ま世せ惟かむ神ながら靈たま幸ちはへ倍ま坐ま世せ」

丙へい「オイお前は中まへ々なか々なかよい心こころ得えだ。ソソンナ結けつ構こうな事こと、何どこ處この誰たれに聞きいたのだい」
「吾われは黄わう金こん山ざんに現あらはれ給たまひし埴はに安やす彦ひこの命みことさまのお始はじめになつた、三あな五な教ひけうの教をしへを聞きいて、それからと言いふものは、あれ程ほど好すきな酒さけが自し然ぜんに飲のめなくなつて、此この頃ころは少すこしの御お神み酒きを頂いただしても、直じきに酔ようて心こころ持もちがよくなつたよ。今いままでは酒さけを飲のめば

飲むほど、梯子酒で飲みたくなり、腹は立つて来る。一寸したことにも「ムカ」
ついて、女房を殴る、徳利を投げる、杯は破れる、井鉢は踊る、近所の人達に悪
酒ぢや、酒狂ぢやと言はれて持て餘された者だが、どうしたもののか、三五教の飯
依彦と言ふ龍宮島の宣傳使が熊襲の國へ出て来て、皆のものを集めて、鎮魂の洗
禮を施してくれたが最後、気分はスツカリして酒は嫌ひになり、何とはなしに世
の中が面白くなつて来たのだ。ホントによい教だよ。お前も一つ三五教に入信し
たらどうだい。大にしては治國平天下の教、小にしては修身齊家の基本たるべき
結構な教の道だよ」
丙丁戊「成程結構だなア。吾々も無事安全な時には、ナ―二神が此世に在るもの
か、人間は神だ、人は萬物の長だ、天地經綸の司宰者だと威張つて居たが、今日
のやうな目に遇うては、吾輩のやうな無神論者でも、何だか腹の中の悪いコロコ
ロが、喉から飛び出しよつて、本當に叶はぬ時の神頼み、手を合して縋る氣にな
つて来るワ。ア、人間と言ふものは弱いものだなア」
諸人の囁き聲を満載した神の守護の三笠丸は、萬里の浪を渡つて、其日の黄昏

時、智利の港に近づきたり。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 森良仁録)

第七章 地獄の沙汰〔四〇〇〕

船は漸くにして黄昏時に、智利の港内に安着せり。家々の燈火は水に映じて柱の如く海中に垂れ下り、恰も火柱の杭を打ちたる如く、小波に揺れて炎々と揺く状は、火龍の海底より幾十百ともなく水面に向ひ昇り來るの光景なり。

智利を見たさに海原越せば 海の響きか浪の音か

と船頭は落着いた聲で唄つてゐる。

松代姫は靜に起つて花の唇を開き、織手を擧げて智利の港を嬉し氣に打ち眺め

ながら、

此處は名に負ふ高砂の
月日も智利の港かや

御空に月はなけれども
天より高く咲く花の

木の花姫の御使
月照彦の生魂

龍世の姫の守ります
名も高砂の智利の國

嬉しや此處に天傳ふ
月雪花の三人連れ

心の色も照彦の
從僕の強者と諸共に

戀しき父の御前に
ありし昔の物語

語るも盡きぬ故郷の
空行く雲の定めなき

現世幽界物語
親子いよいよ相生の

時を松風松代姫
心の竹野隈もなく

起臥し毎に語り合ひ
蒼も開く梅ヶ香の

郷の土産の梅便り
涼しき月も照彦の

花の蒼の開く時
心の色の薫る時

あゝ頼もしや頼もしや
父のまします此の島は

いと懐かしき神の島
如何に嶮しき山道も

荒風猛る砂原も
何の物かは女子の

岩をも射貫く真心を
神も諾ひ給ふらむ

血をはく思ひの郭公
八千八越の海原も

やうやう茲に姉妹の
心も晴れし五月空

只一聲のおとづれを
ウヅの都にまませる

桃上彦の吾父の
御許に告げよ夏山の

青葉滴る貴の子の
心のたけを傳へよや

心のたけを傳へよや

と淑やかに歌ふ。黄昏に漸う着いた三笠丸は、港内に錨を下し、其夜は一同の船
客と共に夜を明かしたり。船中には又もや雑談の花咲き來り、

甲「オイ、此處は智利の港だ、もう生命に別條はない。十分に大法螺を吹いたとて大丈夫だよ」

乙「そんな強いことを云ふない。あの大風が吹いた時、船が暗礁に乗り上げてガララメキメキと中央から折れて、沈まむとした時に、貴様如何だつたい。俺の首を捉まへて、ブルブル慄うてみたではないか。さうさう、くつついては俺も困るから、放せと云うたら「俺は水心を知らぬから、俺が沈んだら貴様の背中に「くつつい」て助けて貰ふのだ」と弱音を吹いて、ベソを掻きよつた時の醜態と云つたら、見られたものぢやなかつたよ」

「あつた事は言うたつて仕様がな、黙れ黙れ、モ一此島へ着けば大丈夫だ。生命に別條はないからネー」

「イヤ、生命ばかりは陸だつて海だつて安心は出来ないよ。此間も、ウヅの國の桃上彦と云ふ立派な宣傳使が、恐ろしい大蛇の出る大蛇峠や珍山峠を、大膽至極にも唯一人で越して、巴留の都の鷹取別の城下で、三五教の宣傳歌を歌うて居たら、數百人の駱駝隊が現はれて、鋭利な槍で宣傳使を小芋を串に刺したやうに、

豆腐の田樂よろしく、突いて突いて突き廻し鬪殺しにした揚句、砂漠の中に埋めて了うたと言ふ話を、巴留の國から出て来た人間に、俺は此船に乗る時に慥に聞いたのだよ。悪い奴が澤山居るのだから、餘程心得ぬと險難だぞ

と話して居るのを、松代姫の一行は耳を傾け、顔の色を變へて聴き居たるが、照彦は船の一隅より、ツト身を起し此三人の前に坐つて、

「モシモシ、今承はれば、珍の國の桃上彦命様が、巴留の國で殺され遊ばしたやうに承はりましたが、それは本當でございますか。吾々は仔細あつて其の桃上彦命に御目にかかりたく遙々参りました。何卒御聞き及びの模様をなるべく詳しく話して下さいませまいかな」

丙「なんだ、桃上彦の話をせいと云ふのか。イヤ話さぬことはない、が其處は、それ何とやら、地獄の沙汰も何とやら、魚心あれば水心あり、水心あれば魚心でありますからな。へッへッへッ」

「貴方の仰有ることは一向要領を得ませぬ、モツト明瞭と云うて下さい」

「へい、不得要領で以て要領を得たいのです。それ地獄の沙汰も何とやら」

「あゝ解つた、酒代を與れと云ふのか、ア、よしよし上げませう。どうぞ委しく言うて下さい」

「ヘイ、モ、、、カ、、、辱ない。ミ、、耳を揃へた澤山なお金、ヒ、、拾つたやうなものだな、ヒツヒツ平に御断り申上ぐるは本意なれど、コ、、これも何かの廻り合せ、こんなお方にこんな處で、こんな船の上でお目にかかつて、こんな澤山のお金を頂いて、こんな結構な事は今後も幾度もあつてほしいものだ。

モ、、、カ、、、ミ、、、ヒ、、、コ、、、の話の「おかげ」で、こんな結構なお金にありついた」

「オイオイ、そんなことは何うでもよいから、早く桃上彦命の消息を話して下さいよ」

「はな」せと云つたつて、一旦貰うたら此方のものだ。何うして何うして「はな」すものか、「はな」して恠るものか、死ぬまで「はな」しやせぬぞ」

「オイ、そりやチト話が違ふぞ、放すぢやない、話せと云ふことぢや」
「イヤ、何と仰有つても、こんな結構な物を放せの、話しのと、そりや胴欲ぢや。」

一旦握つたらモ、カ、ミ、石に噛み付いてもヒ、コ、【ひこ】ずられても放さぬ放さぬ、放してならうか、生命より大事な此のお金……」
「あゝ困つた男だな、桃上彦命は生きて居られるか、死んで居られるか何方だ。聞かして呉れいと言ふのだ」
と聲に力を入れて問ひかける。

「それは二つに一つです。死んだものは生きて居らぬし、生きたものは死んで居らぬ。桃上彦は死んで居らぬ」

「死んで居らぬと云ふ事は、生きて居ることか」

「死んで居らぬ」

「桃上彦命は死んで居らぬ、生きて居るのか。死んで了つて、此世に居らぬと云ふのか、確然返答せい」

と稍「もどかしげ」に聲を尖らして問ひかける。

「それは貴方、【だけ】の事を申上げます。【だけ】は【だけ】だからなア、地獄の沙汰も、それ何とやら」

「エ、五月蠅い奴だ。金だけの事を云うてやらう、地獄の沙汰も金次第と云つて居るのであらう。よう金を欲しがらぬ奴だなあ。足許を見られて居るから仕方がないワ。サア、これだけ貴様に遣るから判然と云へ」

短き夏の夜は、何時しか明け放れて、船は港に横「づけ」となる。

「桃上彦は沙漠の中へ埋められて死んで了つたよ。死んだ奴のあとまで云うたところ、何にもなりはしない。十萬億土の遠い遠い國へ行つて了つたのだよ」と云ひ棄てて尻を捲つて韋駄天走り、金子を握つたまま姿を隠しける。

ア、三人の娘の心は？ 照彦の胸の中は如何ぞ。

（大正一一・二・一二 舊一・一六 有田九臯録）

第二篇

一 陽來復

第八章 再生の思「四〇一」

珍の都の桃上彦命は、巴留の都に出でまして、敵の鋭き槍に突き刺され、沙漠の露と消え給ひしと、聞くに驚く三柱の姫はワツと絶え入るばかり、船底に喰ひついて、聲を忍びに泣き入るにぞ、照彦は當惑の息を漏らしながら、

「これはしたりお三方様、御父上の亡くなられたといふことは、決して確なものではありませぬ。察する處、吾々に酒代が欲しさに、斯様なことを申して吾らの心を動かさせ、目的を達せむとした悪者の悪企みにかかつたのでせう。必ず必ず御心配下さいませぬ。行く處へ行つて見なくては實否は判るものではありませぬ。道聽途説に誤られて、肝腎な時になり、小さき女の胸を痛め、若しも御身に「ささはり」でも出来たならば、この家來の照彦は、どうして御父上様に申譯が立ちませうか。冥途にござる母の君へも濟みませぬ。どうかお三人様、氣を確に持つて下さい、屹度この照彦が御主人様にお會はせ申しませう」

松代姫は涙を拭ひながら、

『あゝ照彦、よく言うて呉れました。お前の親切は身に沁み渡つて嬉しいが、嘘とは思へぬ客人の咄、まさかの時には妾は何うしようぞ。折角長の海山を越え、孱弱き妹を伴れて、やうやうここに着きは着いたものの、お父上の訃音を聞いて、天にも地にもない一人の親、妾はどうして忍ばれませうぞ』

竹野姫 『姉様、どうなり行くも因縁づく、萬々一お父さまがお隠れになつたとすれば、力と頼むは姉さまばかり、何卒しつかりして下されませ。梅ヶ香姫はやうやう十六歳、花の蕾の開かぬうちから、こんな憂き目に出會ふとは、何たる因果のことでありませう』

『モシモシお三人様、決して決して御心配下さいますな、ここは名に負ふ智利の國、あれ御覧なさいませ、今日の日輪様は殊更麗しい、御機嫌のよい顔をしてにここにこと笑つてゐられます。若しもお父さまが此世に御座らぬやうな事なれば、どうして日天様があのやうな麗しいお顔で吾々を照して下されませうぞ。要らざる取越苦勞を止めて、先を樂しんで参りませう。一歩々々珍の都へ近寄るのですから、サアサア上陸致しませう』

此時船の一隅より、中肉中背の色淺黒き男、四人の前に現はれ來り、

「私は恐ろしい名のついた、大蛇彦といふ男でございます。これから珍の國へ歸りますから丁度よい道伴、都近くまで御供いたしませう、御安心なされませ。今承はれば、貴女様は珍の都に其御名も高き桃上彦命様の御娘子とやら、今は正鹿山津見神といふ立派な神様になつて、御無事であらつしやいます。決して決して御心配なく、私と共にまゐりませう」

松代姫は飛び立つばかり嬉しげに、

「それはそれはよい事を聞かして貰ひました。有難うございます」

竹野姫、梅ヶ香姫は俄に顔色麗しく、冴え渡りし聲にて、

「お姉さま、嬉しいワ」

「ア、嬉しかる嬉しかる、姉さまも嬉しい、心が冴え冴えして來ました」

照彦「ヤア、大蛇彦さま、あなたは珍の國の御方、イヤモウ、よいことを聞かして下さりました。吾々もこれで安心いたします。足も何となく軽いやうな氣分になつて來ました。どうかお頼みですから、ひとつ道伴れになつて下さいませ」

「ハイ、宜しう御座います。私が道案内を致しませう」

三笠丸を乗り棄て、ここに一同は智利の港の町をあとに、南を指して心もいそ

いそと進み行く。

大蛇彦は先に立ち、

「ここは高砂智利の國 龍世の姫の鎮まりて

守り給へる神の島 御空に高く月照彦の

貴の命の神魂 鏡の池に現れまして

日に夜に詔らす言靈の 惠も深き智利の國

珍の都に現れませる 桃上彦の神司は

名さへ目出度き宣傳使 正鹿山津見神となり

珍山峠を乗り越えて 巴留の都を救はむと

出でます折しも曲神の 鷹取別の僕人に

とり圍まれて玉の緒の 一度は息も切れたれど

木の花姫はなひめに救すくはれて 再びふたたびここに蘇よみがへり
珍うづの都みやこに歸かへりまし 花はなを欺あざむく手弱たをやめ女の
心こころも清きよき宣傳せんでん使し 五月さつきの姫ひめを妻つまとなし
淤おど滕やまづ山み津み見みや駒こま山やま彦ひこの 神かみの命みことの宣傳せんでん使し
珍うづ山やま彦ひこと諸もろ共ともに 千歳ちとせを契ちぎる妹いもと背せの
今日けふは祝いはひの宴うたげの庭には 喜よろこびたまへ三柱みはしらの
姫ひめの命みことよ千代ちよ八千代やちよ 變かはらぬ松まつの色いろ深ふかく
心こころの「たけの」すくすくと 開ひらく梅うめヶ香か芳かんばしも
月日つきひは空そらに照彦てるひこの 御供おともの神かみと諸もろ共ともに
大蛇をろちの船ふねに乗のせられて はやくもここに着つきにけり
はやくもここに着つきにけり』

と歌うたひ終をはるよと見みれば、大蛇をろち彦ひこの姿すがたは煙けむりと消きえて、呼よべど叫さけべど何なんの應いらへもなく、
樹き々の梢こしめを渡わたる松風まつかぜの音おと、颯さつ々と耳みみに響ひびくばかりなり。

さしもに嶮しき遠き山路も瞬間に送られて、ここに主従四人は正鹿山津見神の
門前近くに現はれける。

(大正一一・二・一二 舊一・一六 河津雄録)

第九章 鴛鴦の衾(四〇二)

久方の天津御空も地土も 左右りと廻る世に

邂逅うたる親と子の 心の空の五月暗

晴れて嬉しき夏の日の 緑滴る黒髪を

撫でさすりつつ入り来る 父の便りを松代姫

心の竹のふしぶしに 積る思ひをいたいたいの

花の蕾の唇を 開く梅ヶ香姫の御子

みつきみつか
三月三日にエルサレム
館を抜けて三人連れ

つきゆきはな
月雪花の照彦は
主従都を龍世姫

いよいよ此處に月照彦の
神の御魂の鎮まれる

うづ
珍の都の主宰神
桃上彦の掌る

うづ
珍の館に着きにけり
五月の空の木下闇

いつか
五日は晴れむ常磐木の
五月五日の今日の宵

おやこふうふ
父子夫婦の廻り會ひ
くるくる廻る杯の

【つき】の顔五月姫
松竹梅の千代八千代

さかえ
榮の基となり響く
宴會の聲は此處彼處

うづ
珍の都も國原も
揺ぐばかりの賑はしさ。

まさかやまづみのかみ
正鹿山津見神は五月姫との結婚の式ををはり、
おどやまづみ
淤滕山津見、
こまやまひこ
駒山彦、
うづやまひこ
珍山彦三

しら
柱とともに、宴會の最中、
あさ
朝な夕なに心を痛めし故郷の、
まつ
松、
たけ
竹、
うめ
梅の最愛の娘

めこ
子の訪ね來りし事を聞き、
くわんき
歡喜の涙に咽ぶ折しも、
くにひこ
國彦の案内につれて一行は此

場に現はれぬ。三人の娘は嬉しさに胸逼り、父の顔を見るより早く三人一度に首を垂れ、傍に人なくば飛びつき抱きつき互ひに泣かむものと、思ひは同じ親心、桃上彦も暫し喜びの涙に咽びて、唯一言の言葉さへも出し得ず今まで賑はひし宴會の席も、何となく五月の雨の濕り氣味とはなりぬ。珍山彦は、
「ヤア、これはこれは、目出度い事が重なれば重なるものだ。今日は五月五日、菖蒲の節句だ。黒白も分かぬ暗の世を、あかして通る宣傳使の、天女にも擬ふ五月姫、三月三日の桃の花にも比ぶべき桃上彦の命と、偕老同穴の契を結びし矢先、瑞靈の三人連、松のミロクのを祝ふ御娘子の松代姫様、直な心の竹野姫様、三五教の教も六合一度に開く梅の花、綻びかけし梅ヶ香姫様の親子の對面、何と目出度い事であらうか。それにまだまだ目出度きは月照彦の神の名を負ふ照彦さまの御供とは、何とした不思議な配合だらう。あゝこれで鶯宿梅の梅の喜び、桃林の花曇り、五月の暗もさつぱり晴れて、月日は御空に照り渡るミロクの新代が近づくであらう。三五の月の輝いたその夜に初めて會うた五月姫、父の名は閻山津見でも、もうかうなつた以上は照山津見だ。皆さま、今日の此の御慶事を祝ふた

めに、親子夫婦の睦びあうた目出度さを歌ひませうか」

淤藤山津見は、

「それは實に結構で御座います。どうか發起人の貴方から歌つて下さいませ」

と願ふにぞ、珍山彦は、

「然らば私より露拂ひを致しませうか」

と、今までの怪しき疝聲に似ず、餘韻嫋々たる麗しき聲音を張り上げて歌ひ始めたり。

「朝日は照る照る月は盈つ 天地の神は勇み立つ

誠の神が現はれて 三月三日の桃の花

花は紅葉は緑 緑滴る松山の

青葉に來啼く時鳥 八千八聲の叫び聲

晴れて嬉しき五月空 喜び胸に三千年の

花咲く春に桃上彦の 神の命の妹と背の

千代ちよの喜よろこび垂たら乳ち根ねの
親子おやこ五人ごにんの廻めぐり會あひ

五月いつつき五日いつかの今けふ日の宵よひ
遠とほき神代かみよの昔むかしより

夕暮ゆふぐれ悪あしと忌いみし世よも
かはりて今いまは夕暮ゆふぐれの

天地てんちに満みつる喜よろこびは
またと「ありな」の瀧たきの上うへ

鏡かがみの池いけの限かぎりなく
清しみづ水わ湧わき出づる如ごとくなり

神代かみよを祝ことほぐ松代まつよ姫ひめ
一いちど度ひらに開ひらく梅うめヶ香か姫ひめの

貴うづの命みことのすくすくと
生おひ立たち早はやき竹野たけの姫ひめ

貴うづの都みやこを後あとにして
珍うづの都みやこに月照つきてるの

空高そらたか砂かさこの珍うづの國くに
珍山うづやま彦ひこの木この花はなは

彌高いやたか々と高照たかてる姫ひめの
神かみの命みことに通かよふなり

大蛇をろちの船ふねに乗のせられて
ここここにに四人よにんの神人しんじんは

主從しうじう親子おやこの顔かほ合あはせ
心こころ合あはせて何いつ時ままでも

嚴靈いつのみたまを經たてとなし
瑞靈みづのみたまを緯ぬきとなし

三五さんごの月つきの御教みをしへを
天地あめつち四方よもに輝かがやかせ

天地四方に輝かせ
あめつちよもかがや

と歌ひ終れば、
うたをは
淤滕山津見神は、
おどやまづみのかみ
またもや口を開いて祝歌を歌ふ。
くちひらしゆくかうた

三月三日の桃の花
みつきみつかももはな

三千年の昔より
さんぜんねんむかし

培ひ育てし園の桃
つちかそだそのもも

君に捧ぐる桃實の
きみにささもものみ

心も春のこの宴會
こころはるこのうたげ

五月五日の花菖蒲
いつつきいつかはなあやめ

香り床しき五月姫
かかゆかさつきひめ

御空も晴れて高砂の
みそらのはたかさご

尾の上の松の下蔭に
おしへのまつしたかげ

尉と姥との末長く
じやううばすゑなが

清く此世を渡りませ
きよこのよわた

頭は深雪の友白髪
かしらみゆきともしら

松、竹、梅の愛娘
まつたけうめまなむすめ

世は烏羽玉の暗くとも
ようばたまくら

月日は空に照彦の
つきひそらてるひこ

光眩ゆき佳人と佳人
ひかりまばかじんかじん

鶴は千歳と舞ひ納め
つるちとせまなむすめ

龜は萬代舞ひ歌ふ
かめよろづよまうた

秋津島根の珍の國
あきつしまねうつくに

五男三女と五月姫
ごなんさんぢよさつきひめ

千代に治まる國彦の

榮をまつぞ目出度けれ

榮をまつぞ目出度けれ

珍山彦は、

「ヤア目出度い目出度い、コレコレ五月姫さま、貴女は此家のこれからは立派な奥様、今三人の御娘は貴女の眞の御子ぢや、腹も痛めずに、こんな立派な月と雪とも花とも知れぬ天女神を子に持つて、さぞ嬉しからう。縁と云ふものは不思議なもので、佳人が醜夫に娶られたり、愚人が美女と結婚するのは世の中の都合だ。然るに貴女は正鹿山津見神様のやうな智仁勇兼備、何一つ穴のない、あななひ教の宣傳使を夫に持ち、佳人と美女の鴛鴦の契の夢暖かく、夫婦親子が花の如く月の如く雪の如く、清き生活を送らると云ふ事は、またと世界にこれに越した幸福はあるまい。戀には正邪美醜賢愚の隔てがないと云ふ事だが、貴女の戀は完全ですよ。桃と菖蒲の花も實もある千代の喜び、幾千代までもと契る言葉も口籠る。鴛鴦の衾の新枕、實に目出度い、お目出度い」

五月姫は、

有難う御座います」

と唯一言、顔赭らめて稍俯いて居る。珍山彦は、

「もしもし五月姫さま、貴女は今晚の花だ。一つ華やかに歌つて貰ひませうか」
五月姫は恥かしげに立ち上り、長袖淑やかに歌ひ舞ひ始めたり。

(大正一一・二・一三 舊一・一七 加藤明子録)

第一〇章 言葉の車〔四〇三〕

五月姫は立つて唄ふ。

【あ】ふげば高し天の原

【い】行き渡らふ日の神の

【う】づの都の守護神

【え】にしの絲に繋がれて

【お】しの衾ふすまの永久とこしへに
 【き】よく正ただしき相生あひおひの
 【け】しき卑いやしき曲津まがつ見みを
 【さ】かゆる松まつも高砂たかさこの
 【す】みきる老おいの尉じやうと姥うば
 【そ】ろふて二人ふたり松まつの葉はの
 【ち】代よも八千代やちよも永久とこしへに
 【て】らす高砂たかさこ島の森もり
 【な】み風荒かぜあらき海原うなばらを
 【ぬ】ひ行く船ふねの徐々しづしづと
 【の】どかにしらす天津神あまつかみ
 【ひ】照でりきびしき砂原すなはらを
 【へ】り譲くだれとの御教みをしへの
 【ま】さ鹿山津見神かやまづみのかみさま様の
 【か】はらざらまし何時いつまでも
 【く】にの護まもりと現あらはれて
 【こ】らしてここに神かみの國くに
 【し】ま根ねに清きよく麗うつくしく
 【せ】ぜの流れながは變かはるとも
 【た】がひに心こころを合あはせつつ
 【つ】ると龜かめとの齡よはひもて
 【と】きは堅磐かきはに治をさめませ
 【に】しや東ひがしや北南きたみなみ
 【ね】底そこの國くにの果はてまでも
 【は】留るの國くにをば立たち出いでて
 【ふ】みわけ進むすす四人よにん連れ
 【ほ】まれは四方よもに響ひびくなり
 【み】のいたづきを救すくひつつ

【む】すぶ縁えにしの温泉場をんせんば
 【も】も世よの契百歳ちぎりももとせや
 【い】や永久とこしへに永久とこしへに
 【え】にしも深ふかき旅たびの空そら
 【わ】が身みに持もてる眞心まじこころは
 【う】づ山彦やまひこの御神おんかみに
 【を】さまる今日けふの夕ゆふへかな
 【め】ぐり會あうたる妹いもと背せの
 【や】千代ちよの固かため睦むつまじく
 【ゆ】みづ湧わき出づる珍山うづやまの
 【よ】は紫陽花あぢさゐの變かはるとも
 【ゑ】く千代ちよまでも變かはらまじ
 【ゑ】にしの絲いとを結むすばれて

と、四十五清音しじふごせいおんの言靈歌ことたまうたを歌うたふ。

駒山彦こまやまひこ「ヤア、恐れ入おそりました。四十五清音しじふごせいおんの祝いはひの御歌おんうた、どうか始終御静穩しじゆうごせいをんで

ゐらつしやいますやうに」

珍山彦うづやまひこ「オイ、駒山こまやまさま、大分だいぶんによう轉ころぶな」

「きまつた事ことだ。山やまの頂邊てつべんから、駒こまを轉ころがしたやうなものだよ。アハ、ハ、ハ、」

「サア駒山こまやまさま、山やまの頂邊てつべんから駒こまを轉ころがすのだよ。一つ言靈歌ことたまうたを聽きかして貰もらひま

せうかな」

「歌は御免だ、不調法だからな」

「この目出度い場所、御免だの、不調法だのと、是非言靈の宣り直しをやつて貰ひたいものだ。主人側の五月姫さまが言靈でお歌ひになつたのだもの、お客側の貴公がまた言靈で返歌をするのは當然だ。吾々は一度歌つたから最早満期免除だ。サアサア早く早く、言靈の駒を山の上から轉がしたり轉がしたり、珍山彦の所望だ」

駒山彦も、

「こま】つたな、止むに止まれぬこの場の【仕儀】、オツトドツコイ祝儀だ。

【あ】ふげば高し山の端を 【い】づる月日のきらきらと

【う】づの都を照すなり 【え】にしは盡きぬ五月姫

【お】しの衾の暖かに 【か】たみに手に手とり交し

【き】のふも今日も睦まじく 【く】らせよ暮せ二人連れ

【け】はしき山やまを乗り越こえて
 【さ】かづき交かはす目出めで度たさよ
 【す】ずしく澄すめる月影つきかげは
 【そ】ろふ夫婦ふうふの友白ともしら髪が
 【ち】よに八千代やちよに色深いろふかく
 【て】らす朝日あさひは清きよくして
 【な】つなの半なの五月空さつきぞら
 【ぬ】ば玉たまの世よを照てらしつつ
 【の】山やまもかすみ笑わらふなる
 【ひ】らく常磐とぎはの松代まつよひ姫め
 【へ】ぐりの山やまをあとにして
 【ま】ぎて来きたりし父ちちの國くに
 【む】すぶ夫婦ふうふの新枕にひまくら
 【も】も上彦がみひこは年長としながく
 【こ】こに漸やっせく月つきの宵よひ
 【し】ま根ねに生おふる松まつヶ枝がえに
 【せ】ん秋萬歳しゅうばんざい尉じやうと姥うば
 【た】かさご島しまの守護まもりがみ神かみ
 【つ】るの巢籠すごもる神かみの島しま
 【と】こよの闇やみを晴はらすなり
 【に】しに出いで入いる月照彦つきてるひこは
 【ね】底そこの國くにまで救すくひゆく
 【は】る（巴留はる）の榮さかえは桃ももの花はな
 【ふ】たりの娘御むすめ諸共もろともに
 【ほ】のかに夢ゆめの跡尋あとたづね
 【み】たり逢あうたり今日けふの宵よひ
 【め】でたかりける次第しだいなり
 【や】ちよの春はるの玉椿たまつばき

【い】 づみのみたまの御教を

【ゆ】 はより堅く守りませ

【え】 にしは盡きじ月照の

【よ】 は紫陽花の變るとも

【わ】 かやぐ胸を素手抱きて

【ゐ】 きと水火とを合せつつ

【う】 つし世幽世隔てなく

【ゑ】 らぎ樂しめ神の世の

【を】 さまる五月の今日五日

と歌ひ了れば、珍山彦は膝を打つて、

「ヤア、轉んだ轉んだ、駒公がころんだ」

駒山彦「これで駒山は除隊ですか」

珍山彦は、

「ヤア、【じよたい】のない男だな。それよりも五月姫さま、ア、この館の奥さまとならば、【じよたい】のう【しよたい】を保つのだよ。心の底から水晶に研いで研き上げて、華を去り實に就き、曲津の正體を出してしまふのだ」

五月姫は小さき聲にて、

「ハイハイ」

とばかりうなづく。

珍山彦「サア、これから御主人公の番だ。「まさか」否とは言はれませう。サ

アサア祝ひ歌を歌つて下さい。珍山彦の注文だ」

正鹿山津見「皆さまの立派な御歌を聴いて、恐れ入りました。私の言霊は、充分

研けて居りませぬから、耳ざはりになりませうが、今日は思ひ切つて、神様の御

力を借りて歌はして頂きます。

あゝ思へば昔其の昔 高天原に生れませる

心もひろき廣宗彦の 兄の命に助けられ

神の眞釣を補ひの かみと代りし桃上彦の

神の命のなれの果 心の駒の進む間に

八十の曲津に使はれて 恵も深き廣宗彦の

兄の命に相反き 二人の兄を退けて

【かみ】の【まつり】を握りたる 高天原の主宰神

常世の闇の深くして 心は雲る常世彦

常世の姫に謀られて 戀しき都や三柱の

愛しき御子を振り捨てて 行方も知らぬ流浪の

身のなり果ては和田の原 浪に浮べる一つ島

龍宮の島に渡らむと 高砂丸に身をまかせ

常世の浪の重浪を 渡る折しも吹き来る

颯風に船は打ち破られ 吾は儚なき露の身の

朝日に消ゆる悲しさを 闇を照らして昇り来る

日の出神の御光や 琴平別の救ひ舟

背に跨り遙々と 千尋の海の底の宮

乙米姫の知食す 龍の宮居の金門守る

賤しき司と仕へつつ 涙に沈む折からに

浪を照して出で来る 日の出神に救はれて

神伊邪那美大神や

從屬の神と諸共に

音に名高き龍宮を

龜の背中に乗せられて

躍り浮びし淤藤山祇の

神の命や和田の原

【つらなぎ】渡る浪の上

大海原の眞中に

皇大神と右左

袂を別ち高砂の

朝日も智利の國を越え

珍の都に辿り着き

日の出神の任けのまに

名さへ目出度き宣傳使

巴留の御國を救はむと

山野を涉り【はる】ばると

吾は都に龍世姫

三五の月照る眞夜中に

威勢も高き鷹取別の

醜の軍の戦士が

鋭き槍の鏑となり

沙漠の中に埋められて

やうやう息を吹き返し

闇に紛れて歸り往く

負傷は痛く足蹇へて

一足さへもままならぬ

破目に陥る谷の底

流るる水を掬ぶ時

香り床しく味もよき

瑞の御魂の幸はひを

喜び谷間を攀ぢ登り

温泉の「いさ」に浴して

百の負傷は癒えたれど

如何はしけむ玉の緒の

命の絶ゆる折柄に

於滕山津見や五月姫

珍山、駒山現はれて

神の救ひの御手をのべ

助け給ひし嬉しさよ

茲に五人の神の子は

さしも嶮しき珍山の

峠を越えて千引岩の

上に一夜を明しつつ

天雲山をも打越えて

木の花姫の分霊

大蛇の船に助けられ

もとの住家に立歸り

憩ふ間もなく於滕山祇の

神の命の御執成し

珍山彦の眞心に

今日は妹背の新枕

天津御神や國津神

百神等に永久の

誓約をたてし今日の宵

清き心の玉椿

八千代の春の梅の花

開いて散りて實を結ぶ
【みろく】の世までも變らまじ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

高砂島の永久に
妹背の仲は睦まじく

親子夫婦は睦び合ひ
花咲く御代を樂しまむ

花咲く御代を樂しまむ
此世を造りし神直日

心も廣き大直日
ただ何事も人の世は

直日に見直し聞直し
身の過は宣り直し

光眩ゆき伊都能賣の
神の御魂と現はれて

天地四方の國々を
守る諸神諸人と

共に生代を樂しまむ
共に足代を樂しまむ

と、聲もすずしく歌ひ終る。一同は手を拍つて感嘆の聲を漏らすのみ。珍山彦は、

「サアサア、これで婚禮組の歌は一通り濟んだ。これから親子對面の御祝ひだ。

モシモシ松代姫様、貴女のお番です。御遠慮なく親の前だ、お歌ひなさいませ」

松代姫は、

□ ハイ □

と答へて立ち上りぬ。

(大正一一・二・一三 舊一・一七 河津雄録)

第一章 蓬莱山〔四〇四〕

松代姫の歌。

□ 松は千年の色深く 嚴のみろくの守り神

瑞の御魂と現はれし 三五教の宣傳使

三葉の彦の神魂 清き尊き玉銚の

廣道別と改めて 黄金山に宮柱

太知り立てて神の代を

治め給ひし神業を

朝な夕なに嬉しみて

天地に願ひを掛巻も

畏き神の引き合せ

戀しき父に邂逅ひ

心の丈を語りあふ

今日の月日を松代姫

待つ甲斐ありて今茲に

松竹梅の姉妹は

戀しき父に巡り會ひ

又もや母の懐に

抱かれて眠る雛鳥の

吾身の上ぞ樂しけれ

吾身の上ぞ樂しけれ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

千代も八千代も變りなき

心やさしき五月姫

母の命と敬ひて

心を盡し身を盡し

力の限り仕ふべし

あゝ垂乳根の父母よ

親と現はれ子となるも

遠き神代の昔より

天津御神や國津神

金勝要の大神の

結び給ひし神業と

聞くも嬉しき今日の宵
龍世の姫や月照彦の

神の命の守ります
高砂島は幾千代も

山は繁れよ野は榮え
花は匂へよ百の實は

枝もたわわに結べかし
五日の風や十日の

雨も秩序をあやまたず
稲麥豆粟黍までも

豊に稔れ永久に
蓬萊山も畜ならず

鶴の齡の末長く
龜の壽のいつまでも

夫婦親子の契をば
續かせ給へ國治立の

神の命よ豊國姫の
神の命よ平けく

いと安らけく聞しめせ
天教山にあれませる

木の花姫の御守りは
千代も八千代も變らざれ

千代も八千代も變らざれ
神に任せし親と子の

心は清し惟神
御靈幸はへましまして

世の大本の大御神
開き給ひし三五の

言葉の花は天地と
共永遠に榮えませ
いや永遠に榮えませ

と述懐歌をうたひ、しとやかに舞ひ納めたれば、竹野姫は又もや起つて、長袖ゆたかに歌ひ舞ふ。

【あ】、有難し有難し
【う】づの都を立ち出でて
【お】さまる胸は智利の國
【き】しに昇りて山河を
【け】しき勝れし珍の國
【さ】かえに充てる父の顔
【す】ずしき眼月の眉
【そ】そぎ清めし神御魂
【い】づの身魂のみ守りに
【え】にしも深き海の上
【か】がやき渡る天津日の
【く】もなく渡る四人連れ
【こ】ころも晴るる今日の空
【し】ら雪紛ふ母の面
【せ】みの小川の水清く
【た】なばた姫の織りませる

【ち】はた百機綾錦

【つ】ぼみも開く梅ヶ香に

【て】る月さへも清くして

【と】こよの暗も晴れてゆく

【な】に負ふ清き高砂の

【に】しきの機を織りなして

【ぬ】なとも母揺にとり揺らし

【ね】がひ叶ひし親と子は

【の】どかな春に逢ふ心地

【は】るる思ひの鏡池

【ひ】びに教ふる言霊の

【ふ】かき恵みを仰ぎつつ

【へ】に來し夢も今はただ

【ほ】ーほけきよーの鶯の

【ま】聲とこそはなりにけれ

【み】じかき夏の一夜さに

【む】すぶも果敢なき夢の世の

【め】ぐりて此處に親と子は

【も】も夜の春に逢ふ心地

【や】ちよの椿優曇華も

【い】や永遠に薰れかし

【ゆ】くへも知らぬ波の上

【え】にしの船に乗せられて

【よ】を果敢なみつ進み來る

【わ】が身の上を憐みて

【い】づの御魂や瑞御魂

【う】きに惱める姉妹の

【ゑ】がほも清き今日の宵

【を】さまる夫婦親子仲 四十五文字の言靈の
 花も開いて實を結ぶ 結びの神の引き合せ
 娘と父と母神の 今日けふの團樂つどひぞ嬉しけれ
 今日けふの團樂つどひぞ樂しけれ

梅うめヶ香か姫ひめは又またもや起たつて歌うたひ舞まふ。

【ひ】は照てる光ひかる月つきは冴さゆ 【ふ】かき恵めぐみの父母ちちははよ
 【み】たりの娘むすめを何いつ時つまでも 【よ】は紫あぢさゐ陽あ花はと變かはるとも
 【い】つくしみませ永久とこしへに 【む】すぶ縁えにしの絲いと柳やなぎ
 【な】がながしくも親おやと子こは 【や】ちよの春はるの來きたるまで
 【こ】ころ變かはらぬ松まつの世よの 【と】きは堅かきは磐いはに何いつ時つまでも
 【も】も上がみ彦ひこと現あらはれて 千ち々ぢの民たみ草くさ守まもりませ
 【よ】ろづのものを救すくひませ 【ひ】がしに昇のぼる朝あさ日ひ影かげ

【ふ】二日の月は上弦の 【み】いづかくして世を守る

【よ】しも悪しきも難波江の 【い】つしか晴るる神の胸

【む】かしの神代廻り来て 【な】く杜鵑聲高く

八千代の春を祝ふらむ 【こ】ころも清き梅ヶ香の

【と】こよの春を迎へつつ 【も】もの千花に魁けて

【ち】り行く後に實を結ぶ 【よ】ろづ代祝ふ神の國

【ひ】かり洽き神の國 【ふ】かき恵みに包まれて

【み】ろくの御代を松代姫 【よ】し野に開く花よりも

【い】つも青々松縁 【む】つびに睦ぶ神人の

【な】さへ目出度き高砂や 【や】ま河田畑美はしく

【こ】ころも直き竹野姫 【と】きは堅磐に榮ゆべし

【も】も上彦の知らず世は 千代も八千代も限りなく

【よ】ろづ代までも榮えませ 萬代までも榮えませ

思ひは胸に三千年の 一度に開く梅の花

心のたけのすくすくと 世は治まりて伏し拜む

み民の心ぞ尊けれ 世のふしぶしに潔く

常世の松代くれ竹野 梅ヶ香慕ふ鶯の

色も香もある桃の花 血を吐く思ひの杜鵑

聲も春めき渡りつつ 松吹く風となりけり

聲も静かに治まりて 緑滴る夏山の

松吹く風となりけり 輝き渡る五月姫

霞をわけて天津日の 五月五日の花菖蒲

三月三日の桃の花 松竹梅の千代八千代

桃と菖蒲の睦びあひ 榮ゆる御代ぞ目出度けれ

榮ゆる御代ぞ目出度けれ

と節なだらかに、舞ひ終り座に着きぬ。珍山彦は、

ヤア、天晴々々、これは秀逸だ。天の數歌を三度も繰返された御手際は、三月

三日つみつかの桃ももの花はなよりも、五月五日ごぐわついつかの花はな菖蒲あやめよりも、美うるはしい、尊たふとい目め出度でい歌うたであ
つた。さあさあ、これからは照彦てるひこさまの番ばんだよ
照彦てるひこは儼然げんぜんとして立上たちあがり、聲こゑ高々たかたかと自みづから歌うたひ自みづから舞まふ。

天地百あめつちももの神かみたちの その喜よろこびをただ一人ひとり

うけさせ給たまふ桃上彦ももがみひこの 神かみの命みことの宣傳使せんでんし

地ちの高天原たかあまはらを出いでまして 御稜威みいづも高たかき高砂たかさこの

島しまに現あらはれ正鹿山まさかやま 津見づみの命みことの珍都うづみやこ

音おとに名高なだかき淤おどやまづ山み祇みの 神かみの命みことや村肝むらぎもの

心こころの駒山彦こまやまひこ司かき 御稜威みいづ輝かがやく蚊々虎かがとらの

名なもあらたまの貴うづの御子みこ 木この花はな姫ひめの御惠みめぐみに

珍山彦うづやまひこと宣なほり直なほし 心こころも晴はるる五月さつき姫ひめ

鴛鴦をしの衾ふすまの幾いく千ち代よも 外ほかへはやらぬ悦よろこびは

御稜威みいづも高たかき高砂たかさこの 濱邊はまべに繁しげる松代まつよひめ姫ひめ

世は呉竹野すくすくと
梅ヶ香匂ふ神の島

月日は清く照彦の
神の恵ぞ尊けれ

波も静かな國彦の
從屬の神と諸共に

珍の御國に永久に
鎮まりました高砂や

この浦船に帆を揚げて
月照彦と諸共に

出潮入潮平けく
いと安らけく凧ぎ渡る

大海原に浮く島の
國の榮えぞめでたけれ

國の榮えぞめでたけれ

駒山彦は、

妙々、天晴々々

と感嘆の聲をもらすのみ。
珍山彦も手を拍つて、

天晴々々。天晴れ國晴れ皆晴れよ、晴れよ晴れ晴れ晴れの場所、晴れの杯親子

の縁、ここに目出度く千代も八千代も、彌永久に祝ひ納むる

(大正一一・二・一三 舊一・一七 東尾吉雄録)

第三篇 天涯萬里

第一二章 鹿島立〔四〇五〕

茲こゝに淤おど滕山やまづみ見神のかみは、正まさ鹿山かやまづみ見神のかみに細こま々と後こう事をじ托たくし、
黄泉よもつ比良ひら坂さかの戰たたかひまで、珍うづの國くにを五さつ月き姫ひめと共ともに守まもらせ給たまへ□
と言いひ殘のこし、珍山うづやま彦ひこ、駒山こまやま彦ひこを伴ともなひ、數日すうじつ滯在たいざいの後のち別わかれを告つげて出いでむとする時とき、
松代まつよひめ姫めは淤滕山おどやまづみ見神のかみの袖そでを控ひかへて、
先まづ暫しばく御待おまち下くだされませ。妾わらは三人さんにんの姉妹きやうだいは、神様かみさまの廣ひろき厚あつき御惠おんめぐみに浴よくし、

戀しき父にも出會ひ、今また慈愛深き母を授かり、最早心残りも御座いませねば、何とぞ妾を御供に御使ひ下さいませいか。女ながらも黄泉比良坂の戦ひに働かして頂きたう存じます。どうぞ廣き大御心に見直し聞き直して是非御供に……」

と眞心を面に現はして頼み入るにぞ、淤滕山津見は、

「それは感心なことです。併しながら吾々の自由にならぬ。正鹿山津見神様に御許しを得られた上、御同道致しませう」

竹野姫、梅ヶ香姫の二人は、聲を揃へて兩手をつきながら、

「何うぞ妾も御供が致したう御座いますワ」

珍山彦「ヤア、今までは男四人と女一人、それでさへも随分道中は賑はうたものだ。何と云つても駒山さまのやうなデレのスーが混つて居るのだからなア。然るに今度は御三人の御姫さまがお越し遊ばすとなれば、道中は随分賑はふ事であらう。女が三人寄れば姦しいと云ふことがある。イヤもう、さうなれば鹿島立でなくて、【かしましい】立ちだ。併しながら其の志は感心々々、どれどれこれから此の珍山彦が御父上に伺うて来て上げませう」

と正鹿山津見神の居間に引返し、三人の娘の願ひを打破つて細々と陳べ立つるにぞ、正鹿山津見神は娘の勇氣に感じ、

「ア、折角可愛い娘に會うたと思へば、もう別れねばならぬか。イヤこれも神國のため、御道のためだ。會者定離は浮世の常、どうぞ珍山彦さま、娘たちを宜しく御願ひ致します」

と聲を曇らせながら答ふるを、珍山彦は、

「結構だ。その覺悟がなくては神様の宮仕へは到底勤まらない」

と三人の娘の前に現はれて、

「三人の御姉妹、喜ばなさいませ。實に御父さまの心は立派なものだ。此の親にして此の兒あり、此の兒にして此の親あり、此の夫にして此の妻あり、此の妻にして此の夫あり、此の君にして此の臣あり、此の臣にして此の君ありだ」

駒山彦は、

「オイ、グツ山、なにをグツグツ言つて居るのだ。同じ事ばかり繰り返して、又そろそろ地金が出て来たな」

松代姫「然らば妾姉妹三人、御供に仕へませう。何分宜しく御願ひ致します。御一同様」

と頭を下げて叮嚀に挨拶なすにぞ、二人の妹も手をついて、

「何分宜しく」

と笑を浮べて頼み入る。

珍山彦「サテ、これからは長の道中だ。照山峠を越えて、ハラノ港に出で、智利、秘露と長途をとぼとぼ歩んでカルの國へ渡り、目の國、常世の國と進んで行くのだから、七六ケしい挨拶は肩が凝つて困る。これからの道中は、師弟だとか、老幼男女の障壁をすつかり取つて、互に云ひたいことも言ひ合つて行くのだから、其心算で心安くして下さい」

「ハイハイ、有難う御座います」

と三人は嬉し涙にくれてゐる。

正鹿山津見、五月姫は門口に送り來り、一行の安全を祝し、立ち別れむとするところへ照彦は馳せ來り、

「モシモシ、私はエルサレムから三人様の御後を慕つて参つたもので御座います。今此處で御別れ申しては、何となく心許ない感じが致します。どうぞ特別の御詮議を以て、宣傳使の御供は叶はずとも、御姫様の御供をさして頂きたう御座います」

と怨めしさうに涙含むにぞ、正鹿山津見は、

「ヤア、照彦か。儂も三人の娘を宣傳使の一行に御預けしたものの、孱弱き娘のしかも三人、嚙々御迷惑なさることであらう。照彦、其方は娘たちの後に踵いて、いろいろと世話をしつてやつて下さい」

「ヤア御許し下さいませ、有難う御座います」

と照彦は榮えの面色勇ましく、一行の後に踵いて、珍の都を一同の宣傳使と共に立ち去りにけり。

(大正一一・二・一三 舊一・一七 有田九臯録)

第一三章 訣別の歌〔四〇六〕

淤藤山津見の宣傳使 心の駒山鞭撻ちて

進む珍山彦の神 朝日も「てる」の神國に

月雪花の三柱の 姫の命と諸共に

心の色も照彦の 從屬の司を随へつ

たださへ暑き夏の日を 蓑と笠とに凌ぎつつ

草鞋脚絆の扮装は 甲斐々々しくぞ見えにける

平群の山を乗り越えて 照山峠の頂上に

一行漸く着きにけり。

淤藤山津見「大變汗をかきました。此の山頂の木蔭で暫く息を休めませうかな」

珍山彦「勿ですよ、山の頂上へ登れば、吾々は休息するに決めてゐる。これは吾々

宣傳使の守るべき一個の不文律だ。松代姫様その他の御二方様も、もう此の峠を下ると、御父さまの居られる珍の國は見えませぬよ。十分よく見て置かれるがよろしからう。

眸を放てば連巒疊峰 遠きは綠黛談るが如く

近きは淡冶笑ふが如し 煙霞杳靄の裡

伏して山河を眺望すれば 滔々溪流清く白帶を晒すが如し

洋々茫々海に灌ぐ

駒山彦「ヤア、珍山彦、そりや何だ。妙な詩歌だな」

「俺の詩は「あや」詩、可笑詩、面白詩、さうして苦詩、暑苦詩中に涼詩と云ふ珍詩奇詩だ、詩歌は味はつて見て貰はぬと困るよ。かう見えても大詩人だからね。

南無大慈大悲觀世音菩薩だ。アハ、ハ、ハ、

於滕山津見「向ふに見ゆるは八ラの港、智利の國には狹依彦、祕露の國には紅葉

彦の宣傳使が控へて居るから、直様八ラの港から、アタルの都へ着いて、カルの國へツ―と行つたら如何だらうな」

珍山彦「左様ですな、吾々は行く處が多いのに、智利や祕露の國へ行つて宣傳するのは、笠の上に笠を被つたやうなものだ。何れ脱線だらけの宣傳をやつて居るだらうが、それでも新水の通つたところは、マー好いとして、新しいカルの國へ海上を船でツ―【とこさ】と参りませうよ」

駒山彦「ヤア、三人の女神様、脚は何うでしたな。よくマー、手弱女の身で吾々と一緒に來られましたな。ヤア、感心々々」

竹野姫「妾は仰せの如き年若き手弱女。貴方がたの御供は出来るか如何か、途中で御迷惑をかけてはならないと心配して居りましたが、神様の御【かげ】で、思はず脚が先へ先へと運びまして、ちつとも疲れませぬでしたワ」

梅ヶ香姫「姉様たち、これが御父さまの御國を見離れるところですから、一遍何か別れに歌ひませうか」

松代姫「姉妹三人が一つ歌つて、珍の國に別れませう」

と、三人一度に聲を揃へて歌ひ始めた。

父と母との永久に

鎮まりいます珍の國

珍の都を後にして

大加牟豆美の神となり

この智利山の坂の上に

登り了せし三人連

今吹く風は東風か

妾三人が父母を

慕ふ心の思ひねを

乗せて往け往け珍の國

深山の空の風薫る

色も目出度き桃上彦の

神の命や五月姫

妾は常世へ進む身の

進みかねたる珍の空

空往く雲の心あらば

思ひを乗せて吾父の

御許に送れ青雲の

棚引くかぎり白雲の

墜居向伏すその極み

神の教を傳へ行く

松竹梅の宣傳使

心の色も照彦の

清き從神の御護りに

八みなとの港を船ふな出して
波なみ風かぜ荒あらき海原うなばらを

アタルの港みなとを指さして行ゆく
身みなり装なりもカルの國境くにざかひ

心こころの花はなや目めの國くにの
空そらを仰あふぎつ常世國とこよくに

ロツキー山さんも踏ふみ越こえて
又またも海原うなばら打うち渡わたり

曲津まがつの猛たけぶ黄泉島よもつじま
黄泉軍よもついくさを言こと向むけて

淤おど滕やま山づ津見づみの神様かみさまや
勇いさむ心こころの駒山彦こまやまひこや

珍山彦うづやまひこと諸共もろともに
太ふとしき勳いさをを後のちの世よに

芙蓉はちすの山やまより尚なほ高たかく
龍たつの海うみより彌深いやふかき

神かみの光ひかりと御惠みめぐみを
いとこしへあらはに現あらさむ

嗚呼あ父ちち上うへよ母上ははうへよ
名殘なごりは盡つきじ山やまの上うへ

山やまより高たかき御惠みめぐみの
そひとのひと一つだも報むくい得えず

出いで行ゆく妾わらはを宥ゆるしませ
進すすむ吾われらを恕ゆるせかし

只何事ただなにごとも人ひとの世よは
直日なほひに見直みなほし聞きき直なほし

身みの過あやまちは宣のり直なほす
三五教あななひけうの神かみの教のり

いと平たひらけく安やすらけく
妾わらはの罪つみを宣のり直なほせ

朝あさひ日は照てるとも曇くもるとも
月つきは盈みつとも虧かくるとも

假たとへ令だいち大地しづは沈しづむとも
わが垂たらち乳ち根ねの慈いつく愛しみ

何いつ時の世よにかは忘わするべき
いつの世よにかは忘わするべき

松まつ、竹たけ、梅うめの三み人たり連づれ
心こころも智て利るの山やまの上うへ

遙はるかに拜をがみ奉たてまつる
遙はるかに拜をがみ奉たてまつる

と歌うたひ了をはりて芝しば生ふの上うへに淑しとやかに腰こしを下おろして休やすらふ。

珍うづやま山ま彦ひこ「ヤア、流さすが石がは女をんなだ。女をんならしい優やさしい歌うただ。それで結けつ構こう々けつ々こう、サアサア、

一いち同どう参まゐりませう」

と先さきに立たちて照てる山やま峠たうげを下くだり行ゆく。

(大正一一・二・一三 舊一・一七 土井靖都録)

第一四章 闇の谷底（四〇七）

時、一行の足は「びたり」と止まり、どうしても一歩も進む事が出来ない。時、一行の足は「びたり」と止まり、どうしても一歩も進む事が出来ない。

珍山彦「ヤア、足が歩けないやうになつちまつた。どうだ、皆さまは」

一同「イヤ、吾々も同じ事だ。合點の行かぬ事もあるものだ」

駒山彦「何でもこれは向ふに悪い奴が澤山居て、吾々を待ち討ちしようとして居るのに違ひないワ。そこで神様が吾々の足を縛つて、軽々しく進むでない。胸に手をあて、よく後前を考へて見よ、との暗示を與へられたのだらう」

一行七人は途上に立つたまま、石地藏のやうに固まつて仕舞つた。傍の老樹鬱蒼たる森林の中より、

「淤滕山津見、駒山彦、照彦」

と破鐘のやうな聲が響いて来る。その聲と共に三人の身體は、何物にか惹きつけらるるが如き心地して、思はず知らず聲する方に向つて、自然に足が進み、遂に

三人の姿は見えなくなりたり。

後に珍山彦、松、竹、梅の四人は、何時の間にか足も自由になり、路傍の清き芝生の上に端坐して、

珍山彦「サア皆さま、纖弱き女の身で、まだ三五教の教理も知らずに、宣傳使となつて、悪魔の蔓る此の世の中を教導すると云ふ事は、一通りの苦勞では行くものではない、さうして、斯う「どや」どやと七人も列んで宣傳に歩くと云ふことは、一寸見れば華々しく立派に見えるが、それは皆仇花だ。誠の道の宣傳は一人々々に限る。これから姉妹三人は、この珍山彦が及ばずながら實地の教訓を施して上げますから、今の間に吾々四人は、三人の宣傳使に離れて八ラの港からアタルへ着き、それから常世の國に廻つて、實物教育を受け、黄泉島を宣傳致しませう。サアサアお出でなさいませ」

と先に立つて行く。三人は引かるるやうに珍山彦の後を追ふ。珍山彦は言しづかに、

「皆さま、淤滕山津見や駒山彦や照彦のことは【すつかり】忘れて仕舞ふのだ。」

人間は背水の陣を張つて、九死に一生の困難に遭はねば、眞實の誠の道は開けるものではない。苦勞の花の咲いたのは盛りが長い、これから吾々と共に概略仕事が出来たら、姉妹三人手分けして、ちりちりばらばらになつて神業に奉仕するのだ。假令一人になつても神様が守つて下さるから、師匠や兄弟を力にしたり、杖につくやうな事では、到底神界の奉仕は完全に出來るものでない。サア行きませう」

と「ハラ」を指して進み行く。

淤滕山津見ほか二人は、怪しき聲に惹きつけられ、不知不識の間に谷川を遡つて、數里の山奥に迷ひ入る。

折しも十五夜の月は東天に輝き渡れども、峨々たる高山と高山との深き谷間は、月影もささず、夜は追々と更け行くばかり、寂しさ刻々に迫り、三人は此處に云ひ合したる如く一度に腰を下し、谷川の傍に端坐しぬ。三人の身體は又もや強直して、「びく」とも出来なくなり、自由の利くは首のみ、鬱蒼とした檜の木の上から俄に

「ウ、」

と大なる唸り聲聞え来る。

淤藤山津見「ヤア二人の方、私は身體が一寸も動かない、貴方は如何ですか」

駒山彦「へ、へ、變だ。こんな變挺な事はないワ」

照彦は雷のやうな聲を出して、

「此方は月照彦の命であるぞよ」

駒山彦「何、月照彦だ。馬鹿言へ、そんな狂言をすな。貴様は三人の娘さまに

「つきてる」彦だが、今は薩張「離れてる」彦ぢやないか。こんな闇い山奥へ踏

み迷うて、馬鹿な眞似をすると、駒山が承知をしないぞ。そんな氣樂な事かい」

照彦「【ア】ハ、ハ、ハ、阿呆らしいワイ。三五教の宣傳使と豪さうに言つて、そ

こら邊を大きな聲を張り「あ」げて歩き廻る馬鹿宣傳使、どうぞや、一寸先は眞

の暗の、此谷底に捨てられて、「ア」フンと致したか。顎が外れたか。【あ】ま

り呆れてものが言はれぬ。開いた口がすばまらぬぞよ。【ア】ハ、ハ、ハ、憐れなもの

ぢや、身魂の性來の現はれに魂を洗へよ、尻を洗へよ、足を洗へよ、明かな神の

をへ
教は【あ】りながら、歩み方が違ひはせぬか」

「【ア】、此奴は悪魔の神憑りになりよつた。【あ】られもない事を口走りよつて、ほんにほんに憐れな者だな。これこれ於滕山さま、貴方もぢつとして居るに、此場合【あ】つぱれ審神をして照彦に憑依して居る悪魔を現はしてやつて下さいな」

「イヤ、吾々も、俄に足腰たたぬ不自由の身、【あ】まりのことで【あふん】と致して、荒膽をとられて了つた。【ア】、恥づかしい事だワイ」

照彦「【イ】ヒ、ヒ、ヒ、可憐しいものだ。異國の果で威張つた報いで、【い】まはの際に【い】ろ【い】ろと悔んだところで、如何ともする事は出来まい。かやうな處を數多の國人に見られたならば、宣傳使の威嚴は全く地に墜ちるぞ。神が意見致さうと思つて、【い】ろいろ雑多に苦勞を致し、湯津石村の此谷底に誘ひ來りしは神の慈悲。宣傳使は只一人で天下を布教宣傳すべきものだ。それに何ぞや、物見遊山のやうに、ぞろぞろと幾人もつらつて宣傳に歩く屁古垂者、以後は必ず慎しめよ。神の言葉に違背するな。【い】いか、返答如何に」

駒山彦「【い】かにも、蛸にも、蟹にも、足は四人前、もう【い】い加減に下つて下さい、お鎮まりを願ひます。天狗か何だか知らないが、こんな谷底へ放り込まれて意見も何も聞かれるものか、【こら】照彦の副守護神よ、何時までも愚圖々々致して居ると、靈縛をかけてやらうか」

「【ウ】フ、フ、フ、【う】しろを振り向いてよく考へて見よ。【う】ろろると此山奥に踏み迷ひ來りしは、全く汝の身魂の暗きがため、動きの取れぬ汝の體、【う】かうか致すと足許から火が燃えて來るぞよ。良の金神の教を何と心得て居る。牛の糞のやうな身魂を致して、天下の宣傳使とは片腹痛い、有爲轉變は世の習ひ、牛の糞でも天下を取る、煎豆にも花が咲くと、萬一の僥倖を夢みて迂路つき廻る宣傳使、後指を指されて居るのも氣がつかず、得意になつて濁つた言靈の宣傳歌を歌ふ狼狽へもの、此上もなき迂闊、迂愚、迂散な奴ども」

駒山彦「【う】つかりしとると、どんな目に遭はされるか分つたものぢやない。これこれ淤藤山、俯いてばかり居らずに、貴方も天下の宣傳使ぢやないか、何とかして照彦の憑靈を縛つて下さいな」

「煩わづらくても仕しか方がない。これも神かみ様の試こころみだ。氣きを落おち付つけて聞きいて居をれば大おほに得うるところがある。私わたしは却かへつてこれこれが嬉うれしい」

照彦てるひこ「【エ】へ、へ、へ、へ、」

駒山彦こまやまひこ「ヤア、又また【エ】へ、へ、へ、だ。豪えいい事ことになつて來きた。もう好えい加減かげんにお鎮しづまりを願ねがひませうか、遠慮會釋えんりよもなしに、吾々われわれの小言こごとばかり言いつて、得體えたいの知しれぬ神憑かむがりぢやなあ」

照彦てるひこ「【エ】へ、へ、へ、閻魔様えんまさまとは此方このほうの事ことぢやぞ、これから些ちと、豪えいい目めに遭あはしてやらう。遠近えんきんを股またにかけて、遠慮會釋えんりよもなしに嘖さへつり居をる駒山彦こまやまひこの宣傳使せんでんし、一ひとつや二つふたの山坂やまさかを越こえて、【え】らいの、苦くるしいのと、恥はぢも知しらずに、よくも【ほざい】たなあ、口くちばかり偉えいさうに申まをす宣傳使せんでんし」

駒山彦こまやまひこ「【エ】へ、へ、へ、【え】ぐい事ことばかり言いふ得體えたいの分わからぬ副守ふくしゆごしん護神ごじんだ。もう結構けつこうです、これこゝろで御遠慮ごえんりよ申まをませう。好加減えいかげんにやめて下ください。縁起えんぎの悪わるい、此暗このやみの晩ばんに谷底たにぞこに坐すわらせられて、怵たまつたものぢやありやしない、馬鹿ばか々々ばかしい、照彦てるひこの奴やつ、もう好加減えいかげんに鎮しづまつたらどうぢや」

照彦「オホ、臆病者の二人の宣傳使。於滕山津見、何を【オ】ド【オ】ドと恐れて居るのか。奥山の谷より深い、道を分け行く三五教の宣傳使、負うた子に教へられ、淺瀬を渡る【お】ろか者の、狼心の鬼と惡魔の容物となつた【お】化の宣傳使。【お】氣の毒でも、蠅毒でも、猫入らずでも、汝の心の鬼は容易に往生致さぬぞよ。恐るべきは人の心の持方一つ、往生際の悪い守護神は、神は綱を切つて仕舞はうか」

駒山彦「モ、【お】いて呉れ、大きな聲で俺達を脅かしよつて、そんな事で怖ぢつく俺ぢやないワイ。【を】かしたな聲を出しよつて、人の缺點ばかり【ほじくる】奴は、鬼が大蛇か狼の守護神だ。俺の神力を見せてやらうか、【お】つ魂消て尾を捲きよるな。俺が奥の手を出して見せたら、遠の鬼の守護神も尾をまいて落ちるだらう」

照彦「【オ】ホ、面白い面白い」

(大正一一・二・一四 舊一・一八 加藤明子録)

第一五章 團子理屈（四〇八）

三五の月は昇れども、山と山との谷間は、黑白も分かぬ眞の暗、空せまく地狭き谷底に、三人の宣傳使は端坐し、首ばかり動かし居る折柄、何處ともなく虎狼の唸るやうな聲、木靈を響かせ聞え來る。

「ウーオー」

駒山彦「イヤー虎か狼か、【どえらい】聲が聞えて來た。淤滕山津見さま、神言

でも上げませうか」

淤滕山津見「ヤー、仕方がない、神言を奏上しませう」

照彦「【カ】、神を松魚節に致す宣傳使、【か】なはぬ時の神頼み、神言で

も」とは何だ。それでも宣傳使か、でも宣傳使。稜威輝く【てる】の國、珍は

【てる】てる【はる】山曇る、オツトドツコイ淤滕山くもる、駒山彦は雨降らす、

雨は雨だが涙の雨だ。【か】なしさうな其面つき、假令【か】らだは八つ裂にな

つても、神のためなら、チツトも【か】まはないと言ふ覺悟がなくて、誠の道が

開けるか、【カ】ラ魂のさかしら魂、神の心も推量して呉れても宜からう。少しの艱難辛苦に遭うても、尻を捲つて雲を【か】すみと逃げ行く宣傳使、【か】らすのやうな黒い魂で誠の神を【か】ついで、勝手な【ねつ】を吹き歩く【がとう】蟲奴が。【か】てて加へて蟹が行く横さの道を歩みながら、吾程誠の者はない、誠一つが世の寶、誠をつくせ、眞心になれと、【か】たる計りの宣傳使。

【か】らすのやうに喧ましい蚊々虎さまの素性も知らず、軽い男と侮つて、汗

【か】き、恥【か】き、頭【か】き、【かばち】の高い、【カ】ラ威張りの上手な神の使ひ、【カ】ラと日本の戦があるとは、汝らが御魂の立替へ立直し、今までの【カ】ラ魂を、オツ放り出して、水晶の生粹の日本魂に立替へいと申すことだ。喧しいばかりが宣傳使でないぞ。改心いたせばよし、どこまでも分らねば、神はモウ一限りに致すぞよ。何程氣の長い神でも、愛想が盡きて、缺伸が出るぞよ

駒山彦、【カ】、叶はぬ叶はぬ、勘忍して下さいな。是から改心致しますから、モウ吾々の事に構ひ立てはして下さるなよ。【か】いて走るやうな掴まへ處のな

い意見いけんを聞きかされて、ア、好いい面つらの皮「か」はだ」

照彦てるひこ「【キ】、貴様「き」さまは餘程よほどしぶとい奴やつ、此方このほうの申まをすことが氣「き」に入いらぬか。奇怪「き」つくわ

千萬いせんばんな駄法螺だぼらを吹ふき廻まはつて、良いい氣「き」になつて氣樂「き」らくさうに、宣傳せんでん歌かを歌うたひ、氣「き」まぐ

れ半はん分に、天てん下かを廻まはる狼狽うろたへもの者もの、氣「き」拔ぬけ面づらして、氣「き」が利「き」かぬも程ほどがある。鬼門「き」もんの金こん

神現じんあらはれて善ぜんと惡あくとを立別たてわける。鬼畜「き」ちくのやうな、氣違「き」ちがひ魂たまの宣傳せんでん使しは、世よの切「き」り替かへ

に【キ】ツパリと取拂とりはらひ、根ねから葉はつから切「き」つて了しまふぞよ。貴様「き」さまの氣「き」に入いらぬは尤もつと

もだ。ひどい氣強「き」つよい鬼神「き」じんのやうな言葉ことばと思おもふであらうが、よく氣「き」を付つけて味あぢはう

て見みよ。【きくらげ】のやうな耳みみでは神かみの誠まことの言葉ことばは聞「き」き取とれまい。氣「き」が氣「き」でな

らぬ神かみの胸むね、いつまでも諾「き」かねば諾「き」くやうに致いたして諾「き」かして見みせうぞよ。汚「き」たない

心こころをさつぱり放ほかして、誠まことの神心かみこころになり、萬事ばんじに對たいして機轉「き」てんを利「き」かし、心配こころくはり、

氣配「き」くはりの出で來きぬやうな事ことでは、氣「き」の利「き」いた御用ごようは到底たうていつと勤つとまらぬぞよ。【き】な

【き】な思おもはず氣「き」に入いらなくても、齒はに衣「き」ぬを着「き」せぬ神かみの言葉ことば、是これから氣張「き」ばつて氣分「き」ぶん

を改あらため、氣不「き」ぶ性しやうな心こころを立直たてなほし、氣隨「き」ず氣儘「き」ままをさらりと放ほかし、神かみと君「き」みとに誠まことを盡つくし、

氣六「き」むツかしさうな面おもてをやはらげ、心こころを決「き」めて荒膽あら「き」もを練ねり、【キ】ヤ【キ】ヤ思おもは

ず【キ】ユウ【キ】ユウ苦しまず、心を清め身を淨め、誠の神に従へば氣樂に道が擴まるぞよ。【キ】チリ【キ】チリと箱さした様に行くぞよ。神を笠に着るなよ。拔刀や刃物の中に立つて居る様な心持になつて、油斷を致すな。窮まりもなき神の恩、萬の罪咎も神の光りに消え失せて、身魂は穩かに改まり、さうした上で始めて三五教の宣傳使だ。どうだ、分つたか」

駒山彦「【キ】、氣が付きました。氣張つて氣張つて是から早く改心を致します。此氣味の悪い谷底で、奇妙奇天烈な目に逢うて氣を揉まされて、何たるマア氣の利かぬ事だらう。神の氣勘に叶うた積で、氣張つて氣張つて心配り氣配りして、此處まで勤めて來たのに、思ひがけなき氣遣ひをさされた。サア、もう【キ】リキリと決りをつけて、來た道へ歸らうかい。淤滕山津見さまも何だ、一體氣の小さい、おどおどとして顫うて居るぢやないか。ナント膽玉の弱い男だな。こんな所に長居をすると、猿の小便ぢやないが、先のこと氣にかかるワ」

淤滕山津見「【キ】まりの悪い、不氣味な態で【キ】ツウ膏を搾られました。際どいところまで素破抜かれて、ア俺も氣が氣ぢやないワ。ドウデ吾々は神様の氣

に入るやうな宣傳はできては居らぬからなア」

照彦「〔ク〕、苦勞なしの、心の暗い暗雲の宣傳使」

駒山彦「モシモシ、〔ク〕、暗がりになんか下らぬ事を、モ、モウ是位で止めて

下さい」

照彦「苦しいか、苦面が悪いか、臭い物に蓋をしたやうに隠し立てしても、何程

〔クスネ〕ようと思つても、四十八癖のあらむ限りは改めてやるぞ。下らぬ理屈

を口から出放題、〔グ〕ツ〔グ〕ツ〔グ〕デと〔ク〕ドイ理屈を捏立て、

一つ違へば〔ク〕ナ〔ク〕ナ腰になつて、一寸した事でも苦にするなり、委しき

事も知らずに、喰ひ違つた御託を竝べ立て、九分九厘で覆るの覆らぬの、一厘の

仕組を〔く〕まなく悟つたの、汲み取つたのと、そりや何の囁語、汲めども盡き

ぬ神の教、大空の雲を掴むやうな掴まへ所のない、駄法螺を吹いたその酬い、悔

し残念をコバリコバリ、今までの取違ひを悔ひ改め、〔ク〕ヨ〔ク〕ヨ思はずに

神の光を顯はし、闇黒の世を照し、また来る春の梅の花、開く時を呉々も待つが

よいぞよ。〔ク〕レンと返る神の仕組、苦勞の花の開く神の道、委しいことが知

りたくば、悔い改めて神心になれ。噛んで【く】くめるやうに知らして置くぞよ」
駒山彦「【ク】、【ク】ド【ク】ドしいお説教、モ、分りました分りました、結構で御座います。決して決してモウ此上は取違ひは致しませぬ。何卒これで止めて下さいませ、さうして吾々三人の身體を自由になるやうにして下さい」
照彦「【ケ】、結構々々とは何が結構だ。毛筋の横巾も違はぬ神の教だ。決心が第一だ。道を汚してはならぬから、神が氣もない中から氣を付けるのだ。怪體な心を取直し、【ケ】チ【ケ】チ致さず、神心になつて居らぬと、獸の身魂に欺されて、尻の毛まで一本もないやうにしられるぞよ。嶮しき山を上り下りしながら、毛を吹いて疵を求めやうな其行り方、従者を連れたり、女を伴れたり、そんな事で神の教が擴まるか、毛蟲よりも劣つた宣傳使」
駒山彦「【ケ】、怪體なことを言ふ神だな。淤滕山さま、如何しよう。耳が痛くつて、面白くもない、コンナ目に遇はされやうと思つたら、宣傳に廻つて來るぢやなかつたに、ア、何と宣傳使は辛いものぢやなア。毛色の變つた照彦のやうな男が來るものだから、コンな怪體な谷底で、眉毛を讀れ、鼻毛を抜かれ、尻の

毛けまで抜ぬかれるやうな、怪けしからぬ目に遇あうて、谷底たにぞこへ蹴落けおとされて、【けが】したよりも餘程よほどつまらぬ目に遇あふのか。お前まへさまは頭あたまが坊主ばうずだから、【けが】なくてよからうが、駒山彦こまやまひこは二進にうちも三進さうちもならぬ目に遇あうて、困り切こまきつてゐるワイ〃照彦てるひこ『【こ】、駒山彦こまやまひこ、何を言いふか、乞食じきしばゐ芝居しばゐのやうに、男女だんぢよしちにんづれ七人連しちにんづれにて【ゴ】テ【ゴ】テと、此處こゝ彼處かしこ【ゴ】ロツキ廻まはる宣傳使せんでんし、神かみは勘忍袋かんにんぶくろが破やぶれるぞよ。此こゝ世のよの鬼おにを往生わつじやうさして、神かみ、佛事ぶつじ、人民じんみんを悦よろこばす神かみの心こゝろ、耐こらへ忍しのびのない心こゝろの定きまらぬ、破やぶれ宣傳使せんでんしが何なにになるか。梢こすゑに來きて鳴なく驚うくひすでも、春夏はるなつあきふゆ秋冬あきふゆはよく知しつて居あるに、應こたへたか、此方こゝの云いふ事ことが分わかつたか。【こ】ツ【こ】ツと角張かくばつたもの言いひをしたたり、【ゴ】テ【ゴ】テと小理屈こりくつを捏こねたり、事ことに觸ふれ物ものに接せつし、下くだらぬ理屈りくつを捏こね廻まはし、人ひとの好このまぬ事ことを無理むりに勸すすめ、怖こはがられて強つよい物ものには媚こび諂へつらひ、後あと先さき眞暗まつくらの神かみを困こまらす駒山彦こまやまひこの宣傳使せんでんし、米喰こめくふ蟲むしの製糞器せいふんき、菰こもを被かぶつた乞食じきのやうに、一寸ちよつとの苦勞くらうに弱音よわねを吹ふき、泣なき聲こゑをしぼり、モウ【こ】いつあ叶かなはぬ、宣せん傳でんは【こ】リ【こ】リだと弱氣よわぎを出だしたり、怖こはい顔かほして威張みばつて歩あるく狼狽うろたへ者の得え手て勝手かたな【ねつ】を吹ふくお取次とりつぎぎとは、おどましいぞよ。鬼おにも大蛇おほちも狼おほかみも恐おそれて、

尾を振つて跣足で逃げる、イヤ逃げぬ、心の小こい腰の弱い困り者の駒山彦の宣傳使

駒山彦「サ」、嘖るない、「サ」ツパリ分らぬ事を喋り散らしよつて、態が悪いわい。逆捻に俺の方からちつと嘖つてやらうか、餘り喋ると逆トンボリを打たねばならぬぞよ。先にある事を世界に知らず、三五教の悟りのよい流石は宣傳使だ

照彦「サ」、騷がしいワイ

駒山彦「ア」、五月蠅いなア、「サ」ツパリ油を搾つて了ひよつた。「さ」ても

【さ】ても残念なことぢや

照彦「サ」ア「サ」ア「サ」ア是からだ。賽の河原で石を積む、積んでは崩す積んでは崩す氣の毒な尻の結べぬ宣傳使。月は御空に冴え渡れども、心は暗き谷の底、足許は眞暗がりて谷底へ逆トンボリを打たねばならぬぞよ。神の申すことを逆様に取るとはソリヤ何の事、先へ先へと知らず神の教、先の知れぬ宣傳使が、神を審神するといふ探女のやうな、御魂の暗い奴、酒と女に魂を腐らし、やうや

う改心致して俄宣傳使になつたとて、【サ】、それが何豪い。差添の種ぢやと威張つて居るが、何も彼も差出の神か、イヤ狸だ。流石の其方も神の申す今の言葉、指一本指す事は出来まい。早速開いた口は閉まるまいぞよ、沙汰の限りぢや。

【サ】タン惡魔の虜となつても、【サ】ツチもない事を觸れ歩き、儲も儲も悟りの悪い二人の宣傳使、蠶の【サ】ナギのやうに、一寸の事にもプリンプリン尾を振り頭を振り、盲目滅法の審神を致し、本守護神だ、正副守護神だと騒ぎ廻り、日本御魂の兩刃の劍は【サ】ツパリ鑄刀。探り審神者の向ふ見ず、様々の曲津に欺かれ、えらい目にあはされながら、まだ目が醒めぬか。之でも未だ未だ我を張るか。儲も【さ】もしいい心だのう。塞ります黄泉彦神の曲の使を信じ、よくもよくも呆けたものだ。今から【さ】らりと我を折りて、慢心を洗ひ去り、各自に吾身を省みて、猿の尻笑ひを致すでないぞ。恥を曝されて頭を搔くより、禪でもしつかりとかけ。騒ぐな、轉るな、冴えた心の望の月、【サ】ア【サ】ア淤滕山津見、駒山彦、神の申す事がチツトは腹に入つたか」

駒山彦「【シ】、、、【し】ぶいワイ。うかうか聞いてをれば面白くもない、こ

んな谷底たにぞこでアイウエオ、カキクケコの言靈ことたまの練習れんしゅをしよつて、餘り馬鹿ばかにするな
い。言靈ことたまなら俺おれも天下てんかの宣傳使せんでんしぢや、負けはせぬぞ。言ふ事ことはどんな立派りっぱな事ことを
言つても、行おこなひは照彦てるひこぢやで、さう註文ちゅうもん通りには行くものぢやない。「ス」力屁べ
を放ひつた様な事ことを吐ぬかしよつて、「セ」んぐりせんぐりと、「ソ」々、「そ」ろ
【そ】ろと棚たなおろしをしやがつて、「チ」々、「ち」つとも應こたへぬのぢや。「ツ」々、
詰つしまらぬ事ことを、「テ」々、「て」手柄てがらさうに、「ト」々、「と」呆とぼけやがつて、「ナ」々、「な」を
吐ぬかしやがるのだ。「ニ」々、「に」憎にくつたらしい、「ヌ」々、「ぬ」抜ぬけたやうな聲こゑで、
【ネ】々、「ね」根ねも葉はもないやうな事ことを、「ノ」々、「の」述のべ立て、「ハ」々、「は」腹はらが承知しょうち
せぬワイ。「ヒ」々、「ひ」晝ひるならよいがコンナ暗やみの夜よに、「フ」々、「ふ」惡戯ごぎた事ことを、
【へ】々、「へ」屁へのやうに、「ホ」々、「ほ」吐ほきよつて、「マ」々、「ま」曲津まがつかみ神奴めが、
【ミ】々、「み」みず奴めが、「ム」々、「む」蟲むしケラ奴めが、「メ」々、「め」盲目めくらめ奴めが、
【モ】々、「も」百舌もずの親方おやかた奴めが、「ヤ」々、「や」八ヶ間やちかましい、「や」やこしい、「イ」々、
嫌いやな事ことを【ユ】々、「ゆ」云ゆひよつて、「エ」々、「え」得體えたいの知しれぬ、「ヨ】々、「よ」黄泉よもつ神奴め
が、【ラ】々、「ら」埒らちもない、「リ】々、「り」理屈りくつを捏こねよつて、「ル】々、「る」類るみを以もつて曲まが

津を集めよつて、【レ】、連發する、【ロ】、碌でなしの世迷言、【ワ】、
分りもせぬ、【イ】、【い】やらしい、【イ】ケ好かない事を、【ウ】、呻
り立て、【エ】、【エ】ー、モー恐ろしい處か、【を】かしいワイ。【お】化
の大蛇の神憑奴が

照彦 「【シ】、

駒山彦 「また【シ】ーやつてけつかる。縛つてやらうか、蟲の守護神奴が」

照彦 「【シ】、思案して見よ、蟲の親方、人の血を吸ふ毛蟲の駒山彦、執念深

い宣傳使、修羅の巷に踏み迷ひ、後先見ずの困つた駒山彦。叱られる事が苦しい

か、叱る神も随分苦しいぞ。【シ】力と正念を据ゑて【シ】ツカリ聞け。敷島の

大和の國の神の教に、【シ】、如くものはないぞ。醜の曲津に誑らかされ、汝

が仕態は何事ぞ。獅子、狼の様な心をもつて、世界の人間が助けられるか、至粹

至純の水晶の心になれ。下の者を大切に致せよ。【し】ち難かしい説教を致すな。

【シ】ツカリと胸に手をあて考へて見よ。一度は死なねばならぬ人の身、死んで

も生き通しの靈魂を研けよ。屢々神は諭せども、あまり分らぬから神も痺をさら

して居るぞよ。【し】ぶといと言うてもあんまりだ。終ひには往生致さねばならぬぞよ。【シ】【ミ】【ジ】【ミ】と神の教を考へて見よ。腹帯を【シ】ツカリ締めて掛れよ。霜を踏み雪を分けて世人を救ふ宣傳使、知らぬ事を知つた顔して、白々しい嘘言を吐くな。尻から剥げるやうな法螺を吹くな。知ると言ふ事は神より外にないぞよ。天地の事は如何な事でも説き明すとは、何の【シ】レ言、困つた代物ぢや。嗚れ聲を振り立てて神言を奏上したとて、天地の神は感動致さぬぞよ。身を魂を研げよ、身魂さへ研けたなら、圓滿清朗な聲音が湧いて来るぞよ。強ひて嫌なものに勧めるな。因縁なきものは時節が來ねば耳へ入らぬ。修身齊家、治國平天下の大道だと偉さうに申して居れど、吾身一つが治まらぬ、仕様もない宣傳使、何が苦しうて【シ】ホ【シ】ホと憔悴れて居るか。荒魂の勇みを振り起して、モツト勇氣を出さぬかい」

駒山彦「【シ】、【シ】ツカリ致します。奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の、聲聞く時は哀れなりけり、だ。えらい鹿に出會して【しか】られたものだい」

淤藤山津見「ヤア、拙者は脚が起つた、身體が自由になつた、大分に魂が研けた

と見えるワイ。いやもう何れの神様が存じませぬが、よくもまあ結構な教訓を垂れさせられました。屹度之から心を入れ替へて、御神慮のある處を謹しんで遵奉致します」

駒山彦「ヤア淤滕山さま、脚が起ちましたか、ア、それは結構だ。吾々はまだビクとも致しませぬ、胴が据つたものですか」

「貴方は最前から聞いて居れば一々神様に口答へをなさる、貴方は發根からまだ改心は出来て居ない。改心さへ出来たならば吾々の様に、神様は脚を起たして下さいませう。何卒早く屁理屈を止めて改心して下さい」

駒山彦「カ」カ、改心と言つたて、照彦の様な奴さまに憑つて来る様な守護神の言ふ事が、如何して聞かれるものか、神靈は正邪賢愚に應じて憑依されるものだ。大抵此肉體を標準としたら、神の高下は分るでせう」

照彦「ス」ス、直様、淤滕山津見は脚が起つたを「きり」として、カルの國に進んで行け。道伴れは決してならぬ」

「仰せに従ひ改心の上、直様参ります。今まではえらい考へ違ひを致して居りま

した」

照彦「一時も早く、片時も速に此場を立去れ」

駒山彦「ア、淤滕山さま、それはあまり得手勝手だ。自分は脚が起つてよからう

が、吾々の様な脚の起たぬ者を見捨てて行つても、神の道に叶ひませうか。朋友

の難儀を見捨てて何處へ行くのです。神の道は、親切が一等だと聞きました。そ

れでは道が違ひませう」

照彦「駒山彦の無理屈は聞くに及ばぬ、早く起つて行け。駒山彦の改心が出来る

まで、此方が膏を搾つてやらうかい」

淤滕山津見は徐々と此場を立ち去らむとする時、三五の明月は山頂に昇り、細

き谷間を皎々と照せり。淤滕山津見は此月光に力を得、宣傳歌を歌ひながら谷道

を傳ひて、もと來し道を下り行く。

(大正一一・二・一四 舊一・一八 森良仁録)

第一六章 蛸釣られ（四〇九）

神の恵の彌深き、この谷底に残されし、駒山彦は淤滕山津見の歸りゆく姿を眺めて、

「オーイ、オーイ」

と呼び止めるを、淤滕山津見はこの聲を木耳の、耳を塞いて悠々と、宣傳歌を歌ひながら下り行く。月は漸々にして、山の端を出で、皎々と輝き渡り、二人の面はここに判然せり。見れば、照彦は、俄に容貌變り、珍山彦の姿に變化し居たるなり。

駒山彦「ヤア、貴様は照彦と思つてゐたら、何だ、蚊々虎の珍山彦か、あまり馬鹿にするな、洒落るにも程があるぞ」

照彦「【ス】、【ス】ツカリ腰を抜かした駒山彦の宣傳使。そんな腰抜の分際で、どうして道が廣まるか。どうして大道が進めるか。【す】すめつばめおやかたばかり達者でも……」

駒山彦こまやまひこ「ス、スリヤ何を言ふのだ。貴様きさまも何時いつまでも、そんな悪い悪戯いたづらをせず
に、俺おれに鎮魂ちんこんをして、脚あしを起たしてくれたら如何どうだ」

「【ス】、【ス】ワ一大事いちだいじと言いふやうにならねば、貴様きさまの腰こしは起たたぬ。酸すいも
甘あまいも皆知みなしりぬいた蚊々虎かがとらを、その方ほうは今いままで何なんと心得こころえて居ゐたか。稻いねを作つくつて、
米こめを搗ついて、飯めしを炊たいて、サアお食あがりといふ様やうに、据すゑ膳ぜんを食くつた苦勞くらうの足たらぬ
宣傳使せんでんし。「【ス】ツカリ曲津まがつに欺だまされて、隙すきだらけの汝なんぢの身魂みたま、汝なんぢのやうな、馬鹿ばか
な身魂みたまは尠すくなからう。少彦名神すくなひこなのかみの在おはします常世とこよの國くにへ、直すくに行ゆかうとはチト慢心まんしんが
過すぎる。この細谷川ほそたにがはの山奥やまおくで難行苦行なんぎやうくぎやうの功こうを積つみ、神かみの助たすけを蒙かうむつて身魂みたまを洗あらひ
淨きよめ、少すしも疵きずのない、日月じつげつのやうな心こころに研みがき上げ、素盞鳴尊すさのみことの雄々ををしき生うまれ變かは
り、頭あたまの上うへから身體からだの裾すそまで、氣きをつけて、【ス】タ【ス】タと山路やまみちを進すすんで行ゆ
くのが汝なんぢの天職てんしよく。素直すなほな心こころを以もつて、末永すゑながく神かみに仕つかへよ。【ス】マから隅すままで、澄す
みきる今宵こよひの月つきの顔かほ、これこころを心こころの鏡かがみとし、皇大神すめおほかみに仕つかへ奉たてまつれ。誠まことの道みちを【ス】ラ
スラと脚あしも達者たつしやに起たち上あがれ」

「【セ】、【セ】ングリ【セ】ングリ、イヤモウ、おむつかしい御意見ごいけんを承うけたまは

つて、ウンザリした。世界は廣しと雖も、心は急き立てども、急けば急くほど足腰は起たず、世間の奴にこんな所を見られたら、愛想をつかさされ、捨てられて、宣傳使の面目玉は丸潰れだ」

「ソ」く、「さ」うだらうさうだらう、「ソ」ワ「ソ」ワしい「ソ」の態は何だ。「そ」こらに人はないと申すが、これだけ澤山の神々が眼につかぬか。「それほど外の聞えが氣にかかるなら、「そ」なたの心を取り直し、心の底から「その慢心を抜ひ出せ。空行く雲も自由自在に走るでないか。其方の脚は「そ」りや何の醜態、「そ」れでもまだ氣が付かぬか。もう「そ」ろ「そ」ろと我を折つたらどうだ」

「モウ、「ソ」口「ソ」口と脚を起たして呉れてもよかり「さ」うなものだな」
「タ」く、「タ」く、「タ」く、さぬ起たさぬ。他愛もないこと、大變に饒舌る宣傳使。

息も絶え絶えになるとこまで、イヤサ、この場で倒れるとこまで戒めて、高い鼻を叩き折つて、煮いて喰てやらうか。野山の猛き獸の餌食になるか、蛸のやうな骨も何にもない「たわけ」者、「たたき」にしようか、それが嫌なら直に改心す

るか。改心出来たら足は起つぞよ。腹を【た】てな、腹を立てると足は立つまいぞよ。譬へて言へば高峰の花、大空の月、神の誠の奥は、よほど改心を致さねば、掴むことは出来ぬぞよ。何ほど言うても、譯の解らぬ情ない、【な】まくら身魂の鉛のやうな兩刃の劍で何が出来るか。泣いて暮すも一生なら、笑つて暮すも一生だ。【な】い袖は振れぬ、【な】い智慧はしぼれまい。ホロが萎えたか、直靈の【みたま】に詔り直せ。中々難かしい神の道、氣樂に思つて居ると、泣き面かわくやうなことが度々あるぞよ。【罪もなく】、【穢もなく】、【心の玉に曇りなければ】、【どんな事でも爲し遂げらる】。誠の固まつたのは長う榮えるぞよ。名さへ目出度き高砂の、この神島に渡りながら、汝の【な】したる修業は蚊々虎の蚊の涙にも及ばぬ、何を致すも耐へ忍びが肝腎だ。鈍刀で悪魔は斬れぬぞ。心の波を靜かにをさめ、艱難辛苦を嘗め、奈落の底も恐れぬ魂にならねば、何事も成り遂げぬぞよ。ものの成るは、成るの日に成るにあらずして、成らぬ日に成るのである。早く神心に成れ成れ駒山彦。惟神の道に倣つて此世を渡れ。【チ】、知慧や學を頼りに致すな。近欲に迷ふな。直取をすな。【チ】グ【チ】グと考へ

て進め。道に違つた事は遣り直せ。【小さい心で知識を鼻にかけ】、【天狗面して笑はれな】。【チ】ツトは物事を考へて地に落ちた人間を助け、千早振る神の教を世にかがやかせ。凡ての事に心を散らさず、心の塵を吹き拂ひ、誠の知慧を働かせ。【ツ】、月は山の端に隠れむとしてゐる。ヤア、照彦の奴さまも此場を去らねばなるまい。駒山彦ツ、これからトツクリと御修業なさるがよからう。左様なら」

と言ひつつ照彦はツと起ち上り、悠々としてこの場を去らむとする。

駒山彦「【マ】、待つて下さい。折角月が出たと思へばこの細い谷間、【ま】た月が隠れて眞闇がりになつてしまふ。こんな所に一人放置かれては耐つたものではない。ヤア照彦、お前の神懸も、どうやら鎮まつたと見える。俺を伴れて歸つてくれないか」

照彦「神の言葉に二言はない。左様なら」

と、またもや宣傳歌を歌ひ、闇にまぎれて何處ともなく立去りにける。

駒山彦「ア、【つ】まらぬ目に遇はしよつた。まるで狐に抓まれたやうな目に

遇はしよつて、二人の奴、俺を置去りにして行くとは、ア、人間も當にならぬも
のだ。まさかの時に自分の杖となり力となり、何處までも隨いて来るものは自分
の影法師ばかりだ。その影法師さへも、闇の夜には隨いて来てくれぬ。斯うな
つて来ると人間も詰まらぬものだ。神の教の司と言ひながら、こんな拙ない、辛
い事が世にあらうか。頼みの綱も断れ果てて、終に會うた事もない、月さへ見え
ぬ谷底に突き落され、地の上に坐らされて、罪滅しか何か知らぬが、蛸を釣られ
て居る苦しさ。【ツ】ク【ヅ】ク思ひ廻らせば、日に夜に積んだ罪の酬いか。露
の命を存らへて、杖も、力も、傳手も、泣く泣く苦しみ悶える淺間しさ。信心は
常にせよと、毎日日、詰めかけるやうに教へられて、漸く宣傳使になるは成つ
たものの、實に【つ】れない浮世だナア。強いことを言つて居つても、斯う辛う
ては到底忍耐れたものぢやない。ア、行きつきばつたりに宣傳使になつたのが、
吾身の病み月で運の月かい。【つ】く【づ】く思案をして見れば、月に村雲花に
風、盡きぬ思ひの此谷底で、虎狼の餌食になるのであらうか、アアア
と獨言を言つて【ほざ】いてゐる。

この時間中よりまたもや大聲が何處ともなく響き來る。

駒山彦は、この谷間に百日百夜、跪坐らされ、斷食の行を積み、日夜神の教訓を受け、いよいよ立派な宣傳使となつて、名を羽山津見神と改め、黄泉比良坂の神業に参加したり。而して彼照彦は、或る尊き神の分靈にして、後には戸山津見神となりたり。

(大正一一・二・一四 舊一・一八 河津雄録)

第十七章 甦生〔四一〇〕

駒山彦は唯一人、闇の谷間に残されて稍決心の臍も固まり初めたり。暗中に何神の聲とも知らず、五十音歌聞え來る。

【あ】たまの上から足の裏

【い】つも心を配りつつ

【う】かうか暮すな世の人よ
 【え】い耀榮華の夢醒まし
 【お】のおの業を勵めよや
 【か】みの恵みは天地に
 【き】らめき渡り澄み渡り
 【く】まなく光り照すなり
 【け】しき賤しき曲道に
 【こ】ころの玉を穢すなよ
 【さ】ん五の月の大神が
 【し】きます島の八十島は
 【す】みずみ迄も照り渡る
 【せ】界一度に開くなる
 【そ】のの白梅薰るなり
 【た】か天原に現はれて
 【ち】機百機織りなせる
 【つ】きの御神や棚機の
 【て】る衣、和衣、荒衣の
 【と】ばりを上げて天津神
 【な】落の底まで救ふなり
 【に】しや東や北南
 【ぬ】ば玉の夜は暗くとも
 【ね】底の國は暗くとも
 【の】ぞみは深き神の道
 【は】な咲く春の彌生空
 【ひ】かり輝く皇神の
 【ふ】みてし道を漸々と
 【へ】に來し神の分靈
 【ほ】ろびの道を踏み變へて

【ま】 ことの道に進み行く
 【む】 かしも今も變りなき
 【も】 もの罪咎消えて行く
 【い】 や榮え行く桃の花
 【え】 だ葉も茂り蔓りて
 【わ】 が高砂の神島は
 【う】 べなひまして麗しき
 【ゑ】 だ葉も茂る老松の
 この神國に渡りきて 心卑しき宣傳使
 三五教を開くとは 愚なりける次第ぞや
 愚なりける次第ぞや

【み】 ちは二條善と惡
 【め】 出度き神の太祝詞に
 【や】 まと島根に何時までも
 【ゆ】 津玉椿の色紅く
 【よ】 を永久に守るなり
 【い】 づの靈や瑞靈
 神の依さしの寶島
 【を】 さまる御代ぞ目出度けれ

體も健に、聲も涼しく宣傳歌を歌ひつつ、カルのをさして嶮しき山を越え谷を
 駒山彦はこの谷間に百日の行をなし、心魂清まつて茲に羽山津見神となり、身

涉り、暑さと戦ひ、飢を凌ぎながら進み行く。

智利の御國の奥山の
深き谷間につれ行かれ

百千萬の苦しみを
嘗めさせられて様々の

神の戒め言靈の
教を聞きて身は光る

心も光る智利の國
身靈にかかる村雲も

吹き拂はれて夏の夜の
洗ふが如き月影に

照らされ進む嬉しさよ
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも
智利の深山の山奥の

深き谷間に洗ひたる
吾靈魂は永久に

千代も八千代も曇らまじ
黒雲四方に塞がりて

世は常暗となるとても
駒山彦の眞心に

常久に澄みぬる月影は
光り眩ゆく惟神

道は三千三百里
三五の月に照されて

心は光る眞寸鏡 攝取不捨の眞心の
 劍を右手に執り持ちて 左手に神の太祝詞
 宣るも尊き神の道 横さの道を歩むなる
 體主靈從の身魂を言向けて 常世の闇を照らしつつ
 心も足もカルの國 靈魂の光る目の國や
 ロツキー山を踏み越えて 醜女探女の猛ぶなる
 黄泉の島に打ち渡り 神伊邪那岐の大神の
 尊き御業に仕ふべし 奇しき御業に仕ふべし
 この世を造りし神直日 心も廣き大直日
 直日の神の御恵に 身魂も清く照り渡る
 神の經綸ぞ尊けれ 神の御稜威ぞ尊けれ

と晝夜の區別なく、數多の國人に神の教を傳へつつカルの國を指して進み行く。

(大正一一・二・一四 舊一・一八 北村隆光録)

第四篇 千山萬水

第一八章 初陣〔四一〕

珍山彦は松、竹、梅の三人と共に、草の衾に石枕、敷を重ねて漸々に智利の國の南方ハラの港に着きぬ。夜船は今に出帆せむとする間際なり。十三夜の月は、満天黒雲に包まれて光を隠し、一點の星影もなき眞の闇なり。この船の名はアタル丸といひ、アタルの港より、ハラの港に數多の果物を積み、人を乗せ來り、今や國に歸らむとする時なりき。船頭は黒暗の中より、
「いま船が出ます、乗る人は早く乗りなさい」
と、聲を限りに呶鳴り立て、竹筒を口に當てなどして、ブーブーと吹き知らして居る。折からの南風に、船の帆は風を充分に孕んで、船脚早く進行し始めたり。
珍山彦一行は船の一隅に乗つて居た。この時船中は誰彼の顔さへ碌に見えない

程ほどの暗くらさなり。船頭せんとうは燈臺とうだいを目標めあてに、

「智利てりの御國みくにを船出ふなでして 夜よるなき祕露ひるへ歸りかへゆく
覆かへるためしも浪なみの上うへ 風かぜも「あたる」の港みなとまで」

と節流暢ふしなだらかに歌うたつてゐる。船中せんちゆうには、あちらこちらと雑談ざつたん始まる。

熊公くまこう「オイ、虎公とらこう、貴様きさまは何時いつやら筑紫つくしの國くにから歸かへつて來る時ときに、三笠丸みかさまるの船客せんきやくから、ドツサリと酒代さかてをボツタクツタでないか。貴様きさまも悪い事ことにかけたら拔目ぬけめの

ない奴やつだなア」

虎公とらこう「ここは人中ひとなかだ、人中ひとなかで恥はぢを振撒ふりまきよるのか。コラ熊公くまこう、俺おれを何なんだと心得こころえて居をる、俺おれはこの高砂島たかさじまに、誰たれ知らぬ者ものもない鬼おにの虎とらさまだぞ」

「人中ひとなかでも船中せんちゆうでも、夜よの中なかでも腹はらの中なかでも構かまふものか。貴様きさまは却々なかなかの惡黨あくたうだが、しかし其處そこまで惡黨あくたうも徹底てつていすれば、却かへつて偉えらいワ」

「決きまつた事ことだ。辨天べんてんさまとも、龍宮りゆうぐうの乙姫おとひめさまとも、例たとへ方がたない立派りつぱな美人びじんが、

しかも三人。そこに美しい強さうな家來が一人隨いて居つた。そこで龜公の野郎、業腹を煮やし自暴自棄になり、酒をチビチビ飲み出して種々な話の末、珍の國の桃上彦命さまが、巴留の國で殺された話をやりよつた。さうすると、その家來が一寸お尋ね申しますとお出でたのだ。そこでこの方が龜公の話を横奪りして「へイ、何でございます」とやつた處が、その男は何でも桃上彦命さまの家來の端くれと見えて、私は一寸仔細があつて、面會に參る者と言ふのだ。サア占めた、お出でたなア、と手ぐすね引いて待つて居ると、鰯網に鯨がかかつたやうに、虎さまの舌の先に乗つて、見たこともないやうな立派な金をガチャガチャゾロリと出しをつた。それで此奴却々持つて居るワイ、一遍に言つて了つたら物に成らぬ、またお代りをと云ふ調子で、いい加減に言つて居ると、お前の言ふ事は判りにくい、もちと確かりハツキリと言つて呉れと言ふのだ。そこでこの虎さまは、地獄の沙汰も金次第だとかましたところ、何にも知らぬ都人の青首が「うん、さうか、酒代が欲しいのか、うるさい奴だなア」と莞爾と笑つて、またドスンと重たい程呉れよつたのだ。あんなぼろい事は滅多にありやせぬ。誰か、またあんな話をや

つて呉れないかなア」

「オイ、虎公、柳の下に何遍も鱧は居らぬよ。お前のやうな、欲の熊鷹には同情は出来ない」

松、竹、梅の三人の娘は側にあつて、熊と虎との對話に耳を傾け聽いてゐる。

珍山彦は小聲で、

「松代姫様、妙な話をやつてますなア。蛙は口からとやら、現在あなた方の乗つて居らつしやるのも知らずに、自分の悪事を手柄さうに囀つて居る妙な奴もあるものだ。一つあの男を歸順させたら何うでせうか。悪に強い奴は、また善にも強いものですよ」

「さうでせうかなア。あんな人でも改心するでせうか」

「あなたも宣傳使の初陣だ。あの男を改心さす事が出来ぬやうでは、到底宣傳使は勤まりませぬなア」

「ア、一つそれではやつて見ませう」

松代姫は立つて聲しとやかに宣傳歌を歌ひ始むる。

神かみの造つくりし神かみの國くに 神かみの御魂みたまに生あれませる

神かみにひとしき人ひとの身みは いかで心こころの曲まがるべき

いかで心こころの曇くもるべき 心こころの空そらに月つきは照てる

心こころの海うみに天津日あまつひの輝かがやき渡わたる人ひとの身みは

善よきも悪あしきも押おしなべて 神かみの恵めぐみをうくるなり

禍わざはひ多おほき世よの中なかに 父ちちには離はなれ垂乳根たらちねの

母ははにはこの世よを先立さきだたれ 憂うれひに惱なやむ雛鳥ひなどりの

心こころ悲かなしき波なみの上うへ 恵めぐみも高たかき高砂たかさごの

珍うづの御國みくにに現あれませる 戀こひしき父ちちに會あはむとて

心こころも清きよき照彦てるひこの 従僕しもべの司つかさともるともに

花咲はなき匂におふ【はる】の空そら 戀こひしき都みやこを後あとにして

歩あゆみも馴なれぬ山坂やまさかを 草くさの衾しとねや石枕いはまくら

恵めぐみみの露つゆに潤うるほひつ 心こころ【つくし】の國くにを經へて

神かみの力ちからに【よる】の市まち 【よる】の港みなとを船出ふなでして

戀しき父を【みかさ】丸

波風荒き海原を

渡るも淋しき手弱女の

心の中にたつ雲の

黑白も判かぬ眞の闇

闇より出でて闇に入る

日數重ねてやうやうに

月日も【てる】の港まで

來たる折しも何人か

戀ひしき父の物語

桃上彦の垂乳根は

遠き御國へ出でますと

聞きたる時の吾胸の

悲しさ辛さ如何ばかり

量り知られぬ瀧津瀬の

涙に咽ぶ折からに

この世に鬼はなきものか

木の花姫の【みかへる】の

神と現れます大蛇彦

その温かき言の葉に

憂ひの雲も晴れ渡り

波を押し分け昇る日の

光る心の嬉しさよ

神が表に現はれて

善と悪とを立別る

この世を造りし神直日

心も廣き大直日

ただ何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ
身の過ちは宣り直せ

吾身の仇は赦せかし
人を恕すは烏羽玉の

闇に彷徨ふ身の罪を
被ひ清むるものぞかしと

教へ導く神の道
神と君とに「あななひ」の

道を教ふる麻柱教
教の船に乗せられて

暗き闇世も「てる」の國
光り輝く「ひる」の國

朝日「あたる」の港まで
進み行くこそ樂しけれ

あゝ虎公よ虎公よ
われは御教の宣傳使

奪られた金は惜しくない
ただ惜しむべきものがある

神に貰うた虎公の
清き身魂を枉津見の

神に心を曇らされ
吾身を守る魂を

奪られ給ひし事ぞかし
奪られた魂は是非なしと

思ふことなく今よりは
靈の眞柱立て直し

下津磐根に千木高く
言靈柱建てかけて

天津御神の賜ひてし

心の玉をとり返せ

心の玉をとり返せ

返す返すも悲しきは

魂を抜かれし虎公の

おん身の上ぞ行く末ぞ

あゝ虎公よ、とら公よ

一日も早く片時も

誠の道にのりなほせ

神の産みてし人の身は

神にひとしき者ぞかし

神にひとしき者ぞかし

神の身魂と現はれて

善しと悪しとを省みよ

ただ今までの曲業を

直日に見直せ宣り直せ

直日の神の分靈

わけて尊き神の子よ

譽めよ稱へよ神の恩

魂を洗へよ神の前

暗を馳せ行くこの船よ

神の身魂の照り渡る

【てる】の港を後にして

大御恵みも彌深き

青海原を渡りつつ

【よる】なき【ひる】の神の國

【あたる】の港に進むごと

いと速かに速かに

心の塵を拂ふべし

心の玉を洗ふべし

船中の人々は、この聲に耳を澄ませ、首を傾けて靜かに聞き入る。暗き船の中にはこの歌を聞いて、何れも感歎する聲頻りに起れり。虎公は以前の元氣にも似ず、大聲をあげて泣き叫び伏しぬ。アタル丸は燈臺を目標に、暗を破りて荒浪を切りながら、チヨクチヨクと進み行く。

(大正一一・二・一四 舊一・一八 東尾吉雄録)

第十九章 悔悟の涙(四一二)

今まで黒雲に包まれたる大空は、所々綻びを見せて天書(星)の光り瞬き始め、十三夜の月は漸く東天に姿を現はし給ひ、皎々たる光りに照されてアタル丸の船中は晝の如く、誰彼の顔も明瞭に見え來る。珍山彦は虎公の話相手なる熊公に向

つて靈をかけたれば、熊公は忽ち身體震動して、ここに神懸状態となり口を切つて、

「此方は大蛇彦命である。いま虎公に申渡すべき事あれば、耳を澄まして確と聽け」

と雷の如くに呶鳴りつける。船客一同は熊公に向つて視線を集注し、如何なり行くならむと片唾を呑んで凝視つてゐる。

「悪の企みの現はれ時、何時までも悪は續かぬぞよ。動きのとれぬ汝の自白、魔の調べは目のあたり、大蛇彦が今言ひ聞かす、神の教を「しつかり」聽け。木に餅のなる様な、うまい事ばかり考へて苦勞もせず、他人の苦勞の寶を奪ひ、誇り顔に述べ立てる怪しき卑しき汝が魂、心の鬼の囁きを吾と吾手に白状せしは天の許さぬ所、審神者の眼に睨まれて、その本人がこの船に居るともシ、知らず知らずに口擧げ致した。悪は永うは續きはせぬぞ。速かに前非を悔い、澄み渡る大空の月の如くに心を洗へ。世界廣しと雖も其方のやうな惡逆無道の癡漢は少ない。誰に依らぬ、皆心得たがよい。些の悪でも積み重ねれば根底の國に行か

ねばならぬ。強さうな事を言つても、人間の分際として木の葉一枚自由にならぬ、障子一枚先の見えぬ人間、天地の神を畏れよ。虎公ばかりでないぞ、長い間に重ねた罪はわが身を亡ぼす劍の山だ。憎まれ子世に覇張る、西も東も辨へずに、吾さへよけりやよいと申して、人の目を「ぬすみ」、寶を盗み取り、惡の身魂に狙はれて根底の國に連れ行かれ、喉から血を吐く憂き目に遇うて恥を曝し、果敢なき運命に陥るやうな僻事を改めよ。日に夜に行ひを改めて心の雲を科戸の風に吹き拂へ。惡は一旦榮えても永うは續かぬ、滅の種子だ。この世に惡を爲すほど下手な事はない。生きても死んでもこの世の中は神のまま、長い月日に短い生命、太う短う暮すが得だと日夜吐いた虎公のその吠え面は何の「ざま」、誠の道を踏み外し、身欲に迷うて無理難題を人に吹きかけ、誠の人を誑かし「むしり」取つたるその金子は、大蛇となつて火焰を吐き、冥途へ送る火の車だ。大勢の中で面目玉を潰されてもがき苦しむのも自業自得だ。八十の曲津よ、僻み根性の虎公よ。夢にも知らぬ三人の娘の前で、偉さうに吾身の惡を「べら」べらと、ようも喋り居つたな。羅刹のやうな心を以て利欲の山に驅け登り、人を惱ます惡魔の容器、

わが身の仇とは知らずして、欲に呆けて何の【ざま】。いよいよ改心いたせばよし、改心いたして生れ赤子の心になり、今までの【ゑぐ】たらしい心を立替へよ。鬼も大蛇も追ひ出せよ。虎公、今が改心のよい【しどき】だ。天國に救はれるか、地獄に墜ちて無限の苦しみを嘗めるか、神になるか、惡魔になるか、二つに一つの境の場所だ。ヤア船中の人々よ。必ず虎公のこととのみ思はれな。【めいめい】罪の大小輕重こそあれ、九分までは皆惡魔の容器だ、罪の塊だ。大蛇彦命が一同に氣をつけるぞよ。今は餘が懸つてゐる熊公とても同じことだ

と言葉終つて神懸りは元に復したり。

虎公は船底に畏縮して涙に暮れながら、この教訓を胸に鋌打たるが如く、呑劍斷腸の念に苦しみ、身の置き處もなく煩悶の結果、月照り渡る海原に向つてザンブとばかり身を投げたり。船客一同は、アレヨアレヨと總立ちになり、

誰か救けてやるものはないか

と口々に叫び合ふにぞ、熊公は堪り兼ね、忽ち眞裸體となり、又もや海中に飛沫を立ててザンブとばかり飛び込みぬ。船客は總立ちとなつて立上り、海面に目を

さらしてゐる。船は容赦もなく風を孕んで北へ北へと進み行く。

ア、この二人の運命は如何なりしぞ、心許なき次第なり。

(大正一一・二・一五 舊一・一九 外山豊二録)

第二〇章 心の鏡〔四一三〕

六月十三夜の皎々たる月光に照されて、三人の松、竹、梅の娘、顔の皮膚滑らかに潤ひのある皆、柳の眉、紅の頬、雪の肌、殊更目立ちて麗しく、三五の明月か、冬の夜の月を宿した積雪か、桃か櫻か白梅か、丹頂の鶴の掃溜に下りて遊ぶが如き、得も言はれぬ崇高な面容である。三柱の女神は舷頭に立ち、海面に向つて拍手しながら聲しとやかに歌ふ。

☐ 神が表に現はれて

善と悪とを立て別ける

この世を造りし神直日

ただ何事も人の世は

身の過ちは宣り直せ

嚴の御息に生れたる

鎮まりいます生宮ぞ

曇り穢れしものならず

御息を受けて神の子と

いとも廣げき御心に

助け給へや天津神

琴平別の大神よ

赦して神の船に乗せ

島根に救ひ給へかし

罪を悔いたる虎公の

光りも清き月照彦の

心も廣き大直日

直日に見直せ聞き直せ

この世を造りし皇神の

青人草は神々の

人の靈魂は初めより

清き尊き天地の

生れ出でにしものなれば

萬の罪を宣り直し

國津御神や百の神

海より深き罪咎を

花咲き匂ふ高砂の

心の浪も治まりて

心の空は眞寸鏡

神の心に見直して

身魂みたまを救すくへ照彦てるひこの 清きよき身魂みたまに立たて直なほし

海うみに落おちたる熊くま、虎とらの 二人ふたりの御子みこを救すくひませ

二人ふたりの御子みこを救すくひませ 三五あななひけう教けうは現世うつしよの

穢けがれを清きよめ人草ひとぐさの 悩なやみを救すくふ神かみの道みち

鳥獸とけだものはまだ愚おろか 蟲族むしけらまでも御惠みめぐみの

教をしへの露つゆに霑うるほひて 天地あめつち四方よもの海原うなばらも

清きよめて澄すます神心かみこころ 大御心おほみこころの幸さちはひに

助たすけ給たまはれ貴うづの御子みこ 憂うれ瀬せに沈しづむ人々ひとびとの

身からだ體たいの穢けがれと村肝むらきもの 心こころの塵ちりを吹ふき拂はらひ

朝日あさひも清きよくテルの國くに 夜よるなきヒルの國原くにはらに

月日つきひの光隅ひかりくまもなく アタルの港みなとへ救すくひませ

アタルの港みなとへ救すくひませ

と歌うたひ神言かみごとを奏上そうじやうし、再ふたびもとの座ざに歸かへりぬ。船中せんちゆうにはヒソビソと雑談ざつだんがまた始はじ

まる。

甲 今の神懸りや歌の心を何と思ふか。實に恐ろしいやうな、有難いやうな、結構なことだのう。俺はモウあの神懸りの言葉を聞いて、一つ一つ身にこたへて、自分が叱られた様な気がしたよ。

乙 さうだな、俺らも同じ事だ。虎公とか言ふ悪人ばかりぢやない。胸に手を置いて考へて見ると、吾々の腹の中にも悪い奴が居つて、暗々裡に罪の方へ罪の方へと引張つて行かる様な気がしてならぬワ。

丙 ヤ、誰しも蓋をあけたら「チヨボ」チヨボだよ。虎公のやうに露骨に悪をやるか、やらぬかだけのものだ。善人らしい蚤一つ殺さぬやうな優しい顔した奴の中に却て悪い奴があるものだ。人間から悪人ぢや悪人ぢやと嫌はれる者に却て善人があつたり、聖人君子を氣取つて、世の中の人に賢人ぢや、善人ぢやと持て囃される人間の中に却て悪人があるものだ。悪魔と言ふものは善人の身體を容器にして化けて悪い事をやるものだよ。之だけ悪の九分九厘まで榮えた世の中の人間に褒めらるる者はきつと悪人だ。彼奴は悪い奴だと世の中から攻撃される人間に

眞實の善人があるものだ。あの虎公と言ふ奴は随分名高い悪人だが、眞實の彼奴の性來は善人だと見えて、悔悟の念に堪へ兼ね、大切の生命を捨てたぢやないか。人間は矢張り神の子だ、「鳥の將に死なむとするやその聲悲し。人の將に死なむとするやその言良し」と言ふ。吾々も一時も早く心の雲を取り拂つて、今夜の月の様な美しい心になつて世の中を渡りたいものだなア」

丁「然し、この頃は妙な事があるぢやないか、アリナの瀧の水上に大きな巖窟があつて、そこには鏡の池とやら言ふ不思議な池が出来たと言ふ事だ。其處へ三五教の宣傳使狹依彦とか言ふ妙な面した男がやつて来て、數多の人間に洗禮を施してゐるさうなが、そこで洗禮を受けた者は、みな立派な人間になつて悪い事もせず、喧嘩もなし、盗人も這入らず、戸締りもせずとも夜は安樂に眠れるやうになつたと言ふ事だよ。吾々も一度洗禮を受けたいと思つて居るのだ。さうした處が今度、またヒルの國の玉川の瀧に偉い宣傳使が現はれたと言ふ事だよ。その瀧にも瀧の傍に妙な洞穴があつて、神様が「もの」を言つて何かの事を聞かして下さるさうだ。俺はそこへ一遍参らうと思つて來たのだが、お前らも何なら一緒に

かうではないか」

甲「さうか、そんな事があるのか。實は吾々は、その狹依彦と言ふ宣傳使に洗禮を受けたのだ。今までは随分大酒も飲み喧嘩もし、人を泣かした事も澤山あつたが、あの鏡の池の中から妙な神さまの聲が聞えて、吾々の今までやつて来た事を素破抜かれた時の恐ろしさと言つたら、思ひ出しても身の毛がよだつやうだ。それから宣傳使の洗禮を受けて家内中睦じう暮し、村の人からも今は重寶がられる様になつたのも、全く神様の御蔭だよ」

乙「それは結構だが、あの虎公は如何なつたであらうか。今三人の綺麗な宣傳使がお祈りになつたから、神様は至仁至愛だから助けて下さるではあらうが、眞實に可哀さうだなア」

丁「それは心配するには及ばぬよ、改心した者はきつと神様が助けて下さる。まあアタルの港へこの船が着く時分には、【チヤン】と龍神さまに助けられて波止場に「皆さま、お先に失禮しました」と言ふ様な調子で待つてゐるだらう」

丙「そんなうまい事があらうかなア。若しも二人が助かつて居る様な事だつたら、

吾々は村中あの宣傳使の教に従つて仕舞はう』

甲乙丙丁はヒソビソと、神徳の話を語つてゐる。珍山彦は無言のまま、四人の

話をニコニコとして聞いて居た。

アタル丸は漸うにして、翌日の五つ時にアタルの港へ安着した。波止場には虎公、熊公が立つてこの船を待ち迎へて居る。

(大正一一・二・一五 舊一・一九 北村隆光録)

第二章 志藝山祇(四一四)

七日夜の月日を浴びて、折からの南風は眞帆にアタルの港に着き見れば、正に月照十三夜、海中に身を投げたる熊公、虎公の二人は埠頭に立ち、松代姫の一行を嬉しげに迎へて居る。船客は二人の顔を見て、
『ヤアヤア、ヨウヨウ』

と驚きの聲を放つにぞ、虎公は船客一同に向ひ、
「皆さま、私は罪の深い、この高砂島に鬼の虎公と綽名を取つた悪人でござい
ます。天網恢々疎にして漏らさず、三笠丸の船中において今此處にまします三人の
娘の下人を伴り澤山の金を騙り取つて逃げ去りました。この廣い高砂の島は人も
多く、再びこの方に會はうとは思ひませぬでしたのに、怖ろしや誑した人と同じ
アタル丸に乗り合せ、暗夜とて些しも心づかず、吾顔の見えぬを幸ひ、酒の微醉
機嫌で知らず知らずに毒を吐かされました。時しも、麗しき松代姫様の御聲とし
て誠めの宣傳歌を聞かされた時は、穴にでも這入りたいやうな心地が致しました。
十三夜のお月様は、雲間を分けて私の顔をお照し遊ばしたその時の怖ろしさ。忽
ちわが友の熊公に大蛇彦とやらが神懸りし給ひ、皆様の知らるる通り、私の舊惡
をすつかり摘發かれ、立つても居ても居られなくなつて、今まで犯せし罪の恐ろ
しさに、心密かに月の大神様に向つて懺悔を致し、堪り兼ねて千尋の海の藻屑と
なり、罪を贖はむと覺悟を決めて渦まく浪に飛び込みました。この時何處ともな
く巨大な龜が現はれて、罪重き私を救うて呉れました。又もや【ざんぶ】と身投

げの音、何人なるかと月の光にすかして見れば、豈圖らむや、親しき友の熊公で、
又もやこの龜に救はれたのです。さうして熊公は又もや神懸となり、龜の背にて
日に夜に尊き教訓を與えて呉れました。吾々のやうな利己主義の人間が、どうし
て神の御心に叶ひませう。却つてこの世の汚れとなるから、どうぞ死なして下さ
いと、又もや海中に身を躍らして飛び込まむとする時、熊公は神懸のままに、私
の首筋を掴んで龜の背中に捻伏せ、「こら虎公、汝はすでに救はれた、汝の刹那の
祈りは眞劍だつた。天地神明に感應した。今の汝は今までの惡逆無道の虎公でな
い、この世を清むる明礬の様なものだ。百石の濁り水も、一握りの明礬を投ずれ
ば清水となる。神の榮光に浴した汝は、これより惡魔の猛り狂ふ泥水の世を、鹽
となり明礬となつて清めよ、澄ませよ、すべての物の味を與へよ」と厳しく教訓
されました末、忝なくも「汝はこれより志藝山津見命と名を賜ふ。【カル】の國
に到つて宣傳使となれ」と、思ひがけなき有難きお言葉を頂き、夢かとはかり吾
心で吾身を疑はざるを得なかつたのです。さうして何時の間にか、龜の背中に救
はれた吾々二人は、アタル丸に先立つて、無事にこの港に到着して居ました。さ

れど身體は石の如く、首より下はこの通り強直して、身體の自由を失つて居ります。どうか三人の宣傳使様、照彦様、この私の深き罪を許して下さいませ。また船の諸人たちよ、私の改心を鑑として眞心に立ち歸り、心から神に祈りを捧げて下さい、幸ひ宣傳使がおいでなされば、神言を教はつて、朝な夕なに神を讚美し、誠の心に立ち歸つて祈願をなされませ」

と諄々として自分の來歴を述べ、かつ改心の尊き事を告げ終るや否や、虎公の身體は靈縛を解かれて再び自由の身となりぬ。數多の船客はこの話の終ると共に先を争うて上陸し、行くゆく神徳話に耽り居たり。

(大正一一・二・一五 舊一・一九 加藤明子録)

第二章 晩夏の風〔四一五〕

珍山彦や松代姫の一行は埠頭に立ち、群集に向つて宣傳歌を歌ふ。熊公、虎公

も後に整理して共に歌ふ。六人の歌ふ聲は、アタルの港を科戸の風の塵を拂ふ如き光景なりき。

天と地とを造らしし

尊き神の貴の子と

生れ出でたる民草は

百姓と讃へられ

天と地との神々の

この世を開く神業を

喜び仕へ奉るべき

主宰と生れ出づるなり

嗚呼諸人よ諸人よ

天と地とに漲れる

裏と表との息を吸ひ

生ける御神と現はれし

その尊さに顧みて

清く身魂を研き上げ

村雲四方に塞がれる

暗きこの世を照らし行く

光りとなれよ和田の原

潮の八百路のいと廣く

光りも清き潮となり

世人を清め朽ち果てし

身魂の腐りを締め固め

すべてのものの味はひと

なりて盡せよ神の子よ

神が表に現はれて

千尋の海を乗り越えて

潮照りわたる天津日の

光の如く世を照らせ

この世を造りし神直日

心も廣き大直日

神の御稜威に照らされて

身の罪科も消えて行く

人の命は朝露の

消ゆるが如く哀れなる

果敢なきものと言騒ぐ

ウラルの神の宣傳歌

飲めよ騒げよ明日の日は

雨か嵐か雷電か

一寸先は暗の夜と

醜の教に村肝の

心を曇らせ身を破り

根底の國へ落ちて行く

遁れぬ罪の種播くな

ただ何事も人の世は

直日に見直し聞直す

尊き神の御前に

祈れよ祈れただ禱れ

祈りの道は天津國

榮の門戸を開くなる

神の誠の鍵なるぞ

祈れよ祈れただ祈れ

五六七の神は御恵みの御手を伸ばして待ち給ふ

嚴の御魂の御力 瑞の御魂の御名により

この世を造りし國治立の神の命に眞心を

捧げて祈れ夜も晝も心一つに祈れよや

誠の神の御眼 隠れし處をみそなはず

花の祈りは効果なし 隠れて祈れ誠の身

神と人とは睦び合ひ 親しみ合ひていと清く

神を敬ひ敬はれ 天地の御子と生れたる

その本分をば盡すべし 盡せよ盡せ神の爲め

世人の爲めや身の爲めに 誠をこめて天地に

祈れや祈れよく祈れ 祈る心は神心

神に等しき心ぞや 神に通へる心ぞや

珍山彦の「く」の字に曲つた腰は、何時しか純直になつて、容貌、聲音共に若々

しく見ゆるぞ不思議なれ。珍山彦の二つの眼は何となく麗しく輝き始めたり。一行はアタルの港を後にして夏木の茂る市中を通り抜け、宣傳歌を歌ひながら、緑樹滴る美はしき玉山の麓に辿り着き、青芝の上に腰打ち掛けて息を休めて居る。虎公、熊公の二人は恐る恐るこの場に現はれ、大地に「ひれ」伏し以前の罪を泣き詫ぶるに、松代姫は氣も軽々しく、満面に溢るばかり笑を湛へて、

「ア、虎公様とやら、ようまあ改心して下さいました。今日は妾が宣傳使の初陣、

貴方の御改心が出来なかつたならば、妾は最早宣傳使にはなれなかつたのです。嗚呼有難や、野立彦命、野立姫命、木の花姫命、日の出神様」

と合掌し、且つ感謝の祝詞を奏上し嬉し泣きに泣く。

珍山彦「オー感心々々、虎公さま、貴方は最早悪人ではありませぬ。悔い改めと祈りによつて、勝れた尊き神の御柱です。貴方も斯くして神の御恵みに救はれた以上は、御神徳の取り込みは許しませぬ。これから宣傳使となつてあらゆる艱難辛苦と戦ひ、世の人を三五教の教に救ひ、黄泉比良坂の御神業に奉仕して下さい」

虎公「私は改心致してから未だ時日が経ちませぬ、さうして三五教の教理の蘊奥

は存じて居りませぬ。宣傳使となれとお言葉は、吾々の如きものに取つては實に無上の光榮ですが、かやうな事で何うして尊き三五教の宣傳が出来ませうか。せめて二月三月あなた方のお供を許して頂き、色々の教理を體得したその上にて、宣傳使にお使ひ下さいませうやうお願いいたします」

「イヤ神の道は入り易く、歩み易く、平地を歩く様なものだ。ただ心から誠を祈り悔い改めるのみだ。今までの罪惡、日々の行爲を人の前に悔い改めて、神の救ひを蒙つたその來歴を教ゆれば、どんな身魂の曇つた人間でも、忽ち神の尊き事を覺つて神の道に従ひ、それに引換へ自分の事を棚に上げ、自慢話を列べ立てたりして、人の罪を審いたり罵つたりしてはなりません。神に仕へる身は羊の如くおとなしく柔かく、湯の如き温情を以て總ての人に臨むのが、即ち宣傳使の第一の任務である。腹を立てな、偽るな、飾るな、誠の心を以て日々の己が身魂を顧み、恥づる、悔ゆる、畏る、覺るの御規則を忘れぬやうにすれば、それが立派な神の道の宣傳使である。六ヶ敷い小理屈は言ふに及ばぬ、ただ祈ればよいのである。貴方は是より吾らと袂を別ち、「カル」と「ヒル」との國境に聳え立つ高照

山の谷間に到つて楔をなし、その上「カル」の國を宣傳なされ、吾らは是にて御別れ申す」

と珍山彦は三人の娘と共に宣傳歌を歌ひながら北へ北へと進み行く。虎公、熊公二人はその影の隠るるまで両手を合はせて伏し拜み、神恩の厚きに感じてや、わつとばかりにその場に泣き伏しにけり。

青葉を渡る晩夏の風は、口笛を吹きながら二人の頭上を撫でつつ通ふ。

(大正一一・二・一五 舊一・一九 大賀龜太郎録)

第二三章 高照山(四一六)

ヒルとカルとの國境、高照山の山口の、芝生に残されし熊公、虎公の二人は、松代姫一行の姿を影の隠るるまで見送りながら虎公は、

「あゝ三五教の宣傳使一行は、吾々にお供を許されず、温かい言葉を残して、こ

の場をいそいそと立つて行かれた。何うで、吾々のやうな罪の重い人間だから、お供は叶はぬのだらうが、あゝ残念な事をした。せめて三年前に、今のやうな心になつて居れば、立派にお伴を許して下さつたであらうに、思へば思へば、この身の罪が恨めしい[□]と聲を放つて泣き入る。

「虎公よ。決して決してさうではないよ。俺たちをどうぞ立派な神の柱にしてやりたいと思つて、わざと捨ててお出で遊ばしたのだ。あの獅子といふ奴は、子を生んでから三日目に、谷底へ蹴り落して、上つて来る奴をまた蹴り落し蹴り落し、三遍以上あがつて来たものでないと、自分の子にせぬと云ふ事だよ。谷へ落されて「くたばる」やうな弱い事では、到底悪魔の世の中に生存する事は出来ない。まして悪魔の様な人間を教へ導く宣傳使だもの、お師匠さまを杖に突いたり頼りにするやうな事では、完全な御用は出来ないから、外へ出る涙を内へ流して、大慈大悲の神心から、吾々を置き去りにして往かれたのだ。人間は到底深い深い神様の御心は判るものでない。それだから三五教の宣傳歌にも、

「この世を造りし神直日　心も廣き大直日
只何事も人の世は　直日に見直せ聞き直せ」

とあるのだ。見直しが肝腎だ。纖弱い吾々のやうな智慧の暗い人間は、無限絶對、無始無終の誠の神様に従つて、眞心籠めて祈るより外はない。祈ればきつと神様の榮光が吾々の頭上に輝くであらう」

と涙まじりに語る折しも、弓矢を持った四五人の荒くれ男、犬を引き連れながら坂路を下り来る。一人の男は、熊公、虎公の顔を見て、

「オー、貴様はこの高砂島でも音に名高い熊公、虎公ぢやないか。貴様の名を聞くと泣く子も泣き止むと云ふ野郎だのに、今日はマアどうしたとか。貴様なんだい、ベソベソと吠面かわいて……」

虎公「ヨーこれは鹿公か。俺はな、すっかり改心したのだ。今まで悪人だと世間の者に言はれて來たが、これからは「すっかり」と善心に立返つて、自分の罪の懺悔をし、今までの罪亡ぼしに、神様の宣傳歌を歌つて、教へを説き廻り人を助

けるのだ。あまり有難うて、今嬉し泣きに泣いて居たところだよ。お前も好い加減に殺生は止めて、三五教の教を聞いて、善人になつて呉れ。虎公が改心の門口、宣傳の初陣だ。貴様が改心して呉れたならば、この高砂島の間人は皆改心するのだ。

「フフン、何吐かしよるのだ。鬼の念佛見たよな事吐きよつて、何處を押へたらそんな音が出るのだ。この頃の暑さに、一寸心が變になりよつたな。ヘン、へとろくさい、世の中は凡て優勝劣敗だ。大魚は小魚を呑み、小魚は蟲を食つて互に生活する世の中だ。犬が猫を捕る、猫が鼠をとる、鼠が隠居の茶の子をとる、茶の子が隠居の機嫌とる、隠居が禰祥の蝨とる、蝨が頭のフケをとる、といつて世の中は廻りものだ。海獵師が魚を捕るのも山獵師が猪を獲るのも、皆社會の爲だ。獵師がなければ皮を使ふ事も出來ず、魚を食ふ事も出來やしな。世の中は優勝劣敗、弱肉強食が自然の法則だよ。貴様もそんな女々しい事を言はずに、元の通り鬼虎となつて、賣出したらどうだい。ここまで賣り出した名を零にするのも惜しいぢやないか。」

熊公くまこう「あゝ、善ぜんと悪あくとは違ちがつたものだナア。善ぜんほど辛つらいものはない、否いな結構けつこうなものはない。貴様きさまもそんなことを言いはずに、虎公とらこうのやうに改心かいしんして、神様かみさまを祈いのる氣きにならぬか」

「イヤ、俺おれは神様かみさまを祈いのつてるよ。俺おれの祈いのつてる神様かみさまはな、そんな腰こしの弱よわい、へなへなした水みづの中なかで屁へを放こいた様なやう、頼たよりない教をしへをする神かみさまとは譯わけが違ちがふのだ。

いま俺おれはその神様かみさまに詣まゐつて來きたのだ」

虎公とらこう「お前まへが詣まゐつて來きた神様かみさまといふのは、そら何どういふ神様かみさまだい」

「貴様きさま、あれ程ほど名な高たかいのに未まだ聞きかぬのか。随分ずぶん遅おそ耳みみだのう。ここをズツと三里さんり

ばかり奥おくへ這はい入いると、そこに高照山たかてるやまの深ふかい谷たにがある。そこには長ながい瀧たきが落おちて居を

つて、瀧壺たきつぼの右みぎと左ひだりに大おほきな岩いはの洞穴ほらあながあるのだ。さうして東ひがしの方ほうの穴あなからは妙めう

な聲こゑがするのだ。その岩いはに向むかつて、何事なにごとでも教をしへて貰もらひに行くゆのだ。一いつぺん貴様きさま

も行いつて見みよ、澤山たくさんの人ひとが詣まゐつて居あるよ。一寸ちよつと取り違ちがひ野郎やらうが行ゆくと、その岩いはの

穴あなから大おほきな火焰くわえんの舌したを出だして、身からだ體たをチヤリチヤリと焼やかれるのだ。貴様きさまのや

うな馬鹿ばかな事こと云いつて居ある奴やつが行いつたら、きつと岩いはの穴あなから出でて來くる火ひの舌したに舐なめ

られて、黒焦くろこげになつて了しまふだらうよ」

熊公くまこう「それは一體いつたい、何なんと云いふ神かみだい」

「何なんといふ神かみだか、エー、忘わすれたが、なんでも八岐やまたの大蛇をろちとか聞きいたよ」

熊公くまこう「一體いつたい、何なんんな事ことを云いふのだい」

「委くはしい事ことは忘わすれて了しまつたが、とも角かく時代じだい向むきのする事ことを言いひ居をる神かみさまだ。マ

アかい摘つまんで言いへば、人間にんげんは一日いちにちでも立り派っぱに暮くらして、天てんから與あたへられた甘うまい物ものを

喰くつて、美うつくしい着き物ものを着きて、酒さけでも飲のんで元げん氣きをつけと云いふのだ。智て利るの國くにの鏡かがみ

の池いけのやうな、水みづの中なかから屁へをこいた様やうな、けち臭くさい御ご託たく宣せんとはわけが違ちがふのだ。

まあ貴き様さまら、メソメソ泣ないて居をらずに一いっ遍ぺん行いつて來こい。目めが醒さめてよからうぞ」

虎公とらこう「鹿公しかこう、お前まへはその教をしへを信しんじて居あるのか」

「信しんずるも信しんじないもあつたものか。あんな結けつ構こうな教をしへが何ど處こにあらうかい。さや

うなら」

と五人ごにんの獵れ師ふしは步あしを速はやめて坂さかを下くだり行ゆく。虎とら、熊くまの二人ふたりは足あしを速はやめてドンドンと

谷道たにみちを傳つたひ、玉川たまがはの瀑布ばくふに黄たそ昏がれ時どきに漸やうく辿たどり着つき見みれば、琴ことを立てたやうな大だい瀑ばく

布ふが、高たかく幾いく百ひゃく丈ぢやうともなく懸かつて微妙びめうの音おん樂がくを奏かなでてゐる。東側ひがしがはの大だい巖窟がんくつの前まへには、澤山たくさんの參詣人さんけいにんが合掌がつしやうして何事なにごとか口々くちぐちに祈願きぐわんしてゐる。二人ふたりは素知そしらぬ顔かほにて諸人もろびとと共に、巖窟がんくつの前まへに端坐たんざし合掌がつしやうするや、巖窟がんくつは俄にはかに大音響だいおんきやうを立てて唸うなり始めたり。一同いちどうは大だい地ちに頭あたまをピタリとつけ、畏かしこまつてその音響おんきやうを聴きいてゐる。唸うなりは漸やうぢやくにして止やみ、巖窟がんくつの薄暗うすくらき奥おくの方ほうより、

「アハ、ハ、ハ、」

といやらしい笑わらひ聲こゑが聞きこえ來くる。

虎とら、熊くまの二人ふたりは、顔見合かほみあして呆あきれゐる。巖窟がんくつの中なかより、

「悪あくの榮さかえる世よの中なかに、善ぜんぢや悪あくぢやと爭あひ奴輩やつばら。【あ】くまで阿呆あほうの恥曝はぢさらし、

悪あくをなさねば安樂あんらくに世よは渡わたれぬぞ。飽あくまで食くらへ、飽あくまで飲のめ、飽あくまで力ちからを

現あらはして、惡魔あくまと言いはれようが、力ちから一杯いっぱいわが身みの爲ために飽あくまで盡つくせ。【イ】ハ、ハ、ハ、

生命いのちあつての物種ものだねだ。要いらざる教をしへに従したがうて、善ぜんの、惡あくの、末すゑが怖おそろしいのと萎縮へいぢ

け散ちらして【ゐ】るよりも、威勢ゐせいよく酒さけでも飲のんで、【い】つまでも生々いきいきとして

生命いのちを延のばせ。【ウ】ハ、ハ、ハ、後指うしろさしゆびを指さされようが後うしろを向むくな。見みぬ顔かほをいたして

【こま】もの 甘い物を 鱈腹食ひ、【こま】美しい酒は酒に浮くほど酔うて、【こま】甘い【こま】舌鼓、【ご】五月蠅い五月蠅いと肩の凝るやうな三五教の教を聴くな。この巖窟には穴がある。【ウ】、と唸る穴があるぞよ。あな面白き穴有り教ぢや。迂闊に聴くな。【エ】、遠慮會釋もなく吾身のためには人は構うてをれぬぞ。得になることならば何處までも何處までも行け。閻魔が怖いやうな事ではこの世に居れぬぞ。地獄の閻魔を味噌漬にして食ふやうな偉い心になれ、笑ぎて暮せ酒飲んで。【オ】、大蛇の心になつてこの世に居らねば、この世は優勝劣敗、弱肉強食の世の中ぢや。【お】互ひに氣をつけて、吾身の得を圖れよ。怖れな、後れな、面白くこの世を渡れ、大蛇の神を朝夕祈れ。【オ】、面白い面白い』

虎公はこの聲を聞いて【むつく】と立ち上り、

三五教の宣傳使、志藝山津見とは吾事なるぞ。惡魔の張本、天足の身魂、八岐の大蛇の再來、善を退け惡を勧むる無道の汝、今に正體現はして呉れむ。【ア】ハ、ハ、【イ】ヒ、ハ、異端邪説を説き諭す、心の枉んだ大蛇の惡神、ま一度言ふなら言つて見よ、一寸刻みか五分試し、生命を取つて何時までも、禍の根を

斷つてくれむ。違背あらば返答【い】たせ。【ウ】フ、、、狼狽者の【うつけ】者、迂論な教を吐き立てて人心を動かす谷穴の土籠、浮世を亂す汝が悪計、志藝山津見の現はれし上からは容赦はならぬ。得體の知れぬ、奴拍手脱けした聲をしぼり、優勝劣敗、弱肉強食の、【エ】グイ心を嚇る奴。【オ】ホ、、、大蛇の悪魔、往生いたすまで應對いたすぞ。尾をまいて降参いたせばよし、【オ】メ【オ】メと言譯に及ばば、志藝山津見が兩刃の劍を以て征伐いたす。奥山の谷底に身をひそめ、この世を亂す八岐の大蛇、返答はどうだツ

巖窟の中より、

【カ】、、、構ふな構ふな、蛙の行列、闇に烏の向ふ見ず、喧しいワイ。

【キ】、、、斬るの斬らぬのと廣言吐くな。貴様のやうな腰抜けに、大蛇が斬れてたまらうか。氣の利かぬ奴だなア。【ク】、、、暗がり紛れに頭から食つてやらうか。【くさい】顔して苦しさに俄宣傳使とは片腹痛い、【ケ】、、、怪我のない間に早くこの場を去つたがよからう。見當の取れぬこの方の言葉、

【コ】、、、【こ】こな腰抜け共、殺されぬ間に【こ】の場を立去れ、【こ】は

い目に遇はぬ内に心を直して、【こ】の方の言ひ條につくか、執拗う聞かねば

【こ】の方も耐へ袋がきれるぞよ。米喰蟲の製糞器奴。ワハ、ハ、ハ、ハ、

熊公「【力】、神の使の宣傳使に向つて無禮千萬な、覺悟を致せ、體も骨も改

心致さねば、グダグダにして遣らうか。【キ】、氣を取り直し【キ】ツパリと

改心致せばよし、【き】かぬに於ては宣傳歌を歌はうか、【ク】、暗い穴にす

つ込んで、譯も判らぬ苦情を竝べ、苦し紛れの捨てぜりふ、その手は食はぬ、熊

公の身魂の光を知らざるか、【ケ】、怪しからぬ惡逆無道の大蛇の再來、

【コ】、【こ】こで會うたは優曇華の、花咲く春の熊公が手柄の現はれ口、最

早かなはぬ、降參するか、返答は、【コ】ラ、どうぞや」

巖窟の中より、

「【サ】、騒がしいワイ、囀るな、酒を飲め飲め、飲んだら酔へよ、酔うた

ら踊れ。逆とんぶりになつて踊つて狂へ、扱も扱も酒ほど甘いものはない、酒の

味を知らぬ猿智慧の熊公の世迷ごと、坂から車を下すやうに、この谷底へころげ

落してやらうか。【シ】、執拗い奴ぢや、【し】ぶとい奴ぢや、【しがんだ】

面して芝生の上に、ほつとけぼりを食はされて、吠面かわいた志藝山津見とは片腹痛い。【ス】、、速かに、この方の申す事を聞けばよし、【す】つた挨拶つた理屈をこねると、簀卷に致して谷底へ投げ込んでやらうか、【セ】、、雪隠蟲奴が。宣傳使なんぞと下らぬ屁理屈を言つて廻る馬鹿人足。【ソ】、、【そ】れでも貴様は神の使か、底抜けの馬鹿とは【そ】の方の事だ。【そ】の【しやつ】面でどうして宣傳使が勤まらうか、【そ】こ退け、【そ】こ退け、この方の邪魔になるワイ」

虎公「【サ】、、逆言ばかり囀る悪神、【さ】あもう容赦はならぬ。【シ】、、志藝山津見が言靈の威力によつて、汝が身魂を縛つて呉れむ。死ぬるか生きるか、二つに一つの大峠、【ス】、、速かに返答いたせ。【セ】、、背中腹は代へられよまい。宣傳使の吾々に兜を脱ぐか、降参するか、【ソ】、、【そ】れでもまだ往生いたさぬか、改心せぬか」

巖窟の中より、

「【タ】、、誑け者、叩き潰して食うて了はうか、鼻高神の宣傳使、【チ】、、

、【ち】つとばかり改心が出来たと申して、この方様に意見がましい知識の足らぬ大馬鹿者、一寸は胸に手をあてて見よ。【ツ】、、捕へ處のない事を吐いて歩く、罪の深い兩人共、掴み潰してやらうかい。強さうに言つても、貴様の胸はドキドキして居らうがな、【テ】、、天にも地にも俺一人が宣傳使だと言はぬばかりのその面つき、多勢の中で面を剥れて【テ】レクサイことはないか。【てる】の國から遙々出て来て、扱もさても馬鹿な奴だ。【ト】、、虎公の【ト】ポケ面、熊公の心の暗い俄改心、逆も逆も衆生濟度は六つかしからう。熊公。【ナ】、、何を吐きよるのだ。【タ】、、他愛もないこと、立板に水を流すやうに、よくも囀る狸の親玉、誰にそんな事教へて貰ひよつたのだ。誑け者。【チ】、、一寸は貴様も考へて見よ。【ツ】、、詰らぬ理窟を竝べよつて、【テ】、、手柄さうに【ト】ポケきつたことを吐しやがるな。巖窟の中より、「ウ、、ワーワー」と大音響ひびき来る。

(大正一一・二・一五 舊一・一九 東尾吉雄録)

第二四章 玉川の瀧（四一七）

巖窟の唸りは刻々と烈しくなり、數多の人々は又もやピッタリと大地に頭を着け畏縮して居る。二人は互に顔見合せ、腕を組んで思案顔。

虎公「オイ、熊公ツ、この巖窟の神は善とも悪とも解らぬぢやないか、此奴ア一寸審神がむつかしいぞ。體主靈從の教を勧めるかと思へば、吾々に意見をすやうな事を言ふなり、どうも合點がゆかぬぢやないか」

「そりやさうだよ。神様がお前に修業をさせなさるのだ。珍山彦の神さまが玉川の瀧の前で修業をして来いと仰有つただらう。餘程氣をつけぬと、悪魔だと思つてみると、どえらい目に遇ふかも知れぬぞ。さうだと云つて、悪魔でないと思つて油断する事も出来ぬ。ともかく腹帯を締める事だ」

「さうかなア、ひとつ、八岐大蛇の神とやらに一遍詳しう温和しう出て聞いて見ようか」

と志藝山津見は巖窟に向ひ、拍手再拜敬意を表し、

『モシモシ、巖窟の神様、どうぞ私に利益になる事を教へて下さいませぬか』
巖窟の中の音響はピタリ止んで、またもや聲が聞え出し、
『【ナ】、、、【な】る程と氣が付いたならば、何なりと教へて遣らう。【な】
か【な】かその方は改心したと申せども、まだまだ埃がとれては居らぬ。その様
な鈍くら刀で、世界の悪魔が言向けられやうか。生知者の生兵法は大怪我の基。
難儀苦勞が足らぬ故、その心で宣傳をいたしたら、泣き面【かわい】て、情ない
恥をさらさねば【な】らぬぞよ。まだ理屈を列べよつて、何にも知らぬ夏の蟲が、
冬の雪を嘲ふやうに神を舐めてかかるふとどき者。【二】、、、二進も三進もな
らぬ様にこの方につと締められて、遁げ腰になつたその醜態、苦い言葉が苦しい
か。偽宣傳使のその方の慢心、日夜に心を改めて、この方の申す通りに致して世
界を救ひ、烏羽玉の黒い心を月日の光に照し見て、吾身を省み、恥ぢ畏れ、悔い
改め、世界の人民を懇に取扱ひ、咽から血を吐くやうな修業を致して、腹の塵芥
を皆吐き出し、氣を張詰て油断をするな。高慢ぶらず、驕らず、身を低うして謙
讓れ。どんな辛いことがあつても、不服を云ふな、不足に思ふな、拙劣な長談義

をするな、【譽められたさに法螺を吹くな】。小賢しい理屈を列べな。誠一つの正道を踏み締めて身を慎み、猥りに騒がず焦らず、無理をせず、無闇に人を審かず、侮らず、目上目下の區別なく、諸々の人々に向つて能く交はれ、八岐大蛇とこの方の申したのは偽りだ。まことは木の花姫の御心を以て、汝を濟度せむために、この巖窟に待ち受けたる大蛇彦命ぢや。三笠丸の船中のことを覚えて居るか。イヤ何時までも不憫さうだから、これは、これ位にして止めて置かう。悠然とした心を以て數多の人に向へよ。依怙鼻肩を致すでないぞ。よく人の正邪賢愚を推知して、その人の身魂相應の教をいたせ。樂な道へ行かうとするな。理窟は一切言ふな、吾身の心に照らし見て、人の難儀を思ひ遣れよ。威張り散らして、鼻を高くして、谷底へ落されな。ウカウカ致すな。よい氣になるな。何事にも心を落付けて、神の神徳を現はせよ。我を去れよ、義理を知れよ、愚圖々々いたすな。元氣を出して、撓まず屈せず教の神徳を現はせ。まだまだ教へたき事あれど、今日はこれ位にして置かう。ウーオー」

と、またもや巖窟は虎狼の唸るが如く大音響を發して鎮まりかへり、志藝山津見

の神かみはこれよりますます心こころを改あらため、カルくの國いちゑん一圓せんを宣傳せんして、熊公くまこうと共に功こうを現あらはし、黄泉よもつ比良坂ひらさかの神軍しんぐんに參加さんかし勇名ゆうめいを轟とどろかしたり。

（大正一一・二・一五 舊一・一九 河津雄録）

第二十五章 窟いはやの宿替やどがへ（四一八）

神かみの御稜みいづ威たかも高照てるの 山やまより落おつる琴瀧ことだきの

響ひびきに飛とび散ちる玉川たまがはや 水音みなおと清きよき溪流けいりうの

右みぎと左ひだりに千引ちびき岩いは 堅磐かきはと常磐ときはの巖窟いはあなに

千代ちよの言靈ことたま宣のり傳つたふ 神かみの惠めぐみも大蛇彦をろちひこ

教をしへは深ふかき穴あなの奥おく 浅あさき賤いやしき人ひとの身みの

如何いかでか知しらむ志藝しぎや山祇まじの 神かみの命みことや肝向きもむかふ

心も迷ふ熊公が 問ひつ答へつ烏羽玉の
暗夜をここに明しける 暗夜をここに明しける

七十五聲の音調に天地神人を清むる言靈の瀧は、水晶の飛沫の玉を遺憾なく飛散し、水煙濛々と立ち昇つて深き谷間を包んでゐる。

志藝山津見、熊公の二人は、この巖窟の前に端坐し、言靈の問答に胸の帳は開かれて、天津日の影、空を茜に染めなしつ、豊榮昇りに輝き初めり。志藝山津見は何か口の中に巖窟の神に向ひ問答を始めてゐる。その聲極めて微にして、傍にある熊公の耳にさへも入らぬ程度である。

志藝山津見は「つと」巖窟の前に立つて、立ち昇る狭霧の中に姿をかくし、ひそかに谷川を渡りて西の巖窟の奥ふかく姿を隠し、瀧壺の傍にある鉢と竹筒を左右の手に提げ、水鉢に水を盛つて巖窟の奥深く身を潜めたるを見て、熊公は、
「オイ、志藝山津見、何處へ行くのだ。先づ待て、俺も一緒に行かう」

この時巖窟は又もや、

「ウー、オー」

と山も崩るるばかりの大音響を發したるが、暫時にしてその音響止まると共に巖窟の中より、

「熊公々々、その方は暫くこの場を動く事はならぬ。志藝山津見を杖につき力と頼むやうな事で、どうして宣傳が出來やうか。汝の身體には、志藝山津見に百千倍の神力を持った神が守護をいたして居るぞ」

「ソソそれは、誠に結構ですが、一體彼は何處へ參つたのでせうか」
巖窟の中より大蛇彦は、

「それを訊ねて何とする。汝が心の神に訊ねるがよい」

かかる所へ、昨日山口の芝生で會つた鹿公は、數多の村人と共にこの巖窟の前に現はれ來り、叩頭拍手し熊公の姿を見て、

「オヤ、お前は昨日會つた熊公ぢやないか、どうだつた。随分叱られただらう。さうして虎公はどうしたのだ」

「オー、鹿公か、虎の奴、友達甲斐もない、俺をこんなところへ置き去りにして何

處か勝手に行って仕舞つたのだ。俺も後を追って行かうかと思つたが、何だか知らぬが、俄に胸が据つて動けぬのだ」

「そりや貴様、腰を抜かしよつたのだらう、弱い奴だなア。モシモシ、巖窟の中なかの神様、今日は澤山の村人を連れて参りました。どうぞ村の者に結構な教を聞かしてやつて下さいませ」

大蛇彦「ヤア鹿公か、よくも出て来た。この巖窟は昨日虎公がやつて来て汚しよつたによつて、唯今より西の巖窟に宿替を致す。熊公は靈縛を許したれば、足腰は自由に立つであらう。サア熊公に随いて、鹿その他の者共はこの谷川を越えて、西の巖窟の前行け。誠の事を聞かしてやらう。ウー、オー」

と又もや大音響を發し、巖窟も破裂せむかと思ふばかりなり。

熊公を先頭に一同は瀧の下の谷川を飛び越えて、西の巖窟の前に辿り着き頭を下げて、

熊公「ヨー今日は大蛇彦様の新しき御殿、ではない暗い巖窟のお座敷に御轉宅遊ばされました、誠にお目出度う存じます。お取込の際とて、嘸お忙しい事でございます

いませう。私でお間に合ふ事ならば、どうぞ手傳はせて下さいませ」

巖窟の中より、

「ブー、ブー、ブル、ブル、ブル、ブル、ブル、ブル」

熊公「大蛇彦の神さまとやら、私がこれ程叮嚀に頭を下げ、御挨拶を申上げて居るのに、只一言のお答もなく、ブー、ブー、ブル、ブル、ブル、ブルとは、何程神様でも些と失敬ぢやありませんか。水桶に尻を捲つて、揚げたり浸けたりしながら、屁を放つてお尻で返事をなさるとは、それは本気でなさるのか、吾々を侮辱するの」

鹿公「オイオイ、熊公、本氣も何もあつたものかい、神様は平氣なものだよ。貴様のやうな奴はこれで結構だ。水の中で屁をこいたやうな三五教とやらに恍けて居るから、神様が阿呆らしいと云つて、屁を御かまし遊ばしたのだ」

この時巖窟の中より、竹筒を吹くやうな聲が聞え来る。

「ブー、ブー、ブル、ブル、ブル、ブル、ブル、ブル」

熊公「なんだ、阿呆くさい、また屁だ、屁の神様だ」

巖窟の中から、

「【ア】、、、悪に強い鹿公の奴、朝から晩まで、神の使はしめの當山の猪を狩立て、兔を獲り、威張り散らして、玉山の麓の玉芝の上で、虎、熊の二人に向つて【ぼざい】た事覚えて居るか。【イ】、、、否應なしに改心【い】たせばよし、違背に及べば、今この場において白羽の矢を持つて射殺して仕舞はうか」

鹿公「モ、、もし、神様、それは、【あ】まりぢや【あ】りませぬか。貴神様は、悪に強い者は善にも強い、悪をようせぬやうな者は、人間ぢやない、この神の氏子ぢやない、力一杯山河を驅けまはつて、【イ】、、生物の命を取つて、人の生血をしぼつて威勢よく暮せ、と仰有つたぢやないか。それに今日は全然掌をかへしたやうに妙な事を仰有います。大方貴神は悪魔でせう。東の穴の神さまとは違ふのだらう」

熊公「オイ鹿公、それでも貴様、これから西の巖窟へ宿替へすると仰有つたぢやないか」

「ウン、それも、さうぢやつたなあ」

「貴様は、今日は叱られる番だ、確と耳を掃除して聞くがよからう。神に叱られ気は紅葉、踏み迷ひ鳴く鹿の、聲聞く時は氣の毒なりける次第なりけりだ」

「馬鹿にするない」

巖窟の中から、

「【ウ】ー、【ウ】ー疑ふか、鹿の奴、疑へばその方の素性を大勢の前で素破抜かうか。朝から晩まで、猪や兔の尻を追ひまくるのはまだしも、東の後家や西の後家、五十の尻を作つて、若い娘の後を追ひ廻し、肘弓に弾かれて、腹立紛れに酒を喰ひ、家へ歸つて女房に面當、その態は何の事だ」

「【ア】、もしもし、岩の神様、それは【あ】まりです。どうぞ、そればかりは言はぬやうにして下さい。【あ】まり氣のよいものでは御座いませぬ」

巖窟の中より、

「【エ】へへ、【え】らう困つたさうなその顔は、人を酷い目に遇はした報いで、今日は【え】らい恥を曝されるのも身から出た錆、まだ、まだ、まだ、まだあるぞ」

熊公くまこう「【エ】、、好「え」い加減かげんに往生わうじやうせぬか、鹿しかの野郎やらう」

「何を貴様きさままで、【エ】、、なんて眞似まねをしよつて、何をなに【ほざき】よるのだ」
巖窟いはあなの中なかより、

「【オ】、、大蛇彦「を」ろちひこの眼まなこは、隅すみから隅すみまで透すき通とほる、鬼「お」にの眼めに見落みおとしはなし。大「お」盗賊ほろろぼうの張本人ちやうほんにん、大惡魔「お」ほあくまの容いれもの器の、大馬鹿者「お」ほばかものの鹿しかの奴やつ、この大穴「お」ほあなの前まへで、大恥「お」ほはじかいて大味噌「お」ほみそつけて、怖「お」ぢ怖「お」ぢと尾「を」を捲まく可笑「を」かしさ、アハ、、」

「ヤア此奴こいつ、些ちつと【をかしい】ぞ。東ひがしの巖窟いはあなの聲こゑとは餘程よほど變へんだ。竹筒たけづつを吹ふいて、物を言いふやうな事ことを言いひよる。大方「お」ほかた虎公とらこうの奴やつ、俺「お」れを一杯いっぱいかけやうと思「お」もつて、熊公くまこうと申合まをしあはせて芝居しばゐを仕組しぐみよつたのだらう。よし、よし、よし、これから、この鹿しか公こうが、虎穴こけつに入いらずむば虎兒こじを得えずだ。一ひとつ命いのちを的まとに穴あなの中なかに探險たんけんと出でかけやう
カイ」

と云いひながら、むつくと立ち上たり、鹿公しかこうが今いまや巖窟いはあなに立たち入いらむとする時とき、天地てんちも破やぶるるばかりの大音響だいおんきやう、

「ウー、オー」

鹿公は、

「イヨー此奴は矢張り本物だ。どうぞお赦し下さいませ」

と拍子抜けしたやうな聲で、
「又もや巖窟の前に平伏する。」

折から吹き来る烈風の梢を渡る音、
瀧の響きと相和して心碎け、
魂消ゆる如き

騒然たる光景を現出したり。

(大正一一・二・一六 舊一・二〇 加藤明子録)

第二十六章 巴の舞〔四一九〕

折から高照山より吹き下す嵐の音も、
岩戸の大音響も、
次第々に鎮まりて、
後には千丈の琴瀧の落つる音、
涼々と聞ゆるのみ。
巖窟の中より又もや竹筒を吹いた様な聲がして、

「鹿公よ、この大蛇彦の申す事を確り聴けよ。
俄の改心は間に合はぬ。
盗人捕へ

て繩を緋ふやうな事では【まさか】の時の間に合はぬぞ。この神の申すこと【とつくり】と腹に容れて、誠の人間に生れ變り、神の教をよく聽いて、世の中の爲に力をつくせ。惡の企みは仇花だ。何時までも色は保たぬ。花は榮えぬ、實は結ばぬぞ。【短い此世に生れ來て】、【永い靈魂の命を失ふな】。枝葉も茂る常磐木の、何時も青青松心、賢しき心を取直し、穩かな心になつて神に親しみ、人に交はれ。神の教に仇花はない。耳を傾けて心を落付け、聽けば聽くほど神徳がづく。世界の爲に誠の爲に、苦勞を致すは結構だ。決して決して今までのやうな體主靈従の心を出すな。心の底から掃除して、神直日、大直日の神の恵に助けられ、榮え久しき松の世の鑑となれよ。死んでも生きても神の懷に抱かれた人間の身、只神に任せよ。誠心を籠めて祈れよ。素直に改心いたして涼やかな行ひを致せ。世間の人に、鬼よ惡魔よといはれたるその惡名を雪げよ、被へよ。神の教の誠の風に、高照山の谷の底で、力一杯膏を抜かれ、腸を洗はれ、膽を練られて、始めてこの世の中の惡魔を滅ぼす強い人間となれ。天地の神の深き御心を悟り、遠き近きの隔てなく、暗き明きの分ちなく、世界一目に見渡す神の眼に止まる様の、

清き正しき行ひをして呉れ。何事によらず、神の心を心として、世界の爲に誠心をつくし、弱き者を助け、神の威勢を世に出して、この琴瀧のやうに清き名を四方に轟かせ」

鹿公「いやもう、何から何まで抜目のない、御念の入つた有難き仰せ、骨身にこたへました。果しなき欲心に迷ひ、日々心に心を曇らせ、不埒な不都合な事ばかり致して來ました。どうぞ神様の廣き厚き御心に宣り直し聞き直して、吾々の深い罪をお宥し下さいませ。ア、もう是でお暇を頂戴いたします」

巖窟の中より、

「マ」ダマダ、マダマダ、歸つてはならぬ」

熊公「オイ、鹿公、【もちつと】辛抱せ」

鹿公「マアマアマア、未だまだ、ア、未だまだと仰有るのだ。マアどうどうしたら可からう。イイ加減に幕を切り上げて下さつたら可かりさうなものだがなあ。神様の退引ならぬ言葉に、尾を巻き、舌を巻き、【へこ】を巻いた熊公のやうな男が居るものだから、この鹿公までが巻添にあはされたのだ。サアこれから捻鉢

巻まきでもして、世界せかいのために盡つくさねばならぬワイ〆

鹿しかの巻添「まきそへではなうて、鹿しかの扱鉢巻ねじはち「まきに巻舌「まきしたでは餘あまり尊たふとくもなからうかい〆
巖窟いはあなの中なかより、

【三】、身「みの程ほどを考かんがへて、身「み分相ぶんさう應おうの行おこなひを致いたし、人ひとに未熟「みじゆくといはれな。醜「み

悪「じつないことをして見下「みさげられな、蔑視「みくびられな。【ム】、六ヶ敷「むつかしい事ことをいふな。
今いままでの様やうに世間せけんの人ひとに無理難題「むりなんだいを吹ふきかけて、無闇「むやみに金かねを奪とるな。悪あくの報「むじくいは

恐おそろしいぞ。罪障めくりを積つむな。盲目滅法めくらめつぱふに、前後あとさき構かまはずに、無駄「むだの事ことをしてはならぬぞ。大和魂やまとたましひに立たち歸かへり何時いつも動うごかぬ松心まつこころで、雪ゆきより清きよく、花はなより麗うつくしく、世よの中なかの光ひかりとなれ、鹽しほとなれ。亂暴狼藉らんぼうろうぜき致いたらざるなき、今いままでの汝なんぢの所業しわざや利己主義りこしゆぎ

を捨すて、陋劣ろうれつな手段しゅだんを止やめて吾身わがみを省かへりみ、何時いつまでも變かはらぬ美うつくしい梅うめの花はなの様やうな心こころを以もつて神かみの道みちを能よく守まもれ。麗うつくしい三五あななひの教をしへを夢寐「むびにも忘わすれず、日夜にちやおこた怠たらず清きよき

祈いのりを捧ささげよ。大蛇彦をろちひこの神かみが氣きを付つけて置おくぞよ。オーオー〆
と又またもや巖窟いはあなの中うちより、大音響だいおんきやうが聞きこえ來きたる。

熊公くまこう、鹿公しかこうは巖窟いはあなの前まへに立たつて歌うたふ。

神の御稜威も高照の
山より落つる言靈の

瀧の響は涼々と
遠く近くに鳴り渡る

堅磐常磐の巖窟に
神の使の大蛇彦

木の花姫の分靈
此處に現はれましまして

日に夜につきぬ御教を
天地四方の神人に

具さに宣らせ給ひつつ
流れも清き言靈の

瀧に心を洗ひ去り
瑞の御靈と現れまして

草の片葉にいたるまで
世は平けく安らけく

言問ひやめて神の世を
堅磐常磐に治めむと

心を千々に碎かせつ
瀧津涙を注ぎまし

吾らを救ひ給ふなり
嗚呼皇神よ皇神よ

人は尊き神の御子
尊き神の生宮ぞ

世は鳥羽玉の暗くして
塵や芥に穢れたる

靈魂をこれの琴瀧に
楔ぎ被ひてすすくと

直日なほひの神かみの玉たまとなり
暗くらき谷たに間まを伊いづ都の能め賣めの

神かみの功いさをや高照たかてるの
山やまより高たかく照てらすべし

東ひがしと西にしの巖窟いはあなに
現あらはれ給たまふ皇神すめかみの

心こころは清きよき琴こと瀧たきの
みづの靈魂みたまの姿すがたかな

あゝ願ねがはくばこの水みづの
清きよきが如ごとく世よの人ひとの

靈魂みたまを洗あらひ清きよめませ
吾われらは人ひとの子こ神かみの御み子こ

神かみと人ひととは睦むつび合あひ
天あめと地つちとは秩ちつじよ序じよよく

千代ちよ萬よろづ代よに變かはりなく
動うごかぬ御み代よや松まつ茂しげる

神かみ世よも清きよき高たかさ砂この
松まつの榮さかえの久ひさしかれ

松まつの榮さかえの久ひさしかれ
』

と節ふし面おも白しろく調てうし子を合あはせて歌うたふ。この歌うたの面おも白しろさに、志し藝ぎ山やま津づ見みは釣つり出だされて、

巖窟がんくつの中なかより、手てをふり足あしを躍をどらせ、竹たけ筒づつを吹ふきながら巖窟いはやの前まへに現あらはれ來きたり、

吾われを忘わすれて三さん人にん三みつ巴どもゑとなりて踊をどりくるふ。

ここに志藝山津見、熊公、鹿公の三人は琴瀧の水に日夜禊を修し、各手分をなして、三五教の教を四方に傳ふこととなりぬ。熊公は石拆の神の活動をなし、鹿公は根拆の神の活動をなし、黄泉比良坂の神業に参加し大功を立てたるなり。
(大正一一・二・一六 舊一・二〇 土井靖都録)

第五篇 百花爛漫

第二十七章 月光照梅 (四二〇)

夜を日についで【ひる】の國

虎伏す野邊や獅子大蛇

曲津の聲に送られて

大川小川を打渡り

やつれ果てたる蓑笠の

身装も軽きカルの國

花の蕾の梅ヶ香姫の

君の命はただ一人

女心の淋し氣に

神を力に誠を杖に

草鞋脚絆のいでたちは

實に勇ましの限りなり

梅ヶ香薫る春の日も

何時しか過ぎて新緑の

滴る山野は冬の空

嵐の風に吹かれつつ

秋の紅葉も散りはてて

【ふみ】も習はぬ常世國を

行き疲れたる雪の道

太平洋の波高く

大西洋に包まれし

高砂島と常世國

陸地と陸地、海と海

つなぐ【はざま】の地峽國

梅ヶ香姫はやうやうに

【はざま】の森に着きにけり。

木枯の風は雪さへ交へて、獅子の吼るやうに唸り立つてゐる。

太平洋の波を照

らして、十六夜の月は海面に姿を現はしたり。梅ヶ香姫は只一人、浪を分けて昇る月影に向つて、

「あゝ今日は十六夜のお月さま、何時見ても美はしい御顔。妾も同じ十六歳の女の一人旅、變れば變る世の中ぢやなア。想ひ廻せば、時は彌生の三月三日、花の都と聞えたる聖地エルサレムを主従四人立出でて、踏みも習はぬ旅枕、千萬の艱みを凌ぎしのぎて遠き海原を渡り、神の恵みの有難くも戀しき父に廻り會ひ、親子の對面、やれやれと喜ぶ間もなく妾姉妹は、神様のため、世人のために尊き宣傳使となつて、又もや山坂を越え荒海を渡り、あらゆる艱難と戦ひ、ここに力と頼む主従四人は、珍山彦の神の誠めに依つて東西南北に袂を別ち、四鳥の悲しみ、釣魚の涙、乾く間もなき五月の空、珍の都を後にして、便りも夏の荒野を涉り、秋も何時しか暮果てて、はやくも冬の初めとなつたるか。神のため、世のためとは言ひながら、さてもさても淋しいこと、神様を力に誠を杖に、やうやう此處まで來るは來たものの、もう一步も進まれぬ。疲勞れ果てたるこの身體、あゝ何とせむ」

と袖そでに涙なみだを拭ぬぐふ折をりしも、前方ぜんぽうより二三にさんの老若らうじやくこの場ばに現あらはれ、

甲かふ「オイオイあの「はざま」の森蔭もりかげを見みよ、出でたぞ出でたぞ」

乙おつ「何が出でたのだ」

甲かふ「出でたの出でんのつて、それ靈れいぢや靈れいぢや」

乙おつ「靈れいとはなんだい」

甲かふ「今夜こんやのやうな風かぜの吹ふく晩ばんには、得えてして出でる奴やつぢや。蒼白あをしろい瘦やせた面つらをして

眼めをギロツと剥むいて、髪かみを「さんばら」に垂たらしてお出いでる御方おかただ。靈れいは靈れいぢやが、

靈れいの上うへに幽いゆうがつくのだよ。それ見みい、木枯こがらしがヒユヒユと呻うなつてゐる。オツツ

ケ其處そこらからドロドロだ」

丙へい「何を威嚇おどかしよるのだ。幽靈いうれいも何なにもあつたものか。何なんぢや貴様達きさまたちは、ビリビリ

慄ふるひよつて、聲こゑまで怪あやしいぢやないか」

甲かふ「慄ふるふとるのぢやないワイ。何なんだか身からだ體だが細こまかく動うごいとるのぢや」

丙へい「何なには免ともあれ、何なんだか獨語ひとりごとを言いつてゐるやうだ。そつと行いつて偵察ていさつをして見み

やうかい」

甲 貴様、先へ行け

丙 八八ア恐いのだな。氣の弱い奴ぢや、そんな事で吾々の探偵が勤まるか。鷹

取別の神さまより、三五教の女宣傳使が「はざま」の國を渡つて常世の國へ行く

と云ふことだから、女宣傳使を見つけたら「ふん」縛つて連れて来いと云つて、

吾々は結構なお手當を頂いて夜晝かうして廻つて居るのぢやないか。若も彼んな

奴が、その中の一人でもあつて見よ、吾々は結構な御褒美をドツサリ頂戴して、

親子が一生遊んで暮さるのだ。恐い處へ行かねば熟柿は食へぬぞ、虎穴に入ら

ずむば虎兒を獲ずだ。一つ肝玉を出して、貴様から先へ偵察をして来い

甲 阿、それもさうだが、何だか氣味が悪いな。ヤーそれなら三人手を繋いで、

一緒に行かうかい。宣傳使と云ふ事が判れば、別に恐い事も何ともありやしない

ワ。一人の女に三人の男だ。磐石を以て卵を破るよりも易い仕事だ。併しながら

幽の字と靈の字であつたら貴様はどうするか

乙 幽霊でも何でも三人居れば大丈夫だ。しつかり手を繋いで行つて見ようかい

と甲乙丙は、梅ヶ香姫の休息する森蔭に現はれ来り、

甲「ヤイ、その方は何者ぢや。生あるものか、生なきものか、ユ、ユ、ユ、幽霊か、バ、バ、化物か」

乙「セ、セ、宣傳使か、宣傳使なれば鷹取別の神様に……」

丙「シツ、何を云ふのだ。馬鹿な奴だな。モシモシお女中、一寸物をお訊ね致します。貴女は吾々の信ずる尊き有難き三五教の宣傳使で御座いませう。何卒八ツキリと御名告り下さいませ」

木枯の風はヒユヒユと吹き捲つてゐる。浪の音はドンドンと響いて来た。

梅ヶ香姫は雪のやうな白き、細き手を「ぬつと」前に出し、

「あゝ怨めしやな、妾は嶮しき山坂を越え……」

甲乙丙「ヤア、這奴はたまらぬ。矢張り靈ぢや靈ぢや、靈の上に幽の附く代物だよ。遁げるい遁げるい」

と尻を「ひつからげ」雲を霞と遁げ去つたり。梅ヶ香姫は、悄然として獨言。

「水も洩らさぬ悪神の仕組、鷹取別は妾姉妹の行方を探ね苦しめむと企つると聞く。織弱き女の一人旅、ア、せめて照彦でも居て呉れたならば、こんな時には力

になつて呉れるであらうに、ア、イヤイヤ師匠を杖につくな、人を力にするな。神は汝と俱にありとの三五教の教、ア、迷ひぬるか、女心のあさましさよ。たとへ如何なる強き敵の現はれ來るとも、誠一つの言靈の力に、百千萬の曲津見を言向け和さねばならぬ神の使だ。ア、神様許して下さいませ』

と大地に平伏し、木の間洩る月に向つて、聲低に感謝の祝詞を奏上する折しも、最前現はれし三人の中の一人、丙は突然としてこの場に現はれ、

「ヤア貴女は三五教の宣傳使、昔はエルサレムの天使長桃上彦命の御娘と承はつて居りました。ここは鷹取別の神の警戒激しく、貴女様三人の御姉妹を召捕るべく四方八方に探女を遣はし、蜘蛛の巣の如き警戒網を張つて居ります。私も實はその役人の一人、今三人連れで様子を窺へば、まさしく宣傳使の一人と悟つた故、二人の同役を威喝して、【まき】散らして私は忍んで参りました。私の家は實に【むさ】苦しい荒屋で御座いまするが、暫らく警戒の弛むまで、わが家にお忍び下さいませれば有難う御座います。この國はウラル彦の教の盛んな所で、三五教のアの字を言つても、酷い成敗に遇はねばならぬ危い所でございます。私も元は

ウラル教を信じて居りましたが、貴女様一行が【てる】の國からアタルの港へお渡りになるその船の中に於て、三五教の尊き教理を知り、心私かに信仰致して居りますもの、私の妻も熱心なる三五教の信者でございます。かういふ處に長居は恐れ、又もや探偵の眼にとまれば一大事、どうぞ一時も早く、私の家へ御越し下さいませぬか」

「ア、世界に鬼はない、御親切は有難う御座います。併しながら何事も惟神に任したこの身、たとへ鷹取別の前に曳き出され、鬪殺しに遇はうとも、苟くも宣傳使たる身を以て、人の情に【ほださ】れて、たとへ三日でも五日でも空しく月日が過されませうか。神を力に誠を杖に、飽くまでも宣傳歌を唱へて行く處まで参ります。また貴方様に捕へられて、鷹取別の面前に曳出さるるとも、これも何かの神様のお仕組、御親切は有難うございますが、貴方の家へ忍び隠ることだけは許して下さいませ」

「イヤ如何にも感じ入りたるお言葉、理義明白なる仰せには、返す言葉もございませぬ。併しながら、袖振り合ふも多生の縁、これも何かの神様のお引合せでこ

ざいませう。ア、然らば私の家へ隠れ忍ぶと云ふ事はなさらずに、何卒一晩私の家へ御出で下さいまして、女房に尊き三五教の教を聴かしてやつて下さいませれば有難うございます」

「ア、然らば不束ながら神様の教を傳へさして頂きませう」

「早速の御承知、有難う御座います」

と先に立つて行く。又もや後の方に當つて、騒がしき人聲聞え来る。

見れば、鷹取別の紋の入った提燈の光が木蔭に揺らぎつつ、足早に此方に向ひ來たる模様なり。

(大正一一・二・一六 舊一・二〇 外山豊二録)

第二十八章 窟の邂逅(四二一)

冷えたる月は天空に光輝き、
木枯の風は肌沁み渡り、
骨も徹さむばかりなる

寒けき夜の細道を一人の男に伴はれ、年は二八か二九からぬ、花の蕾の梅ヶ香姫は、疲れし足もたよたよと、とある山蔭の瀟洒たる一つ家に伴はれ行く。一人の男は、

「私は今まで途中の事と言ひ、名前も申上げませんでした、春山彦と申す者で御座います。實に見窄しき荒屋なれど、どうかゆるゆる御休息の上、尊きお話を聴かせて下さいませ」

と挨拶しながら、密かに門の戸を開いて梅ヶ香姫を迎へ入れた。春山彦は手輕なる夕餉を出し、梅ヶ香姫と諸共に食膳の箸を採り、茶漬さらさらと茲に夕餉を濟ませたり。春山彦の娘と見えて、花を欺く三人の娘は、叮嚀に會釋しながら膳部を片づける。春山彦の妻夏姫はこの場に現はれ、叮嚀に挨拶をしながら、
「モシ宣傳使様、お年にも似合はぬ、お道のために世界をお廻り遊ばすとは、眞に感心いたします。妾も御覽の通り三人の娘を持つて居りますが、何れも此れも嬢さま育ちで、門へ一つ出るのにも、風が當るの、風をひくの、恥かしいのと申して、親の懷ばかりに甘えて居りますにも拘らず、貴女様の雄々しき御志、眞に

感じ入りました。私も今年の夏の初め頃より、三五教の信者となり、神様を祀つて信仰を致して居りますが、何分にも此處は高砂の島から常世の國へ渡る喉首、常世神王の宰相鷹取別の権力強く、三五教の宣傳使がここを通つたならば、一人も残らず縛り上げて、常世城へ連れ參れとの厳しき布令が廻りまして、誰も彼もこの國人は欲に迷ひ褒美に與らうとして、晝も夜も宣傳使の通行を探して居るやうな次第でございます。夫春山彦は信仰の強い者でありまして、夏の初め智利の國から此方へ歸つて來る際、アタル丸の船中において美しい姉妹三人の宣傳使の歌を聞いて、今まで奉じてゐたウラル教をスツカリ止め、三五教に轉じましたのでございます。然るに表向き三五教を信ずれば、常世神王様の御氣勘に叶はぬので、何んな責苦に遇はされやうも知れませぬ故、密かに後の山に岩屋戸を築き、石室の中に祀つて居ります。可なり廣い座敷でございますれば、何卒一度、神様に宣傳歌と神言を奏上して下さいませぬか』

『有難うございます。危ふき處を助けられ御恩の返しやうも御座いませぬ。左様ならば神様に神言を奏上さして戴きませう』

夏姫は、

「妾が案内いたしませう」

と先に立つて裏庭を越え、廣き巖窟の傍に伴ひ行く。

石室の中には、淑やかなる女の聲にて宣傳歌が聞えて居る。夏姫は梅ヶ香姫に

向ひ、

「サア、どうぞ此戸を向ふへ押して下さいませれば、可なり廣い間がございますし

て、大神様が祀つてございます。どうぞ神言を奏上して下さいまして、悠りと御

休息なさいませ。表に少しく用がございますから、妾は是にて失禮いたします」

と本宅の方へ姿を隠したり。

梅ヶ香姫は戸口に立つて、室内の宣傳歌を床しげに聞いてゐる。

「天地の神の守ります 美しい御國に生れたる

青人草のここかしこ 茂り榮ゆるその中に

この世の花と謳はれし 高天原の貴の宮

神の長なる桃上彦の
父の命の御跡邊を

日に夜に戀ひつ慕ひつつ
雨の夕や風の朝

心をいたため暮したる
松竹梅の姉妹が

心の暗を晴らさむと
花咲く春の上三日

花の都を立ち出でて
山川渡り海原の

浪おし分けてやうやうに
智利の港に着きにけり

朝日も「てる」の港より
大蛇の船に乗せられて

空鳴き渡る杜鵑
悲しき三人の姉妹が

心も清き照彦の
御供の神と諸共に

菖蒲も匂ふ五月空
五日の宵に嬉しくも

珍の館のわが父に
父子の縁の浅からず

神の恵みに助けられ
會うて嬉しき相生の

祝ひの宴席とこしへに
喜ぶ間もなく惟神

神の教を開かむと
四男三女の宣傳使

父の館を後にして

智利山峠の頂きに

立ちて都を振り返り

父母に名残を惜しみつつ

ハルの港を船出して

祕露とカルとの國境

アタルの港を後になし

神の御稜威も高照の

御山を越えて進み來る

歩みも軽きカルの國

ここに三人の姉妹は

袂を分ちめいめに

三五教の宣傳歌

歌ひて進む折柄に

間の國に差掛る

頃しも秋の末つ方

冬の境の木枯に

吹かれて艱む旅の空

鷹取別の目付らに

虐げられて玉の緒の

息も絶えなむその時に

花も實もある春山彦の

神の命に助けられ

この世を忍ぶ松代姫

竹野の姫は今ここに

美しき顔を見合はせて

神の御言を宣りつれど

心にかかるは梅ヶ香姫

わが妹の一人旅 　　いづくの果に漂浪の

旅に足をや痛むらむ 　　あゝ懐かしき妹よ

あゝうつくしき梅ヶ香の 　　姫の命よ松竹の

姉の心も白浪の 　　大海原に漂ふか

荒野の果にさまよふか 　　心慢れる鷹取別の

曲の手下の曲神に 　　虐げられて千萬の

責苦に遇うて苦しむか 　　聞かまほしきは妹の

便りなりけりいたはしや 　　會ひたさ見たさ懐しと

思へば心もかき曇る 　　この世を造りし神直日

心も廣き大直日 　　唯何事も人の世は

直日に見直し聞き直し 　　三五教の御教を

思ひ廻せば廻す程 　　妹の行方俣ばれて

涙のかわく暇もなし 　　あゝわが涙この涙

天に昇りて雨となり 　　雪ともなりて世の人の

心の玉を洗へかし

力に思ふ照彦の

下僕の神は今何處

曲神の猛ぶ黄泉島

黄泉の國に渡れるか

常世の國にさまよふか

せめては空行く雁の

便りもがもと思へども

この世を忍ぶ今の身の

何と詮方なくばかり

誠の神よ皇神よ

わが妹や照彦に

一日も早く會はしませ

一日も早く會はせまし

あゝ梅ヶ香よ妹よ

あゝ妹よ照彦よ

と歌つてゐる。梅ヶ香姫はこの聲を聞いて、かつ驚きかつ悦び、静かに戸を開け

て一室の内にまろび込み、

あゝ戀しき姉上様

と言つたきり、嬉しさに言葉詰つて泣くばかりなり。

松代姫、竹野姫は思はぬ姉妹の對面に、狂喜の淚堰きあへず、三人は無言のま

ま嬉し涙に咽ぶのみなり。

折しも表に當つて騒々しき物音聞え來る。ア、この三人の娘の運命は如何になるべきか、心許なき次第なり。

(大正一一・二・一六 舊一・二〇 森良仁録)

第二十九章 九人娘 (四二二)

十六夜の初冬の月は、御空に皎々と輝いてゐる。

春山彦の門前には、照山彦、竹山彦の二人が數多の家來を引き連れ、突棒、刺股、十手、弓矢を携へながら、門戸を押し破り進み來たり、大音聲。

春山彦は在宅か

と呼ばはるにぞ、春山彦は靜かに門の戸を押し開き、

これはこれは、何方かと思へば照山彦、竹山彦の御兩所様、數多の供人を引き

連れ、この眞夜中に、よくもよくも御入來下さいました」

「オー、今日はよく來たのではない。照山彦は汝の爲には悪く來たのだ。氣の毒ながら今日の役目、申し渡す仔細がある、奥へ案内を致せ」

春山彦は二人を導き一閒に入る。竹山彦は數多の部下に向ひ、

「その方共はこの館を取り巻けよ。必ずともに油斷を致すな」

と言ひ置いて正座になほるを春山彦は、

「貴方は鷹取別の神の御家來、この眞夜中に何御用あつてお越しになりました。御用の次第を仰せ聞けられ下さいますれば有難う存じます」

照山彦は威儀を正し、春山彦をグツと睨めつけ、

「吾々が今日參つたのは餘の儀ではない。その方はこの「はざま」の國の目付役を致しながら君命に背き、三五教の宣傳使、松、竹、梅の三人を密かに隠匿ひ置くと聞く。この里人の密告によつて、確かな證據が握つてある以上は、否應は言はれまい。ジタバタしてももう敵はぬ。百千萬言の言ひ譯も、空吹く風と聞き流すこの照山彦だ」

竹山彦は威儀儼然として、

「かうなつた以上は百年目だ、一時も早く三人の女をこの場へ引摺り出して渡さばよし、何の彼のと躊躇に及ばば、汝も諸共引き縛つて常世の國に連れ歸り、拷問を致してでも白状させる。サア春山彦、返答は何うだ」

「これはこれは、寢耳に水の鷹取別の御仰せ、モウかうなる上は是非に及ばぬ。可愛らしい天にも地にもかけ替へのない吾三人の娘……イヤ娘のやうに可愛がつて居る三人の宣傳使をこれへお渡し申す。それについても種々の仕度もござれば、半刻ばかりの御猶豫を願ひ致します」

照山彦「イヤ、その手は喰はぬ。ゴテゴテと暇取らせ、風を喰つてこの家を逃げ失せる汝の企み、屋敷の廻りには數百人の配下をつけて置いたれば、蚤の飛び出る隙もない。キリキリチャツと渡したが爲であらうぞよ」

「イヤ、照山彦殿、仰せの如くもはや遁走の憂ひもなければ、半刻ばかりの猶豫を與へ、吾々はここに休息して待つことに致さう、竹山彦がお請合申す」
「しからば半刻の猶豫を與ふる。その間に三人の宣傳使をこれへズラリと引き出

せよ」

春山彦は胸に鎚打たる心地。

「承知いたしました」

と落つる涙をかくしつつ、この場を悠然として立去り、別殿に進み入る。妻の夏姫は様子如何にと案じ煩ふ折りしも、春山彦の常ならぬ顔を見て、

「思ひがけなき夜中のお使者、様子は如何でございますか」

春山彦は吐息をつきながら、

「女房、汝に一生の願ひがある。聞いては呉れようまいかなア」

「これは又、あらたまつたお言葉、夫の言葉を女房として、どうして背きませう。何なりと叶ふ事ならば仰せ付け下さいませ」

「オー夏姫、よく言うて呉れた。夫婦の者が長の年月、蝶よ花よと育て上げた秋

月姫、深雪姫、橘姫の三人の生命を與れよ」

「工、」

「返事がないは、否と申すのか。野山の猛き獣さへも、子を思はざるものがあら

うか。焼野の雉子、夜の鶴、朝な夕なに、蝶よ花よと育て上げ、苔の花の開きか
けたる、月雪花の三人の娘をば、宣傳使の身代りに立てたいばかりの夫が頼み、
どうぞ得心して呉れ。わが三人の娘は世界の爲には働きの出来ぬお嬢育ちに引き
代へて、珍の都にまします正鹿山津見の神の御娘子は天下の宣傳使となつて衆生
濟度を遊ばす、その清き御志、思へば思へば、これがどうして鷹取別に渡されよ
うか。今まで盡した親切が却つて仇となつたるか。あゝどうしたらこの場の苦し
みを免れる事が出来ようぞ。サア夏姫返答を聞かして呉れよ」

夏姫はさし伏向いて何の應答もなく涙を袖に拭ふのみ。

この時一閒を開けて現はれ出でたる三人の娘は、知らぬ間に宣傳使の服を着け、
「お父さま、お母さま、吾々姉妹三人は宣傳使の御用に立つて、常世の國に引か
れて参ります。老少不定は世の習ひ、随分「まめ」で暮して下さいませ」
と袖に涙をかくして、疊に手をつき頼み入る。

春山彦夫婦は一目見るより吾子三人の決心に感じ入り、一度にワツと泣かむと
せしが、待て暫し、聞えては一大事と、涙をかくす苦しさ。

かかる處へ松竹梅の宣傳使現はれ來り、

□ 委細の様子は残らず聞きました。海山の御恩を蒙りて、まだその上に勿體なや、天にも地にもかけ替へのない可愛い三人の娘子を身代りに立てて、妾達を助けて遣らうとの思召は、何時の世にか忘れませう。あゝそのお心は千倍にも萬倍にも受けます。三人の娘子様、よくもそこまで思うて下さいました。併しながら吾々は、人を助ける宣傳使の役、卑怯未練にも敵を詐つて替へ玉を使ひ、三人の娘子を敵に渡すといふ事が、どうして忍ばれませうか。その御親切は有難うございませが、かへつて吾々の心を痛めます。大事の娘子を身代りに立てさして、吾々三人はどうしておめおめとこの世に生きて居られませうか。どうぞこればかりは思ひ止まつて下さいませ。わらは達は天晴れと名乗つて参ります」

と先に立つて松竹梅の三人は、照山彦の居間に行かむとするを、親子五人は宣傳使に縋りつき、春山彦はあわてて、

□ マア待つて下さいませ。折角の娘が志、あなたは神様の爲にこの世を救はねばならぬお役。その身代りに立つた娘は、まことに光榮の至り、喜んで身代りに立

たしていただきます。どうか娘の志を叶へさして下さいませ
と頼み入る。

照山彦は大音聲、

「アイヤ春山彦、時が迫つた。早く宣傳使をこの場へ連れ出せ。何をぐづぐづ致して居るか」

と唼鳴り聲。

「ハイハイ、暫くお待ち下さいませ。今直に参ります」

竹山彦「何をぐづぐづ埒の明かぬこと。早く三人をこれへ出せ」

春山彦は是非もなく、二人の前に立現はれ、

「只今これへ連れ参ります。よく御實檢下さいませ」

竹山彦「オー、早く出せ。この家には秋月姫、深雪姫、橘姫の三人の娘がある

と云ふ事は聞いてゐる。その娘の顔をよく見知つたる竹山彦、身代りを出さうな

どと量見違ひいたして、あとで吠面をかわくな」

春山彦は進退これ谷まり、如何はせむと心の中に、

野立彦命、野立姫命、木花姫命守らせ給へ

と一生懸命に念じ入る。松竹梅の宣傳使はこの前に現はれ、

「オー照山彦、竹山彦の御使とやら、妾は三五教の宣傳使、昔はエルサレムに於

て時めき渡る天使長桃上彦命の娘と生れた、松代姫、竹野姫、梅ヶ香姫の、今は

天下の宣傳使、わが顔をよく検めて一時も早く連れ歸り、常世神王の前に手柄を

いたされよ。ヤー、春山彦、汝の志、何時の世にかは忘れむ。妾三人は今捕はれ

て常世の國に到ると雖も、尊き神の御恵みにて、再び御目にかかることもあらむ。

親子夫婦むつまじく達者に暮して下されませ

春山彦は涙を拭ひながら、

「これはこれは勿體なき宣傳使のお言葉、どうぞ御無事で歸つて下さいませ」

照山彦「エー、グツグツと、何をベソベソ、早くこの場を立ち去らぬか。竹山彦

殿、よく調べられよ

竹山彦は三人の顔をトツクと眺め、

「オー、これは秋月姫でもない、深雪姫でもない、また橘姫でもない。擬ふ方な

まつたけうめ
き松竹梅の宣傳使にきまつた。アイヤ、春山彦、今日までこの三人の宣傳使を隠
ま
匿うた罪は赦して遣はす。今後は氣をつけて再びかやうな不都合な事はいたすで
ないぞよ」

と、三人の宣傳使を無理矢理に駕籠に乗せ、大勢の家來に兒がせながら、凱歌を
奏して歸り行く。

春山彦、夏姫は、ワツとばかりに聲を張りあげ泣き伏す。この聲に驚いて、月、
ゆき
雪、花の三人の娘と、松、竹、梅の宣傳使は、この場にあわただしく走せ來り、

「オー、父上、母上」

「春山彦どの、夏姫様」

と聲かけられて夫婦は頭を上げ、ハツとばかりに二度吃驚、夢か現か幻か、合點
ゆかぬと夫婦は顔を見合せ、思案に暮れあたる。

あゝ今引かれて行つた松竹梅の宣傳使は、何神の化身なるか、いぶかしき。

(大正一一・二・一六 舊一・二〇 東尾吉雄録)

第三〇章 救の神〔四二三〕

春山彦、夏姫を始め、松、竹、梅の宣傳使、竝に月、雪、花の姉妹はこの場の不思議に合點ゆかず、夢かとはかり驚喜の念に驅られゐる。夏姫は漸くに口を開

き、

「實に尊き有難き神様の御恵、誠と誠が天地に通じて、神様の尊きお救ひに預かつたので御座いませう。日頃信ずる野立彦、野立姫、木花姫の御身代り、思へば思へば有難し、勿體なし三五教の御教」

「オー、女房、解つたか。娘でさへも、父の心を酌み取つて、宣傳使様のお身代りに立たうと言ふ健氣な心を有つて居るに、汝はまた何とした未練な心であつたか。夫が女房に手を合はして、どうぞ娘を身代りに立てて呉れと頼んだ時、其方は一言の返辭もせなかつたであらう。腹を痛めて藁の上から育て上げた、天にも地にも懸がへのない三人の娘を、身代りに立てるのであるから、そなたが一遍に、ウンと言はぬのも強ち無理ではない。お前は信仰が徹底してゐないのだ。信仰の

力は山をも動かすとかや。斯くのごとき結構な靈驗の現はれたるも、まつたく松、竹、梅の宣傳使様の御神徳と御盛運の強いのは申すに及ばず、吾々親子の天地に通じた眞心を皇大神は憐み給ひ、救うて下さつたのであらう。ア、有難や忝けなや」

と又もや嬉し涙をしぼる。

松、竹、梅の宣傳使、月、雪、花の三人の娘は、夫婦二人を勞はりながら、改めて宣傳歌を歌ひ神言を奏上する折しも、門戸を叩く者あり。春山彦は僕にも言付けず、自ら起つて表門に駆け行き、戸を開くや否や、又ツと入り来る一人の男、見れば今三人の宣傳使を伴れ歸つた竹山彦なるにぞ、春山彦はハツと驚き、一つ免れてまた一つ、折角助かつて、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、竹山彦のあとへ引返して、これに來りしは、途中に於て身代りを悟り、再び來りしならむ。吾家に入れては一大事と、物をも言はず猿臂を延して首筋をグツと掴み、大地へ打ち倒し、一刀の柄に手をかけて、頭上より眞ツ二つにせむと、眞向に振り翳すを、竹山彦は大地に倒れながら悠々迫らず、

「春山彦、心を落着けられよ。これには深い仔細がある。吾が申す事を一通り聞いて疑ひを晴されよ」

と起き直つて、門口の鬨を跨げようとする。跨げさしては大變と、春山彦は、主人の許しなくして、たとへ荒屋なりとも、勝手氣儘に吾家の鬨を跨ぐるとは無禮千萬、思ひ知れよ」

とまたもや斬つてかかるを、竹山彦はヒラリと體を躲したまま、ツカツカと座敷へ進み入る。夏姫を始め六人の娘は、竹山彦の再び現はれしに驚き、夢に夢見る心地し、呆然として顔を凝視する。春山彦は、兩刃の劍を抜き翳し、座敷に上り、
「ヤア、惡逆無道の鷹取別に組する惡魔の張本竹山彦、この春山彦が正義の刃喰つて見よ」

と、又もや斬り付くるを、竹山彦は利腕を確乎と握り、
「アハ、ハ、ハ、春山彦、心を落着けられよ。吾こそは、大江山に現はれたる鬼武彦の化身にして、竹山彦とは假の名、松、竹、梅の三人の宣傳使を救はむがために、竹山彦命と偽つて、惡神鷹取別の部下となり、今日あるを前知して、吾部下

の白狐、高倉、旭、月日の眷屬神を使ひ、身代りを立てたは狐の七化、もうかうなる上は大磐石、何方も御安心なされよ[□]と一部始終を物語れば、春山彦夫婦を始め六人の娘は、一度に思はず手を拍つて神徳を讚美し、鬼武彦に向ひて感謝の意を表しける。

これより、松、竹、梅の三人は、鬼武彦に護られて目の國に渡り、追々進んでロッキー山に登り、再び船に乗り黄泉島に無事安着し、黄泉比良坂の神業に参加しぬ。

(大正一一・二・一六 舊一・二〇 河津雄録)

第三章 七人の女(四二四)

海の内外の分ちなく

神の御稜威は照り渡る

常世の浪を隔てたる
北と南の大陸の

荒ぶる浪も高砂や
間の國の神の森

花咲き匂ふ春山の
郷の司の春山彦

心の花も麗しく
梅か櫻か桃の花

野山も笑ふ春姫の
あやどる野邊の若緑

榮えさかえて五月空
暗も晴れ行く夏姫の

心の空に照る月は
光眩く澄み渡り

【秋月姫】の眞心は
紅葉の錦織る如く

東の海を分け昇る
月の姿も西の空

空つく山の頂に
光も【深雪】のきらきらと

輝きわたる【深雪姫】
冷酷無惨の世の中に

春の花咲き【夏山】の
緑滴る夫婦が情

神の教も【たちばな】や
非時薫る【橘姫】

親子五人の眞心は
【いづ】の身魂の世を救ふ

神かみの心こころと知しられけり
ミロクみろくの御代みよを「松代姫まつよひめ」

常世とこよの空そらを晴はらさむと
春夏秋はるなつあきの露霜つゆしもを

凌しのぐ心こころの「竹笹たけざさ」や
風かぜに揉もまるる「なよ」草くさの

撓たわむばかりの「竹野姫たけのひめ」
霜しもの劍つるぎや雪ゆきの衣きぬ

冷つめたき風かぜに揉もまれつつ
心こころの色いろの永久とこしへに

萬よろづの花はなに魁さきがけて
咲さきも匂におへる「梅うめヶ香か姫ひめ」の

眞心まごころこそは香かばしき
花はなの蕾つぼみぞ麗うつくしき

神かみの守まもりの顯いちじる著るく
大江山たいかうざんに現あらはれし

鬼武彦おにたけひこの御從神みともがみ
神かみの御稜威みいづも「高倉たかくら」や

空照そらてり渡わたる白狐びやくこの「旭あさひ」
「月日つきひ」も共ともに變身みかへるの

その働はたらきぞ健氣けなげなれ。

鬼武彦おにたけひこは立たち上あがり、
座敷ざしきの中央まんなかにどつかと坐ざし、

さしもに清きよき癸みづのとの、
亥みの月つき今日けふの十六夜のちのよの月つきは早はや西山せいざんに傾かたむきたれば、
四更しかうを告つ

ぐる鷄鳴に、東の空は陽氣立ち、光もつよき【旭狐】の空【高倉】と昇るらむ。
【月日】の【駒】の關もなく、大江山を出でしより、東や西や北南、世界隈なく
世を照らす、【日出神】の御指揮、常世の國に渡り來て、千變萬化に身を窶し、
神の經綸に仕へたる、吾は卑しき白狐神、數多の眷屬引き連れて、神の大道を守
る折、心驕れる鷹取別の、曲の企みを覆へさむと、朝な夕なに心を碎き、【旭】、
【高倉】、【月日】と共に、三五教を守護せし、鬼をも摧ぐ【鬼武彦】が、心を
察したまはれかし。八岐の大蛇に呪はれし、大國彦の曲業は、比類まれなる惡逆
無道、鷹取別や遠山別、中依別の三柱神は、姫の命を捕へむと、四方八方に眼を
配り、醜女探女を數限りもなく配り備ふるその危さ、手段をもつて鷹取別が臣下
となり、【竹山彦】と伴はつて甘く執り入り、常世神王の覺も目出度く、今日の
務を仰せつけられしは、天の惠の普き兆、善を助け惡を亡す、誠の神の經綸、八、
ア嬉しやうれしや勿體なや。さはさりながら御一同の方々、必ず共に御油斷ある
な、一つ叶へばまた一つ、欲に限りなき、體主靈從の邪神の魂膽、隙行く駒のい
つかまた、隙を狙つて、三人の月雪花の御娘御を、奪ひ歸るもはかられず、只何

事も神直日、大直日の神の御恵みによつて、降り来る大難を、尊き神の神言には
らひ退け、朝な夕な神に心を任せたまへ、曉告ぐる鶏の聲、時後れては一大事、
吾はこれよりこの場を立去り、鷹取別の館に参らむ。いづれもさらば』
と云ふかと思れば姿は消えて、何處へ行きしか白煙、夢幻となりにけり。
合點の行かぬこの場の有様、春山彦を始めとし、花にも擬ふ七人は、茫然とし
て暫し言葉もなかりしが、春山彦は立ち上り、天を拜し地を拜し、
『あゝ有難や尊やな、親子夫婦が眞心を、神も照覽ましませしか』
と、涙と共に宣傳歌、いと淑やかに歌ひ始むる。七人の女も口を揃へて、

神が表に現はれて 善と惡とを立別る
この世を造りし神直日 心も廣き大直日
ただ何事も人の世は 直日に見直せ聞き直せ
世の曲事は宣り直せ 朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも たとへ大地は沈むとも

誠まことの神かみは世よを救すくふ

誠まことの神かみは世よを救すくふ

と歌うたひながら拍手はくしゆする聲こゑは天地てんちも揺ゆぐばかりなり。松代姫まつよひめは立たち上あり、

☐ 天あめと地つちとは睦むつび合あひ 四方よもの民草神風たみぐさかみかぜに

靡なびき伏ふす世よを「松代姫まつよひめ」 ミロクミロクの神かみの現あらはれて

親おや子こ五ご人にんの「いつ」御魂みたま 松竹梅まつたけうめの「みつ」御魂みたま

【三五】の【月】も空そら高たかく 輝かがやき渡わたる「麻柱」の

神かみの教をしへを傳つたへむと 高砂島たかさごじまを後あとに見みて

常世とこよの國くにの空寒そらさむく カルの都みやこに差さしかかる

神かみの使つかひの宣傳使せんてんし 冷つめたき風かぜに曝さらされて

間はざまの國くににさしかかる 雨あめか涙なみだか松まつの露つゆ

露つゆのこの身みを神國かみにに 捧さなげて間はざまの國境くにがは

來きたる折をりしも鷹取別たかとりわけの 猛たけき力ちからに小雀こすずめの

かよわき女の一人旅

尾羽打枯らす手弱女を

捕へ行かむとする時に

空を焦して降り来る

唐紅の火柱に

打たれて逃ぐる曲津見の

消え行く後に唯一人

疲れしこの身を横たへて

心私かに宣傳歌

歌ふ折しも春山彦の

神の命に救はれて

堅磐常磐の巖窟に

來りて見れば懐かしき

【竹野】の【姫】のすくすくと

笑顔に迎へし嬉しさよ

世人の心冷え渡る

中にも目出度き【夏姫】の

日に夜に厚き御仁慈

神の恵のいや深く

神の御稜威はいや高く

輝く【月雪花】の御子

【春山彦】や【夏姫】の

御恩は【いつか】忘るべき

心は【いつか】忘るべき

嗚呼有難や【麻柱】の

教を立てし皇神の

御稜威は千代に榮ゆべし

功は四方に開くべし

と感謝かんしゃの歌うたを詠よみて、元もとの座ざに復ふくしける。
屋外をくわいには、天空てんくうを轟とどろき渡る天あまの磐船いはふね、鳥船とりふねの音おと、
天地てんちを壓あつし、木枯こがらしの風かぜは唸うなり
を立てて雨戸あまどを叩たたくぞ淋さびしけれ。

(大正一一・二・一七 舊一・二一 加藤明子録)

第三二章 一絃琴いちげんきん〔四二五〕

空そらに轟とどろく磐船いはふねの 響ひびきは何時いつか消きえ失うせて

冬樹ふゆきを渡わたる木枯こがらしの 聲こゑも寂さびしく聞きゆなる

冬ふゆの初はじめとなりぬれど 春はるめき渡わたる春山彦はるやまひこの

神かみの屋敷やしきに神壽かみほぎの 言靈ことたま清きよき一絃琴いちげんきん

天地てんちに通つうずる一條ひとすぢの その聲こゑ清きよき琴絲こといとの

捌の音色もサヤサヤに

五臓六腑を洗ふなり

折りから門前に佇む男

片手を耳にあてながら

木枯荒ぶ初冬の峰の嵐か松風か

訪ぬる人の琴の音が心の駒山彦の神

とどめて聴くも縁の端心に通ふ琴の音は

常磐の松の【松代姫】思ひの【竹野】著く

戸外に響く床しさよ一度に開く【梅ヶ香姫】の

貴の命の御すさび何處とはなしに潤ひの

聲をしるべに獨言。

駒山彦 合點のゆかぬこの館の様子、梅ヶ香姫の日頃奏でさせ給ふ一絃琴のその

音色、様子ありげな春山彦のこの館、進み入つて事の實否を探らむと、心の駒は

逸れども、人目の垣に隔てられ、何とせむ方冬の日の、心短き門番に怒鳴りつけ

られ、追つ拂はれなば如何にせむ。蟲が知らずか何となく、立ち去り兼ねしこの

門口、神の誠の教を以て叩かば開く胸の裡、叩いて見むか待て暫し、ここは春山の郷の司、ウラル彦の教を奉ずる曲神の住所、言向け和すは易けれど、大事の前の小事、くだらぬ事に暇をとり大切なる吾が使命を仕損じなば、天地の神に對し奉り、何と言譯あるべきぞ。嗚呼恨めしやウラル彦、開けて入らうか、開けずに居らうか、開けて口惜しき玉手箱」

魂の御柱搗き固め、心の駒に鞭うちて、思ひきつたる大音聲。

三五教の宣傳使駒山彦とは吾事なり。惡逆無道の鷹取別が魔神に組する春山彦、

この門開け」

と右手に拳を固めつつ、割れむ許りに門の扉を打叩く。聲に驚き松代姫は、何と

なく聞き覚えある門の聲、

竹野姫、梅ヶ香姫、そなたは御苦勞ながら門口に出で、いかなる人か、調べて

給も」

「ハイ」

と答へて兩人は徐々と起つて門の口。

「何方なれば門戸を叩きたまふぞ。何となく床しき、聞き覚えのある御聲、名告らせたまへ」

と聲かくれば、駒山彦は門外より、

「ヤアさう聞く聲は竹野姫殿、梅ヶ香姫殿、吾こそは智利の國にて別れたる駒山彦の宣傳使にて候。三五教の宣傳使たる身を以て、而も御二方様、惡逆無道の鷹取別が幕下の春山彦、ウラル教を奉ずる曲神の館に忍ばせ給ふは何故ぞ。これに深き様子もあらむ、委細包まず述べられたし」

「これには深き仔細のござれば、先づまづお這入り下さいませ」

と門の門をとり外し、左右に開いて現はれ出で、駒山彦の手をとつて奥へ奥へと進み行く。二人の娘は手を支へ、

「ア、これはこれは駒山彦の宣傳使様、魔神の猛る荒野原、さぞお困りでございませう。先づまづお這入り下さいませ」

と門の戸ガラリと押し開く。駒山彦は、

「然らば御免」

と言ひつつズツと座敷に通れば、思ひがけなき松代姫、春山彦が家内の各々、皇大神の御前に山野海河の供物を獻じ、神を慰むる眞最中、駒山彦は不審の面色にて、

「思ひ掛なき松代姫殿、この家の御主人春山彦殿、貴下はウラル教を奉じ鷹取別に媚び諛ふ春山の、郷の司と聞きしに拘はらず、神前恭しく三五教の奉ずる皇大神を祀り、神慮を慰め居給ふこの場の光景、合點ゆかず、包み隠さず委細物語られたし」

と迫るにぞ、松代姫は、

「貴神は駒山彦殿、一別以來何の消息もなく、雨、風、霜の憂き節に、心にかかる汝が身の上、ようマア無事に居て下さいました。妾姉妹三人は、實に愧かしき事ながら、鷹取別の計略にかかり、一命すでに危き處、情も深き春山彦の夫婦の神に助けられ、今やこの場を立ち去らむとするきはどい處、貴神にお目に懸つたのも測り知られぬ神様の御思召、どうぞ御夫婦に、妾に代つて厚く御禮申して下さい」

久振りの対面と云ひ、春山彦の歸順と云ひ、案に相違の神様の御引き合はせ。
ア、これは御夫婦様、よくもよくも御親切に御世話下さいました、有難う存じま
す

と、遠剛毅の駒山彦も嬉し涙の袖をしぼる。

春山彦は初めて口を開き、

「神の造りしこの國は、恵みの花のパラダイス、何處の空にも神柱、太敷く立
て守ります、その御柱と選ばれし、春山彦が親子夫婦の嬉しさ。御禮は却つて恐
れ入る、幾久しくも變りなく、吾らの心を護らせ給へ、四柱の宣傳使殿」
妻夏姫を始めとし月、雪、花の三人は紅葉の如き手を合はせ、嬉し涙にかきく
れて駒山彦の英姿をば伏拜むこそ殊勝なれ。嬉し涙に搔曇る、心の空を霽さむと、
駒山彦は衝立ち上り、

雪に輝く高白の
言靈別の司をば

山に攻め來る御軍の
撃つて捨てむと常世彦

松竹梅の宣傳使	北へ北へと進み来る	夜の旅路を重ねつつ	心も智利の國を越え	百日百夜の苦しみを	深山の奥に捨てられて	この世を救ふ宣傳使	光り輝く朝日子の	惜き生命をながらへつ	この世を救ふ皇神の	何かは堪らむ玉の緒の	鳥船よりは投げ下す	攻むる折しも大空を	常世の姫の仰せにて
如何ならむと煩ひつ	ハザマの森を乗り越えて	千座の罪もカルの空	足に任せて祕露の國	凌ぎて此處に村肝の	心も闇き谷底の	羽山津見の神となり	日の出神に助けられ	三笠の丸の船中に	情の網に掬はれて	生命消えなむ折柄に	激しき弾に碎かれて	轟き來る磐船や	數多の神軍引率し

縁えにしのいと糸あやつに操られ
冬ふゆとはい言はへどはる春山やまの

館やかたにた立ちもんないて門内の
様やうすうかが子をりから窺をふ折柄に

耳みみになじみ馴染いちげんのい一げん絃きん琴
そのことたま言こと靈たまも澄みす渡わたり

琴ことのねいろ音色すがすがもすが清すが々と
縫すがるおも思おもひもんのもん門くちの口

佇たたずむをりから折柄たけのひめ竹野ひめ姫
梅うめヶか香か姫ひめのおんすがた御姿

思おもひかみもゆるかけゆるぬゆる今日けふのひ日ひの
神かみのゆる許ゆるしゆるのゆるこのたい對面めん

春山はるやま彦ひこよなつひめ夏なつ姫ひめよ
月つき雪ゆき花はなのみむすめ三み娘むすめよ

榮さかえひさ久ひさしまつきまつ松まつのよ代よを
松まつ竹たけ梅うめのとこしへ永とこ久しへに

教をしへもひら開ひらくかみ神かみのまへ前
嬉うれしうれしよろこ嬉よろこしよろこ喜よろこばよろこし

御みめぐ惠みみふか深ふかきのだち野立のだち彦ひこ
野のだち立ひめのこ姫ひめやこ木このはな花はな姫ひめの

神かみのみこと命みことのごかうおん御高恩
遙はるかにかんしや感かん謝しやしたてまつ奉たてまつるる

と始はじめを終はりのものがたり物もの語がたり、
勇いさみにいさ勇いさむこま駒山やま彦ひこのその顔か、
他よ所そのみ見みるめ目めもいさ勇いさまましましまき。

(大正一一・二・一七 舊一・二一 北村隆光録)

第三章 栗毛の駒〔四二六〕

夫、娘や諸人の、信仰強き真心に、恥ぢ入り言葉も夏姫は、あからむ顔に紅の、
袖に涙を拭ひつつ、

あゝあさましの吾心 神の造りし神直日

心も廣き大直日 教の道に真心を

朝な夕なに籠め給ふ 春山彦の夫神や

月雪花の可憐し子の 神の大道に身を委ね

心を盡くし麻柱の 誠捧ぐる心根の

その健氣さに引換へて 母と生れし夏姫の

心の空は紫陽花の 色も褪せたる恥かしさ

日に夜に祈る神言の 清き尊き御教を

臨終の際に忘れ果て 女心のはしたなく

思ひ切られぬ愛惜心

絆の絲に繋がれて

解くに解かれぬ心の迷ひ

言ふに言はれぬ纏れ髪

奇しき御稜威の隈もなく

照らさせ給ふ神の前

あゝ恥かしや面目なや

神の御爲め國の爲め

世人のためになるならば

たとへ夫婦は生別れ

可憐しき娘の玉の緒の

絶えなむ憂きを見るとても

千引の岩の永久に

揺がぬ身魂となさしめ給へ

弱き女の心根を

笑はせ給はず諸人よ

春山彦よ月雪花の吾娘

拙き母と笑うては下さるな

焼野の雉子夜の鶴

子の可愛さに絆されて

歩み迷ひし心の闇

あゝ恥かしや恥かしや

松竹梅の宣傳使

見下げ果てたる夏姫と

笑はせ給はず幾千代も

吾身の魂を照させ給へ

と、慙愧の涙一時に、瀧津瀬のごと降る雨の、袖ふり當てて泣き沈む。
この場の憂を晴らさむと、御稜威も開く梅ヶ香の、姫の命の宣傳使、
聲淑かに、

あゝ勿體なや夏姫様 生みの母にも彌勝る

厚き尊き御志 何時の世にかは忘れませうぞ

春待ち兼ねて咲き匂ふ 花の蕾の梅ヶ香姫

げにあたたかき春山彦の 神の命の御情

木枯そよぐ冬の宵 妾を助け勞りて

心も堅き岩屋戸に 姉妹三人助けられ

何の不足も夏姫の 命の厚き御待遇し

神の恵みも高砂の 尾の上の松に木枯の

當りて冷たき人の世に 五六七の神の松心

堅磐常磐に松代姫 心も清き秋月の

姫の命の志 織弱き竹野姉君を

助けむ爲めに雪より清き神心 愛の女神の深雪姫

親子團居の睦まじき 六つの花散る初冬の

空に彷徨ひ道の邊に 橘姫のそれならで

旅に勞れし梅ヶ香姫 天教山にあらませる

木の花姫の御恵み 黄金山に現はれし

埴安彦や埴安姫の 命の生魂かからせ給ふ

春山彦の御情 五十六億七千萬年

五六七の御代の果てしなく 御夫婦親子の御情

どうしてどうして忘れませう 眞心深き夏姫様

何卒妾に心を配らせ給はず 三五教を守ります

神の御教に従ひて 玉の緒の御命を

堅磐常磐に保たせ給ひ 親子夫婦は睦まじく

日に夜に感謝の暮しを續かせ給へ 妾は纖弱き宣傳使なれど

山海の御恩を報ずるため 朝な夕なに御無事を祈り奉らむ

心も安くましましてや」

と聲も優しく述べ立つる。斯かる處へ、門前騒がしく村人の聲、

申し上げます、只今間の森に強力無雙の三五教の宣傳使現はれ、盛んに宣傳歌を歌ひ始めました。吾々村人は前後左右より十重二十重に取り巻いて生捕り呉れ

むと思へども、眼光鋭く何となく、威勢に打たれて進み寄ることが出来ませぬ。

何卒々々春山彦の命様、御出馬あつて彼の宣傳使を召し捕り給へ」

と門口より呼ばはるにぞ、春山彦を始め一同は思はず顔を見合せ、暫時思案に暮れけるが、春山彦は立ち上り、表に聞ゆる大音聲にて、

「常世神王の御家來、鷹取別の治し召す、間の國に參來り、三五教の宣傳歌うたふとは心憎き宣傳使、今打ち取らむ。者共先へ歸つて弓矢の用意いたせ、ヤア家

來共、駒の用意」

と呼ばはりたり。數多の村人はこの聲にやつと胸撫で下し、間の森に一目散に走り行く。春山彦は一同に向ひ、

『何事も、吾々が胸中に御座いますれば、何れも様は御安心の上、ゆつくり休息遊ばされよ』
と言ひ捨て、栗毛の駒に跨り、手綱かいくり、しとしとと表を指して進み行く。

(大正一・二・一七 舊一・二一 大賀龜太郎録)

第三四章 森林の囁(四二七)

宵闇の月は御空に照彦の、すたすた来る宣傳使、折柄降り来る村時雨、息を休めむと間の森に立寄つて雨宿りしながら、

『月は照る照る常世は曇る
間の森に雨が降る』

と歌つてゐる。木蔭に潜む四五の若者、

「ヤアマまた出たぞ、宣傳使だ。夜前出て来た奴は幽の字に靈の字だつたが、今夜の奴は力のある聲で歌つてゐるワ。到底此奴は吾々の手に合はぬ。村中が總出して此處を通さぬやうにせぬことには、鷹取別神さまに、貴様達は咽喉に居つて、何故ウカウカと宣傳使を常世の國に入れたかと言つて、村中のお目玉、また春山彦の司に何のやうに叱らるるかも知れぬ。それぢやと云つて吾々五六人では、到底捕捉まへることが出来ぬ。早く貴様ら各自手配して村中の者を招んで来い。俺は此處に見張りをしてゐる。」

「よし来た」

と、五六人の若者は東西南北に袂を別ち、月の光に照され家々を叩き廻る。照彦の宣傳使は、悠々として木株に腰打下し、

「ア、ア、何時見ても月の光は心持ちの好いものだ。況して森の木の間を洩れる月の影は一層氣味の好いものだ。併しながら、この間の國は常世へ渡る咽喉だ。今までのやうにウカウカとしては居られぬ。前後左右に心を配り、敵の奸計に陥

らぬやう、神様かみさまにお願いねがをいたさうかな。オーさうぢや』

と獨語ひとりごとちつつ拍手かしばての音おとを木靈こだまに響ひびかせ、音吐おんとらうらう朗々らうらうとして神言かみごとを奏上そうじやうする處ところへ、さ

しもに廣ひろき森林しんりんを縫ぬうて幾百いくひやくとも知しれぬ提燈ちやうちんの光瞬ひかりまたたき來きたる。見みる間まに照彦てるひこの周圍まはり

は黒山くろやまの如ごとく、提燈ちやうちんの火ひは夏なつの螢ほたるの如ごとく、遠卷とほまききに卷まきゐる。されど彼かれらは宣傳せんでん

使しの威勢みせいに恐おそれてか、一人ひとりとして近寄ちかより來きたるもの無なく、一方いつぱうの木蔭こかげに押おし寄せた

る男をとこ、

甲かぶ「オイ今度こんどの奴やつは中々なかなか手硬てごわいぞ。何どうしても春山彦はるやまひこの司つかさがお出いでにならなくち

や、マア六むつヶしいなあ』

乙おつ「ソウ心配しんぱいするな、今いまに栗毛くりげの駒こまに乗のつてお出いで遊あそばすのだ、チヤンと報告ほうこくが

してあるから』

甲かぶ「さうか、それなら大丈夫だいぢやうぶだ。早はやく來きて下くださるとよいがなあ』

丙へい「春山彦はるやまひこの神かみさまは智慧ちゑもあり力ちからもあり、情深なまげぶかいお方かただが、昨夜ゆふべも昨夜ゆふべとて、

それはそれは美うつくしい松竹梅まつたけうめとかいふ三人さんにんの娘むすめを、甘うまいこと自じ分の家うちへ引張ひっぱり込こ

で、御利益おためごかしに鷹取たかとり別わけにお渡わたしになつたと云いふことだ。俺おれは【つひ】よう行い

かなかつたが、隣の八公がさう言うてみたよ〇

甲かぶ 〇 そんなことは、俺も昨夜三人の娘が送られて行く時に見てをつたのだ。別嬪べっぴんだといつても大したものではないよ。まあ俺の女房に比べたらち、ちと位なものだ〇

乙おつ 〇 何を吐かしよるのだい。あのやうな立派な天人娘と、貴様の嬪と比べものになつて堪るかい。大神樂鼻の、鰐口の、出齒の、兔耳の、團栗眼みたやうな、碓臼うすに菰こも卷いたやうな醜態な嬪かかあを持ちよつて、ちと好いの、悪いのつて、よう呆とぼけたものだな。云うと濟まぬが、河豚の横跳びのやうな嬪かかあでも、貴様の目には柳のやうに見えるのだらう。俺達の手では一抱ひとかかへに抱かかへられぬやうな胸腹どてしほらをして、やがて臨月りんげつだとか云うて、昨日も俺おれ所ところへ貴様の嬪かかが出て來をつて、「すつぽんに蓼たてを噛かましたやうに鼻はなをペコつかせ、フースーフースーと苦しさうな息いきづかひをして居をつたが、俺おらあ、その時に鍛冶屋かぢやの鞆ふいこにでもしたら調法てうはふだと思おもつた位くらいだ〇

甲かぶ 〇 馬鹿ばかにすな。

一抱ひとかかへあれど柳やなぎは柳やなぎかな

だ。貴様のやうな部屋住が女の味を知つてたまるかい。なに程綺麗な御姫さまでも自分の自由にならねば、別嬪でも何んでもないワイ。自分の専有物にしてこそ立派な女だよ」

丙「よう、偉い權幕だなア、もうよう言はぬワ、フ、フ、フ、フ、」

斯く雑談に耽る折りしも、駒の蹄の音かつかつと馳せ来る一人の男あり。

村人「ヤア、春山彦の司だ。ア、これでもう吾々も安心だ。ヤー進め進め」

と虎の威を借る狐の勢ひ、俄に肩臂をいからしながら、宣傳使の方に向つてチクと四方八方より近づき迫つて来る。照彦は聲を張揚げて、

「神が表に現はれて 善と悪とを立別る

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

曲津の神は世に亡ぶ 月は照るてる常世は曇る

間の森の雨晴るる」

と歌ひ出せば、馬上の一人は宣傳使に向ひ、

「ヤアヤア、汝は三五教の宣傳使、此處を何と心得てをらるる。勿體なくも常世神王の御領分、鷹取別が管掌の下に、ウラル教を以て教を樹つる間の國。御上意だツ。神妙に手を廻されよ」

照彦はカラカラと打笑ひ、

「われこそは三五教の宣傳使、戸山津見の神なるぞ。惡逆無道の鷹取別に諂ひ、この世を曇らす惡魔の部下、耳をさらへてわが宣傳歌を聽け」

「ヤアヤア村人達、この宣傳使は不思議の魔力を以て、宣傳歌を歌ひ、汝等が身體を鐵縛りにいたす魔神であるぞ。われこそはウラル山の大神の神力を得て、神變不思議の術を得たれば少しも怖るることなし。汝らは力の弱き臆病者なれば、生命の惜しき奴は早くこの場を立去れ。汝らが遁げ去りし後は華々しき龍虎の争ひ、春山彦が生命を取らるるか、宣傳使を生擒りにして馬に乗せ、縛つてわが家へ連れ歸るか、二つに一つのこの場の境、足手纏ひにならぬうち早く立去れ」

と大音聲に呼はれば、群衆は各々提燈の火を吹き消し、雲を霞と遁げて行く。こ

の言葉に驚いて肝を潰し、腰をぬかした弱蟲共は、彼方に三人此方に五人と戦いでゐる。春山彦は又もや、

「ヤア村の者ども、残らず遁げ去つたか。グツグツいたせば險難だぞ」
彼方此方の森蔭より、

「モーシモーシ腰が抜けました、二、二、二、二、二、遁げられませぬ。どういたしませう」

春山彦は小聲で、

「ヤア困つた奴だな。腰は抜けても、耳は利いてゐる。コリヤ、迂闊したことは言はれない」

と呟きながら、

「ヤア三五教の宣傳使、この春山彦が現はれし上は、千變萬化の秘術あるとも到底叶ふまじ。速かにわが馬に乗つてわが館に來れ、取調ぶる仔細あり。」

久方の天津月日の照る中に

情けを知らぬ人のあるべき」

と歌ひかけた。腰の抜けた弱蟲連中はこの歌を聞いて、

甲「オイ、何だ、春山彦の司は……：久振り、つきものついた化物奴、人は知らぬと思ふか情けない、と仰有ったぞ」

乙「偉いな、流石は春山彦の司だ」

照彦はこの歌を聞いて、暫し頭を傾け考へみたりしが、

「昇る日に消えしと見えし星影は

消えしにあらざかくれたるなり」

と答へけるに、春山彦は宣傳使のわが意を悟りし事を悦び、

「汝三五教の宣傳使、今の言葉に依れば往生せしと見えたり。サア、早くこの駒に乗つてわが館に來れ」

と呼ばはる。宣傳使は、

「われは天下の宣傳使、汝が如き悪魔の家に伴はれ行くは汚らはしけれど、衆生濟度のために汝が馬に乗つて遣はずべし」
と云ふより早くヒラリと跨り、春山彦と轡を列べて、蹄の音高らかに館を指して走り行く。

(大正一一・二・一七 舊一・二一 高橋常祥録)

第三五章 秋の月〔四二八〕

緑紅こきまぜて

錦の機を織りなせる

秋の野山の小夜姫の
冷たき冬の木枯に

心も赤き紅葉を
朽も果てよとたたか

淋しきこの場の光景に
紅葉の如き手を拍つて
心の奥ぞ憫れなる。

花を添へむと立上り
歌ふも床し竹野姫

☐ 朝日は照るとも曇るとも
雨は降るとも晴るとも

雪は積むとも消ゆるとも
誠の神の護ります

教にならふ人の身は
地震雷火の車

百の災害千萬の
曲津の猛び襲ふとも

如何で怖れむ神の道
鷹取別は何者ぞ

常世神王何者ぞ
彼は人の子罪の御子

われは神の子神の御子
神に随ふ神の子の

如何で怖るることあらむ
春山彦や夏姫の

厚き心は千早振る
尊き神の御心に

叶かなひまつりて遠近をちこちの

尾をの上に猛たける曲津神まがつかみ

醜女しこめ探女さぐめも言こと向むけて

神かみの御前みまへに【かへり】言こと

申まをし給たまふは目まのあたり

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

間はざまの森もりに現あらはれて

聲こゑも涼すずしく宣傳歌せんでんか

歌うたひ來きたるは何人なにびとぞ

嬉うれしき便たよりを松竹まつたけや

梅うめヶ香か姫ひめの香かんばしく

開ひらかせ給たまへ神かみの【いづ】

生血いきちをしぼる鬼神おにがみの

醜しこの叫さけびも何なんのその

信しん仰かう強つよきわれわれに

刃は向むふ刃やいばはあらざらめ

鬼おにをもひしぐ鬼武彦おにたけひこ

旭あさひ、高倉たかくら今いま何處いづこ

月つき日の白狐びやくこ現あらはれて

今いまの惱なやみを救すくへかし

春山彦はるやまひこにふりかかる

その災厄わざはひを拂はらへかし

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

松竹梅まつたけうめと三みつ栗ぐりの

中なかの娘むすめと生うまれたる

竹野たけのの姫ひめが祈事ねぎことを

御空みそらも高たかく聞きこし召めせ

千尋ちひろの海うみの底そこにます

おとよねひめ 乙米姫も聞すらむ
 あらなみ 荒浪たける海原を
 わらは 妾を救ひしその如く
 みち 道の教の宣傳使
 やす いと安らげく聞し召せ
 たふと われは尊き宣傳使
 まも 守り給へや天津神
 すく 救はせ給へ黄泉神
 くも 雲を拂へよ科戸彦
 うづつ 貴の命や深雪姫
 いも 妹の命や駒山彦の
 いの 祈れよ祈れ神の前
 ふと 太き功も橘姫の
 かみ 神の命の宣傳使
 いの 祈れよ祈れ神の前
 みなと アタルの港を船出して
 ただよ 漂ひ來りし竹野姫
 いま 今現れませる麻柱の
 たひら 救はせ給へ平けく
 かみ 神は妾と俱にます
 かみ 神の身魂ぞ守ります
 めぐ 恵み給へや國津神
 とこよ 常世の國に塞がれる
 こころす 心澄みきる秋月姫の
 いさを 太き功も橘姫の
 かみ 神の命の宣傳使
 いの 祈れよ祈れ神の前

と歌ひ舞ふしをらしさ。

滴るしたた 皆月まなじりつきの眉まゆ 膚はだへも白しろく軟やはらかく

身みの「たけ」さへも長月ながつきの 三五さんごの月つきに擬まがふなる

秋月あきづき姫ひめは立たち上あがり 涼すずしき聲こゑは秋あきの野のの

草野くさのにすすだずく鈴すず蟲むしか 父ちちの歸かへりを松まつ蟲むしの

聲こゑも目め出で度たく歌うたひ舞まふ。

恵めぐみも深ふかき垂たらち根ねの 父ちちと母ははとに育はぐくまれ

春はる待まちかなし鶯うぐひすの ホーホケキヨ一の片かた言ことも

漸やっやくななれて姉おとどい妹いは 恵めぐみも厚あつき夏なつ姫ひめの

いと懐なつかしき母ははのそば 父ちちの命みことの御み恵めぐみは

山やまより高たかく澄すみ渡わたる 御み空そらを照てらす秋あき月つきの

わが身みをまもるありがたさ 月つき雪ゆき花はなと謳うたはれて

間はまの國くにに名なも高たかく 譽ほまれ輝かがやく春はる山やま彦ひこの

神の命の治す世は
 常世の春の永久に
 尾の上の松の末長く
 枝も榮ゆる葉も茂る
 茂れる松に丹頂の
 鶴も巢ぐへよ聖の世
 四方の民草睦び合ふ
 時こそあれや荒び來る
 八十の曲津に誘はれて
 神の教を破らむと
 鷹取別の醜神は
 あな恨めしきウラル教
 曲の教を楯として
 世人の心曇らせつ
 天の鳥船舞ひ狂ひ
 地に曲津見吼え猛り
 百千萬の禍も
 一度に起る黄泉國
 醜の軍を言向けて
 聖き神世に立直し
 百の民草救けむと
 木の花姫の現れまして
 人の言葉を刈菰の
 亂れたる世を固めむと
 心配らせ給ひつつ
 四方に間配る神使ひ
 遠き近きの八洲國
 【こし】の國まで出でまして

まつたけうめ 賢女や 月雪花の「くはし」女を

ひよき 引寄せ給ひ神國の 礎固く搗き給ふ

いさをし 功績ぞ尊けれ 功績ぞ畏けれ

あきづきひめ 秋月姫は聲も涼しく神明の高徳を陳べ、宣傳使の勞苦を謝したり。

たちま 忽ち門前に聞ゆる馬の嘶き、蹄の音、數多の人聲。夏姫は立ち上り門を開く折

しも、春山彦は、一人の宣傳使と共に馬に跨り、悠々と入り來たる。春山彦は馬

上より、

むらびとども 村人共、御苦勞千萬、最早かくなる上は大丈夫、一時も早く中依別の關所に報

らせ、駕籠を持ち來れ。われはこの宣傳使に就て、少しく取調ぶる仔細あれば、

あす 明日の夕方復び迎ひに來れ

だいおんじやつ 大音聲に呼はれば、數多の村人は、

「オー」

こた と答へて、潮の退く如く門前を立去りにける。春山彦はヒラリと飛び下り聲低に、

「照彦の宣傳使様、見苦しき荒屋、ゆるゆる御休息下さいませ。貴方にお目にかけたきものが澤山ござれば」
と聞く間もあらず照彦はヒラリと飛び下り、夫婦の案内につれて一同の前に、悠悠々として現はれにける。

（大正一一・二・一七 舊一・二一 外山豊二録）

第三六章 偽神懸（四二九）

馬を乗り捨て、春山彦と共に悠悠々々の場に現れたる戸山津見神の照彦は、一同の顔を見て大に驚き、
「オーこれはしたり、松、竹、梅の御姉妹、思はぬ處でお目に懸りました。御姉妹否御主人様、日に夜に心にかかる旅の空、何處の空に坐しますやと、明け暮れ空を仰いで雲の行方を眺め、心を煩はして居りました」

と落つる涙を袖に拭ふ。

松、竹、梅の三人は、

「そなたは照彦……いやいや戸山津見神殿、ようまあ御無事でゐて下さいました。これといふのも吾らを守り給ふ三五教の神の御恵み」と嬉し涙に暮れ居たる。

「イヤア照彦、ア、ではない戸山津見神殿、この夏は智利の山奥にて、いかいお世話になりました。イヤもうその時の苦しさ、友達甲斐もない男だと、駒山彦も一度は恨んで見たが、思ひかへせば何事も神様の御引き合せ、併しながら、もう何卒神懸りにならないやうに氣をつけて下さい」

照彦はワザと神懸りの眞似をして、

「ア、ア、」

「イヤー、また始まつた。この美しい七人の女神様の前で、吾々の恥を素破抜かれては堪まつたものでない。あゝどうか今日は皆さまに免じてお鎮まりを願ひます」

「ア」、、、、三五教の宣傳使、荒野に彷徨ひ唯一人、涙に咽ぶ腑甲斐なさ。

【イ】、、【い】ぢけた【イ】モリの【ベタ】ベタと、井戸の底を潜るやうに、

枉津に懼れて生命からがら此處まで出て來た誰やらの宣傳使。【ウ】、、珍山彦

に棄されて、動きの取れぬ谷の底、憂しや悲しや、蹇への、身はままならぬ百日

百夜、泣いて暮すか杜鵑。【エ】、、【え】らい元氣ではしやいで、後先見ずに

進み行く、向ふの見えぬ誰やらの宣傳使。【オ】、、可笑しかつたぞ、面白かつ

たぞ。恐ろしさうな顔をして、暗い谷間に残された、愚者の何處やらの宣傳使

「また言靈か、言靈の妙を得たるこの駒山彦には敵ふまい。よし此方にも覺悟が

ある。【ア】フンと致して泡を吹いたる、阿呆面のどこやらの宣傳使。三人の姫

を見失ひ、開いた口が閉まらなんだ、顎の達者な何處やらの宣傳使、哀れなりけ

る次第なりだ。【イ】、、【い】らざる理屈を拗ね廻し、そこら中の人間に、茨

のやうに忌み嫌はれる意地悪の【い】かさま宣傳使。【ウ】、、狼狽へ廻り、姫

の跡を血眼になつて騒ぎ廻り、夢にさへも囁言を喋くり、嘘は言うたか言はぬか

知らぬが、霜に【う】たれ頭を打ち、夢か現か三太郎か、馬に乗せられ生命から

がらここまで出て来た何處やらの宣傳使。【エ】、、、【エ】グイ責苦にあはさ
れて、腰を抜かし、人の前では豪さうに法螺を吹く、【オ】、、大馬鹿者の臆病
者、【オ】ケ【オ】ケ、もうそんな馬鹿な神懸りは、誰も聽手がないやうになる
ぞよ」

照彦は、

「カ、、」

と始め出す。

「イヤ、また神懸りが始まつたのか。こいつが神懸りになりよると、執拗いの
執拗うないのつて、腐り鯛が網に【ひつ】着いたやうに、容易に放れて呉れぬの
で困つて了ふ」

「【カ】、、烏を鷺と言ひくるめ、恥かき歩く何處やらの宣傳使。一つ言うては
頭搔き、遣り込められては恥を【か】く。【か】け替へのない一つの頭を粗末に
使ふ粕宣傳使。頑固一方の、神鯉節の【ガ】ツト蟲。【キ】、、北へ北へと進ん
で来たが、【き】つい嵐に吹き捲られ、際どい處で生命を助けられ、消ゆるばか

りの思ひをいたし、【き】つい戒め食うた何處やらの宣傳使。【ク】、黒い顔して熏つて、四十八癖を列べられ、谷底で【くたば】つた心の弱い、【ケ】、毛色の變つた、怪態な、吝な、【コ】、菟弱腰。【コ】ソ【コ】ソと二人の男に逃げられて、困り入つたる駒山彦の宣傳使」

「照彦の奴、どこまでも俺を馬鹿にするのか。これほどの多勢の前で悪言暴語を列べるか、善言美詞の神の教、守らぬ奴は枉津の容れ物。【カ】、勘辨ならぬぞ、覺悟はよいか。賣り言葉に買ひ言葉だ。まだこの上に勝手な熱を吹きよるなら、俺も澤山言分があるぞ。【キ】、【キ】リ【キ】リチャツトこの方の申すことを諾かばよし、聞き入れなくば聞くやうにして聞かしてやる。貴様のやうな奇態な面をして、氣違ひのやうな事を言つて、人に傷をつけ、奇的滅法界な枉津の神懸りを致し、人の氣に入らぬ事ばかり轉り、それで氣分がよいと思ふか。氣味の悪い手つきをさらしよつて、智利山の谷底で何を吐いた。【ク】、苦勞が足らぬから、もつと苦勞を致せと言つたぢやないか。二本の足を持ちながら、苦勞が辛さに馬に乗るとは何のこと。【ケ】、家來の身を持ちながら、主人を見

放し、【コ】、小賢しく【コ】セ【コ】セ小理屈を申す何處やらの宣傳使。言ふなら言へ、なんぼ言つても【こ】たへぬ此方、今までの駒山彦とはわけが違ふぞよ」

「【サ】、騒ぐな囁るな、酒を食うて酔うたよな、逆理屈は聞く耳持たぬ、【さ】ても【さ】ても騒がしい奴だ。【シ】、醜女探女に追ひかけられて、【ス】、【ス】ウ【ス】ウ息をはづませながら、【ス】タ【ス】タ逃げゆく【そこら】の宣傳使。雪隠で饅頭食つたよに、【ソ】、素知らぬ顔した臭い臭い宣傳使」

「オイ、照彦、言靈の練習をやるのか、言靈ならまた後でゆつくりと聞かう。もういい加減に【サ】、【さ】らりと止めたらどうだ。餘り【さ】し出ると【シ】、尻尾を出して遣らうか、【し】ぶとい奴だ。【ス】、酸いも甘いも辨へ知つた駒山彦を、【セ】、攻めやうと思つても、【ソ】、【そ】うはゆかぬぞ。【そ】の手は食はぬ秋鼠だ」

「【タ】、叩くな叩くな、顎を叩くな。高い鼻を捻折つて改心さして遣らうか。」

【チ】、力ちからも神徳しんとくもない癖くせに、【ツ】、次つぎへ次つぎへと理屈りくつを申まをす【つ】まらぬ奴やつ、月夜つきよに釜かまをぬかれたやうな詰つしまらぬ顔かほして、【テ】、天地てんちの間あひだを股またにかけ、途中とちゆうに踏ふん迷まようて柘と麵ちめん棒ぼうをふる、【ト】、呆とこぼけ面づらの何處どこやらの宣傳使せんでんし。【ト】
コ【ト】ンまで剥むいてやらうか

【タ】力の知しれた宣傳使せんでんしの言葉ことば。【チ】、一寸いちよつとも取り柄とえのない、【ツ】、詰つしまらぬ事ことを、【テ】、手柄てがら顔がほに喋しゃべくり散ちらして、仕舞しまひの果はてにや、【ト】、

【ト】ンブリ返かへりを打うちよるな、【ト】ツクリと自分じぶんの心こころに相談さうだんして見みよ
照彦てるひこ 【ナ】、怠情なまくらな事ことを言いふな、其邊中そこらぢうをウラル彦ひこの手下てしたに追おはれて

【ニ】、逃にげ廻まはし、【又】、脱ぬつた面つらして、【ネ】、猫ねこを冠かぶつて野良鼠のらねずみのやうに、【の】さばり歩あるく宣傳使せんでんし」

駒山彦こまやまひこだぞ、ソリヤ、ナ、何吐なにぬかす
と顔色かほいろを變かへ立上たちあがらむとする。不思議ふしぎや何時いつの間まにか身しん體たい強直きやうちよくして、首くびから下した

は又またもやビクともせなくなつてゐる。

オこイ駒山彦こまやまひこの宣せん傳でん使し、イヤ羽山津見はねやまづみ、一ひとつ立たつて【はね】廻まはつたらどうだ」

「オイ、また靈縛をかけよつたなア。此奴は降参々々、どうしてもお前には、この宣傳使も兜を脱がねばならぬワイ。改めて戸山津見神どの、今までの御無禮、平に御宥し下さいませ。ア、怪體の悪いことだ。無理往生をさせられて堪つたものぢやないワ」

照彦はウンと一聲。羽山津見は立ち上り、

「ア、これで鬼に鐵棒、おまけに羽の生えたやうなものだ。サアこれから常世の國へ行つて、鷹取別の羽をむしつて、跳ねてはねて跳ね廻つて、羽山津見にならうかい」

一同は聲を上げて思はず、

「ワハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、」

と笑ひ伏す。

春山彦「なんと神懸りと云ふものは妙なものですな、戸山津見の神さま、神懸りの時にはどんな御氣分になつて居られますか」
駒山彦「イヤ、春山彦さま、嘘ですよ。この男はいつもよく喋舌る癖があるので

すからなア。あんな事が神懸りであつて堪りますか、アハ、ハ、ハ、ハ

「それでも貴方、靈縛とやらかけられて、身動きも出来なかつただちやありませぬか」

「いや、一寸足が痺れたので立てなかつたのです。この場の興を添へるため、滑稽を演じてお目にかけたのですよ」

照彦「アハ、ハ、ハ、ハ、そらさうだ。お前もよく靈縛にかかつた様な眞似を上手にしたね。アハ、ハ、ハ、ハ」

夏姫「なんと貴方がたは氣樂なお方ですこと、今宵貴方を常世の國に連れ歸ると、鷹取別の家來の中依別が駕籠を持つて來るのですから、それまでに何とか用意をしなくてはなりません」

照彦「イヤ、御心配下さいませぬ。吾々には、神様のお護りがあります。確信が御座いますから」

と話す折りしも、又もや門外騒がしく、人馬の足音近寄り來る。春山彦は、
「どうやら捕手が來た様子、どうぞ御一同、奥の岩窟にお這入りを願ひます」

駒山彦「吾々は敵を見て旗を捲くは本意でござらぬ。捕手の来るを幸ひ、常世の國に連れ行かれ、跳ねてはねて跳ね廻り、一泡吹かせてやりませうかい」

「左様でもございませうが、吾々の願ひごと、どうぞ素直にお聞き下さいませやうに」

「イヤー主人の頼みとあれば仕方がない。サア、松竹梅の三人さま、暫く奥で休息いたしませうかい。ヤー戸山津見神殿、常世の國へ潔く行つて來い。吾々は後からお手傳ひに行くからな」

と言ひ残り、裏口さして悠々と出でて行く。

早くも中依別の配下は門口の鬨をまたげ、

「ただ今中依別の神、宣傳使を召捕りに参りました。どうぞお渡し下さいませ」

春山彦「大切の罪人、よく検めて受取られよ」

中依別は靜に、

「ヤア、宣傳使殿、氣の毒ながらこの駕籠にお召し下さい」

照彦は悠然として表に現はれ、

「オー、汝は惡逆無道の鷹取別の家來、中依別と申す者か、イヤー面白面白い。吾こそは三五教の宣傳使、常世の國に打渡り、汝の如き惡神を片端から言向け和し、誠の神の御教へに救ひやらむと此處まで來たのだ。ヤー出迎へ大儀だ。早くこれへ駕籠を持って。大切に昇げよ。途中に落しなど致すに於ては神罰立處だ。氣を注げて大切に送り申せ」

「汝罪人の身を以て、中依別に對し大膽不敵な廣言、吠面かわくな」
戸山津見は、莞爾としながら、駕籠の中に姿を隠したり。

「ヤー春山彦、天晴れあつぱれ褒美にはこれを遣はず」

と懷より數多の寶を取り出し、玄關に投げつけ、葦毛の駒にヒラリと跨り、數多の人を指揮しながら、中依別は悠々としてこの家を後に歸り行く。

照彦「アハ、ハ、ハ、狐にまた抓まれよつたな」

(大正一一・二・一七 舊一・二一 東尾吉雄録)

第三十七章 凱歌〔四三〇〕

朝日は空に照彦の、神の命の宣傳使、戸山津見と改めて、情も深き春山彦の、館に着くや、一息つく間もあらず、中依別の捕手の駕籠に乗せられて、怯めず臆せず、宣傳歌を歌ひながら、數多の人に送られつ、駕籠にぶらぶら揺られ行く。後に照彦は、窓の戸押し開き、大口開いて高笑ひ。

「ワアハ、ハ、ハ、ハ、よくも化されよつたなア。それにつけても雄々しきは、鬼武彦が白狐の働き、ア、面白し面白し。ヤアヤア駒山彦、松、竹、梅の宣傳使殿、春山彦御一家の方々、これへお越し遊ばされよ」

と聲高々と呼ばはれば、心轟く駒山彦、千騎一騎の胸も春山彦夫婦、親子は一時にこの場に現はれ、松代姫は言葉しとやかに、

「ヤア、そなたは照彦殿、何うしてマア無事に免れましたか。斯う云ふ間にも心が急く。またもや鷹取別の手下の者共、そなたの所在を探ね、引返し來るも計り難し。早くこの場を落ち行けよ」

「ワアハ、、、何さ何さ、たとへ鷹取別、鬼神を挫く勇ありとも、吾また
神變不思議の神術を以て、幾百萬の曲津見を、千變萬化に驅け惱まし、言向和し
麻柱の、神の教に歸順せしめむは案の内、必ず心配あらせられな。吾は今まで照
彦となつて、エルサレムの桃上彦命が僕となり、日に夜に汝ら三人を守護り居た
るは、天教山に現れませる木の花姫の御心にて神政成就の先驅をなし、黄泉比良
坂の戦鬪を治め、常世國に塞がれる八重棚雲を吹き拂ひ、隈なく照らす月照彦の
神の再来、照彦とは假の名、今は尊き天の數歌、一、二、三、四、五、六、七、
八、九、十。十の名に負ふ戸山津見の神、如何なる曲靈の來るとも、吾身のこの
世に在らむ限りは、案じ煩ひ給ふ事勿れ」
と初めて明かす身の素性。春山彦を始めとし、松竹梅や雪月花、駒山彦や夏姫も、
思はず顔を看守つて、何の辭もなかりける。またも聞ゆる人馬の物音、はて訝か
しやと、窓押し開けて眺むれば、黄昏の暗を照して、こなたに向かつて進み來る
高張提燈旗差物、遠山別が紋所、白地に葵の著く、風に揺られて瞬きある。
「あの旗印は擬ふ方なき遠山別、この場の秘密を窺ひ知つて、又もや捕手に向け

たるならむ。ヤア、方々、片時も早く裏庭を越え、巖室に忍ばせ給へ。春山彦の神力に依て、如何なる敵をも引受け申さむ。早く早く。と急き立つれば、

「アイ」

と答へて七人の女達、裏庭指して出でて行く。

照彦、駒山彦は突つ立ち上り、

照彦「ヤア、面白し面白し、曲津の張本遠山別、たとへ幾百萬の軍勢を引連れ攻め來るとも、この照彦が言靈の、伊吹の狭霧に吹き散らし、言向和すは目のあたり。春山彦殿、必ず懸念ひなされますな」

「實に有難き戸山津見の御仰せ。さりながら、吾らも間の郷の司神、女々しくも、助太刀を受け、敵を惱まし、卑怯未練と笑はれむより、吾は心を神に任せ奉り、生命の續く限り、吾言靈の有らむ限り言向和し、それも叶はぬその時は、この細腕の動く限り、劍の目釘の續くだけ、縦横無盡に斬り捲り、潔く討死仕らむ。貴神は暫く控へさせ給へ」

「ヤア、勇ましし勇ましし、照彦は奥庭に身をしのび、貴神が働き見物仕らむ。」

羽山津見來れ

と徐々と裏口開けて出でて行く。門の戸打破り、亂れ入り来る遠山別、家來の面々引連れて、遠慮會釋もなく座敷に駆け上り、

「ヤア、春山彦、松竹梅の宣傳使を鷹取別に送られしは天晴あつぱれ、さりなが

ら、汝には、月、雪、花の三人の娘ありと聞く。萬々一替玉にあらずやとの鷹取

別の御疑ひ、照山彦、竹山彦の證言もあれど、念のため、汝が娘三人を一度常世

へ伴れ歸り、眞偽を糺せよとの思召、君命拒むに由なく、遠山別、使者として罷

り越したり、速かに三人の娘を渡されよ」

と言葉鋭く居丈高、肩臂怒らし睨み入る。春山彦は、ハツと胸を衝きながら、決

心の色を浮べ、

「天にも地にも掛替なき三人の娘なれど、誰あらう鷹取別の御仰せ、否むに由な

し、謹しんで御旨を奉戴し、娘をお渡し申さむ。暫く待たれよ」

と語る折しも、月雪花の三人は、美々しき「みなり」の扮装にてこの場に現はれ、

三人一度に兩手をつき、

「これはこれは遠山別様、この見苦しき荒屋へ、よくこそ入來せられました。妾は仰せに従ひ、唯今より参りますれば、何分宜敷く御願ひ申します。ア、父母様、妾は往つて参ります。人間は老少不定、これが長のお別れにならうも知れませぬ、随分無事で、夫婦仲よく暮して下されませ」
と、三人一度に聲を曇らせ泣き沈む。

「ヤア、天晴々々、さても美しいものだ。春山彦殿、遠山別が良きに計らはむ。そなたは好い子を有たれたものだ。この娘を常世神王の小間使に奉らば、汝夫婦が身の出世、お祝ひ申す。アハ、ヤア、家來の者ども、この三人の娘を一時も早く駕籠にお乗せ申せ」

「ホーイ」

と答へて家來の大勢、三挺の駕籠を擔ぎ來り、三人の娘を乗せて後白浪と歸り行く。

春山彦は娘の駕籠を、月に透かして打眺め打ながめ、青息吐息つく折しも、照

彦を先頭に妻の夏姫、松竹梅の宣傳使、月雪花のわが娘、駒山彦も諸共に、一度にこの場に現はれ來るぞ不思議なる。

「ヤア、そなたは秋月姫、深雪姫、橘姫か、どうして此處へ歸り來りしぞ。警護厳しき駕籠の中、ハテ合點がいかぬ」

と兩手を組み、頭を垂れて思案顔。

「ヤア、春山彦殿、千變萬化の白狐が働き、最早この上は大丈夫、心を落付ければよ」

と、言はれて驚く春山彦。

「ア、有難や、又もや鬼武彦の御身代り」

と、兩手を合せ、神前に向つて手を拍ち聲も靜かに神言を宣る。神の仕組の引合

せ、三男七女の水晶の御魂も揃ふ十曜の神紋、一、二、三、四、五、六、七、八、

九、十と、天の數歌うたひながら、男女五人の宣傳使、親子五人は一齊に、心い

そいそ宣傳歌を歌ふ。

嚴いづの御魂みたまや瑞御魂みづみたま

十曜とえうの紋もんの現あらはれて

常世とこよの國くにはまだおるか

高砂島たかさごしまや筑紫島つくしじま

豐葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

島しまの八十島やそしま八十國やそくにに

三五さんごの月つきの御教みをしへを

残のこる限くまなく宣のべ傳つたへ

天地てんちの神かみの神業かむわざに

仕つかへ奉まつらむ吾われらの天職つとめ

あゝ面白おもしろし潔いさぎよし

間はざまの國くにを立出たちいでて

青葉あをばも茂しげる目めの國くにや

常世とこよの國くにの常世城とこよじやう

ロツキざん山さんに蟠わたかまる

八岐大蛇やまたをろちや醜神しこがみを

言向ことむけ和やはし千早ちはやぶ振ぶる

神かみの御國みくにに復かへし見みむ

かへす常磐ときはの松まつの世よを

五み六ろ七くの神かみの現あらはれて

千代ちよも八千代やちよも萬代よろづよも

天津あまつ日嗣ひつぎの動ゆるぎなく

月日つきひの如ごとく明あきけく

輝かがやき渡わたる神かみの國くに

輝かがやき渡わたる神かみの稜威いづ

嚴いづの御魂みたまの大御神おほみかみ

瑞みづの御魂みたまの大御神おほみかみ

月日つきひを添そへて十柱とほしらの

十曜の神旗勇ましく

天津御風に靡かせつ

曲の砦に攻め寄せむ

この世を造りし神直日

心も廣き大直日

直日に見直し聞き直し

七十五聲の言靈に

天地四方の民草を

靡かせ救ふ勇ましさ

日は照る光る月は盈つ

三五の月は中空に

輝き渡り天地を

支へ保てるその如く

太き功を三ツ星や

北極星を基として

數多の星の廻轉ること

百の御魂を言向け照し

オリオン星座に現はれし

救ひの神に復命

申さむためのこの首途

曲津の猛ぶ黄泉島

黄泉軍を足曳の

山の尾の上に蹴り散らし

河の瀬毎に吹き拂ひ

拂ひ清むる神の國

千秋萬歳萬々歳

堅磐常磐の松の世の

神の功ぞ尊けれ

斯^かく歌^{うた}ひ終^{をは}り、宣^{せん}傳^{でん}使^しは月^{つき}雪^{ゆき}花^{はな}の三^{さん}人^{にん}を伴^{とも}ひ、春^{はる}山^{やま}彦^{ひこ}夫^{ふう}婦^{ふう}に別^{わか}れを告^つげて、聲^{こゑ}
も涼^{すず}しく宣^{せん}傳^{でん}歌^かを歌^{うた}ひながら、メキシコ指^さして進^{すす}み行^{ゆく}。

(大正一一年・二・一七 舊一・二一 河津雄録)

(昭和一〇・三・三〇 王仁校正)

附録 第三回高熊山參拜紀行歌(二)

王仁作

高熊山參拜者名簿(二)

(大正十一年四月十三日 舊三月十七日)

(三)

頃は彌生の三の月 十七【日】の未明より (日笠吟三)

神の恵を【笠】に着て 各自に神歌を【吟】じつつ (志摩泰司)

【三志摩】ひ調へ【泰】然と 神の教の【司】人 (佐藤くめ)

道を【佐藤】りし信徒等 【くめ】ども盡きぬ清【新】の (新井眞子)

御【井】に湧き出す瑞【眞】魂 皇大神の教【子】が (龜田親光)

【龜】岡さして【田】どり行く 御【親】の神の御【光】に (大場徳次

郎)

皆照らされて【大】道【場】 神【徳】殊に著【次郎】く (氏家力雄)

永井の【氏】は【家】内中 誠の道に信仰の (同しげ)

【力雄】合せ茅【しげ】る 深山の靈地に【武勇】の士 (同武勇)

植芝柔術六段に 負はれて【ふみこ】む大本の (同ふみこ)

出口瑞月始めとし 一行勇み登り行く

【湯淺仁齋】先導に エチエチ【上】る胸突の (湯淺仁齋)

目まで【窪】んだ老人や 【純雄】塗った様な黒い面 (上窪純雄)

白い化粧の淑女たち 極【上】品な御【園】白粉 (上園あい)

實に【あい】らしき美人まで 【高】天原【野はる】ること (高野はる)

よるこび雨に【瓜生】身も いとはず高く【秀太郎】 (瓜生秀太郎)

神山さして【大木】の ふも【戸】搔き別けぐさぐ【さと】 (大木戸さ

と)

四邊^{あたり}【美馬】はし【邦】の祖 元つ御神【二】まかせつつ (美馬邦二)

上りて谷底ながむれば 【瓜】や茄子は【生】えねども (瓜生さち)

溢るる斗りの神の【さち】 魔神は【藤井】の【善太郎】氏 (藤井善太

郎)

遠き國より【北村】の 花咲く山の【八重】櫻 (北村八重)

【山本惣】勢元氣【吉】く 【小】松林や杉【林】 (山本惣吉)

神の【祐】けに百千【太郎】 家庭^{やには}【赤】山小幡【川】 (小林祐太郎)

うし【とらよ】りの穴太まで やうやう現はれ【北】の【村】 (赤川と

らよ)

イラカモ【光】る【祥】たさよ 【高山】低山立竝ぶ (北村光祥)
景色四方【八】方【朗】らかに 眼に入るぞ床しけれ (高山八朗)

(四)

【竹】の林に包まれた 【田】舎の村に細々と (竹田たつえ)

静かな煙【たつえ】竝 【土】を力に【井】そしみて (土井三郎)

太郎次郎や【三郎】が 【安】く楽しくいと【達】者 (安達儀一郎)

禮【儀】は【一】つも知らねども 家庭を【衛】る【藤】とさよ (衛藤)

寛治)

心は【寛】かに【治】まりて 【岩城】の如き田人等が (岩城由雄)

【由】りて仕ふる【雄】々しさよ 【田中】に聞ゆる【雅樂】の聲 (田)

中雅樂治)

【治】まる御代の尊とさに 【東】の空に朝日子の (東良俊)

光も別けて【良俊】や 月も【同】じく照り渡る (同佐多之)

世は日【佐】加【多之】末長く 日々に【新】に進みゆく (新島船良)

【島】漕ぎ渡る大【船】も 【良】とあしとの難波瀉 (同のし子)

八重【のし】ほ路を乗り【子】えて 【加】良國迄も開きゆく (加まち)

【まち】に待つたる【關森】の 神と仕へし【茂】穎が (關森茂)

梅花も薫る【宮】垣【地】 生れついでとの馬【鹿太郎】 (宮地鹿太郎)

腕白小僧と世に【高】く 名をたたへ【岸】太【平】の (高岸平八)

御代の恵みは【八】方に 潤ひ都も【稻村】も (稻村壽美)

【壽美】きり晴れて【永】遠【野】 千代【萬】代を幸【吉】と (永野)

萬吉)

祝ひ暮らすも神界に 盡せし【ため】の報いかな (同ため)

雲霧四方に【達磨】や 枉津の猛ぶ暗の世を (同達磨)

明【圭】て【介】くる神の道 永【いね】がひもやうやくに (同圭介・

同いね)

叶ひて今日は高熊の 神の御山へ【れい】参り (同れい)

心も【加藤明】らかに 【前】むも嬉し【澤】々に (加藤明子)

信徒伴なひ【治郎右衛門】 大き【小】さき【山】こえて (前澤治郎右

衛門)

神の【貞】め【之】神靈地 ながめ【吉野】の櫻木も (小山貞之)

殊更めでたく【光】る【俊】 穴太【西】條の【村】外れ (吉野光俊)

心の色も【新】らしく 【三】葉ツツジの謎の山 (西村新三郎)

雲【井】の【上】に【亮】かに 秀でて高き神の【前】 (井上亮)

【澤】田の姫の現はれし 元の由縁を【菊子】連れ (前澤菊子)

【村】々々と多人數 龜【岡】道場あとにして (村岡卯市)

【卯市】々々と進み来る 人も【幸村文治郎】 (幸村文治郎)

深き神慮は【白石】の 善男善女は野邊の道 (白石みちき)

あれを先にと【みちき】たる 浦【安】國の太【元】の (安元務)

誠の道の【務】ぞと 【東】西南北遠近【尾】 (東尾吉雄)

通じて三百五十人　【吉】き事のみ【雄】求めつつ
【青野】ケ原を【邦】もせず　【秀】た神山の【森】さして　（青野邦秀）
【良】き【仁】ばかり詣で行く　（森良仁）

（五）

世界の浄【土】と聞えたる　天の眞奈【井】の神の園　（土井靖都）
浦【靖都】の中心地　世の【大】本と【賀】^ほざまつる　（大賀龜太郎）
【龜】の齡の浦島【太郎】　再びこの世に現はれて
【清】けき【水】の魂となり　誠心のあり【竹】を　（清水竹次郎）
世にいち【次郎】くそそぎ行く　【池澤】沼も草原も　（池澤原治郎）
【原】^も始^との神世に克く【治】め　日【本】御魂の【莊】園を　（本莊宰甫）
神のまにまに【宰】しつつ　教の道を【甫】めたる
皇大神は押竝べて　【近】き【藤】きの隔なく　（近藤桃三）

【桃】花もかゝる【三】月三日 萬の苦難も【伊藤】ひなく
（伊藤孫四郎）

【孫】心盡して【四郎】しめす 黄【金】世界の和知の【川】
（金川善作）

【善】の御魂を【作】らむと 四方の【村】霧吹【岡】し
（村岡つね）
教へ【つね】がひつ【鈴木】野を 開いて【輝】す【吉】祥日
（鈴木輝吉）

川入れ火【彌吉】萬の 罪を拂ひて美はしき （同彌吉）
生命のつなを【延】ばしつ 體主靈從の行動を （同延吉）
互に戒め【吉田中】 心の【文雄】打明けて （田中文雄）

【山成】す思ひ【圓次郎】 【大】本【塚】んだ御【利】益は
（山成圓次郎）

【惣次】て世人の夢にだも 知らぬ尊とき限りなり （大塚利惣次）

敏【鎌】の月は中空に 【田】眞をかざして日光に (鎌田喜惣治)

光を【喜惣】ひ【治山】の 高【根】に上る神人の (山根菊太郎)

珍の聲をば【菊太郎】 【四方】の【國】まで三五の (四方國達)

教を廣く【達】せむと 【西^か】洋^らの【村】雲かきわけて (西村隆男)

【隆】々輝く桂【男】の 露にうるほふ【村野】人 (村野瀧洲)

落つる【瀧】水【洲】々と 岩【石】起伏の草【原】や (石原繁)

木立【繁】れる山【中】の 【森】の下蔭つたひつつ (中森篤正)

信仰【篤】き【正】人の 咽さへ【樋】々【川】かせつ (樋川徳太郎)

神【徳太】かき神の前 清【郎】至淨の春風も

涼しく吹いて【北村】の 【隆】熊山の花も【光】る (北村隆光)

伊豆のま【森】の【義一】^{よしかず}が 誠一つの御教を (森義一)

馬鹿【西田】とて神【直】日 心も廣く直詔し (西田直太郎)

聞直し【太郎】神の道 腹も【龍田】の紅葉もみぢばの (龍田富太郎)

都は如何に【富太郎】かも 【大山】小山すみ【壽美】の (大山壽美雄)

花【雄】かざして神の世に 【成田】る春は【常】永に (成田常衛)

清きま【衛】の【さく】くしろ 五十鈴の瀧の稜威たかく (同さく)

鳴り渡り【岸】神の國 八島の【彦】の【三】ツ御魂 (岸彦三郎)

【小】松【林】の現はれて 世を安【靜】に治めむと (小林靜子)

道も【勝】れし神人は 【又】もや進む神の【いき】 (勝又いき子)

【山】の尾ノ上に【崎】匂ふ 花の一【りん】手折らむと (山崎りん)

勇氣を【古】い汗の【川】 流して【こと】こと登り行く (古川こと)

【市間】人形の産心 克く【謙】り【二】心なく (市間謙二郎)

神と道とに誓【田中】 【清】き人々【次】々に (田中清次郎)

固き【石井】の胸の内 【藤吉】加喜の隔てなく (石井藤吉)

心の合うた信徒が 神の御徳を【御田村】の (御田村たく)

目出【たく】爰に山路を 【伊藤】ことなく【正】直まっすぐに (伊藤正男)

【男】々しく彼岸に【渡邊】の 【しづ】かに【同】じ【道子】行く
(渡邊しづ)

神は此世に【眞島】して 我等を守らせ給ふなり (同道子)

【良彌】神なき世なりとも 心の【奥】の【村】雲を (眞島良彌)

【宮】比【古】とばに詔り直し 御國も人も押なべて (奥村宮古・同よ

しの)

運氣【よしの】の神の國 【一】つ心に【城】かため (一城溪三)

【溪】波の國に現はれし 【三】ツの御魂のとう【藤井】教へ (藤井ち

よの)

【ちよの】礎つき固め 一【同勇】み合ふ【田中】 (同勇)

惠の露も【澤】々【二】 頂く我等は日の本の (田中澤二・同すゑの)

神の御【すゑ】の珍の御子 【高】天原の大【橋】を (高橋守)

【守】る誠の神柱 峻し【木山】も【健】かに (木山健三郎)

【三】の御魂に誘はれて 菅の【小笠】はなけれども (小笠原のぶ)

青野ケ【原】にし【のぶ】身の つまつ【田所】は神の【さと】 (田所
さと)

輔【佐】する人も【澤】々に 集まり來り末【廣】く (佐澤廣臣)

君と【臣】との大道を 【ちか】ら限りに【神】の【子】が (同ちか)

こころいそいそ石いその上 【古】事記を【川】水の (同神子)

流るる【こと】く説き諭す 【三】ツ葉ツツジの肉の【宅】 (古川こと・

三宅たけ)

國【たけ】彦の大神の 伊都の御楯【藤村】肝の (藤村伊之吉)

【伊之】知限りに【吉】々と 【生いく井の内】の【淺吉】まで (井の内淺

吉)

汲みて呑み込む【原】の中 【田壽】けの道をたどりゆく (原田壽道)

【同】じ心の【ともき】きて 尊き神の御教を (同ともき)

雲【井】の【上】まで【まき】上げて 天地の眞理を【はつ】揚し (井

上まき・同はつ)

【谷】の【川】水【常】永に 【清】く流るる【土井】の川 (谷川常清)

世界を洗ひ限りなき 神の御【幸雄】四方の國 (土井幸雄)

【鈴木】の原や【鹿】ぞ住む 【三】山の奥の奥までも (鈴木鹿三郎)

世界改造の神界の 經綸の【由夫】開きゆく (同由夫)

(以下次卷)

~~~~~

靈界物語 第九卷 靈主體從 申の卷

終り